

比屋根遺跡

—災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021（令和3）年3月

沖縄市教育委員会

比屋根遺跡

—災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021（令和3）年3月
沖縄市教育委員会



卷頭図版1 調査区遠景 北西より



卷頭図版2 調査区遠景 北より

はじめに

本報告書は沖縄市が行う災害時緊急避難通路整備工事に伴い、埋蔵文化財発掘調査を実施した「比屋根遺跡」の調査成果をまとめたものです。

比屋根（方言ではヒャーグン）は、比屋根小学校が開校する等、人口が増加し都市化が進んでいますが、古い文献にもその名が見られる歴史ある集落であり、昔から現在へつながる人々の営みの証が残されている地域です。

比屋根遺跡は、『琉球国由来記（1713年）』によると、比屋根の旧集落北東側の丘陵に所在するオシアゲ森（ムイ）と呼ばれる御嶽であり、拝所等が複数見られる比屋根地域において重要な場所となっています。

今回、比屋根遺跡の一部の発掘調査を行い、グスク時代から近世・近代にかけての遺構や遺物が多数出土し、比屋根地域の形成・発展をはじめ、沖縄市東部の集落形成の歴史の一端を垣間見ることができました。

この調査成果が学術研究の一助になり、市民の歴史文化への理解を深め、多くの方々に活用していただけることを願います。

今回の発掘調査ならびに、本報告書を作成するに際し、ご指導ご協力をいただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

2021（令和3）年3月

沖縄市教育委員会
教育長 比嘉 良憲

例　言

- ・本書は、沖縄県沖縄市字比屋根に所在する比屋根遺跡の発掘調査報告書である。
- ・調査は災害時緊急避難通路整備工事に伴う事前の記録保存調査として沖縄市役所道路課が費用を負担し、沖縄市教育委員会が実施したものである。
- ・本書は、平成 27（2015）年度に実施した比屋根遺跡の埋蔵文化財発掘調査成果を、平成 29（2017）・令和 2（2020）年度に資料整理作業を行い、まとめたものである。
- ・本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
- ・第 1 図は、国土地理院の電子地形図 25000 から調査地周辺のデータを取得し、編集、加筆したものである。
- ・第 2 図は、米軍が 1948 年に作成した地形図を合成して調整を行ったものに、編集、加筆したものである。この地形図のデジタル化画像は沖縄県立公文書館が所蔵しており、承認を得て掲載した。
- ・資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に指導・資料の同定をいただいた。記して謝意を表したい。
- ・本書の編集は繩田雅重の指示のもと、有限会社ティガナーの川端博明・慶田秀美・喜屋武朋子・譜久里昌代・友寄英人が行った。
- ・本書の執筆は沖縄市立郷土博物館の繩田雅重・島田由利佳、有限会社ティガナーの川端博明・慶田秀美・譜久里昌代・喜屋武朋子が行った。
- ・本書の執筆は下記の分担によった。

第Ⅰ章・第Ⅱ章	第 2 節・第Ⅳ章	繩田雅重
第Ⅲ章	第 1 節	島田由利佳
第Ⅲ章	第 1 ~ 4 節	川端博明
第Ⅲ章	第 4 節	譜久里昌代（貝製品・骨製品・貝類遺体） 喜屋武朋子（脊椎動物遺体） 慶田秀美（遺物観察一覧表）
- ・発掘調査で得られた出土遺物・図面・写真等の記録類は、沖縄市立郷土博物館に保管されている。

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査体制.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	3
第4節 整理作業の経過.....	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	7
第1節 自然的環境.....	7
第2節 歴史的環境.....	7
第Ⅲ章 調査方法と成果.....	11
第1節 調査の方法.....	11
第2節 層序.....	13
第3節 遺構.....	19
1. 石積み.....	19
2. 集石.....	24
3. 貝溜まり	24
4. 土坑 1.....	26
5. 土坑 2.....	27
6. 土坑 3.....	28
第4節 遺物	31
1. 土器・カムイヤキ.....	32
2. 青磁.....	34
3. 白磁.....	42
4. 青花.....	44
5. その他の輸入陶磁器.....	46
6. 本土産陶磁器.....	48
7. 沖縄産陶器.....	49
8. 円盤状製品.....	59
9. 土製品.....	59
10. 瓦.....	59
11. 金属製品.....	61
12. 銭貨.....	62
13. 石器.....	65
14. 貝製品・骨製品.....	65
15. 自然遺物	71
第Ⅳ章 総括	83

挿 表

第 1 表 土層観察表.....	18	第 20 表 瓦觀察一覽.....	59
第 2 表 出土遺物一覧.....	31	第 21 表 瓦出土一覧.....	61
第 3 表 土器・カムイヤキ出土一覧.....	32	第 22 表 金属製品出土一覧.....	61
第 4 表 土器観察一覧.....	32	第 23 表 金属製品觀察一覧 1 ~ 2.....	61
第 5 表 青磁出土一覧.....	34	第 24 表 錢貨出土一覧.....	62
第 6 表 青磁観察一覧 1 ~ 3.....	34	第 25 表 錢貨觀察一覧.....	62
第 7 表 白磁出土一覧.....	42	第 26 表 石器出土一覧.....	65
第 8 表 白磁觀察一覧.....	42	第 27 表 石器觀察一覧.....	65
第 9 表 青花出土一覧.....	44	第 28 表 貝製品・骨製品出土一覧.....	66
第 10 表 青花観察一覧.....	44	第 29 表 貝製品・骨製品觀察一覧.....	67
第 11 表 その他の輸入陶磁器出土一覧.....	46	第 30 表 貝類遺体の生息場所類型表.....	71
第 12 表 その他の輸入陶磁器観察一覧.....	46	第 31 表 貝類遺体の分類と生息場所類型.....	73
第 13 表 本土産陶磁器出土一覧.....	48	第 32 表 貝類遺体出土一覧 (巻貝 1 ~ 2).....	74
第 14 表 本土産陶磁器観察一覧.....	49	第 33 表 貝類遺体出土一覧 (二枚貝 1 ~ 3).....	76
第 15 表 沖縄産陶器出土一覧 1 ~ 2.....	49	第 34 表 ブタ・イノシシ出土一覧.....	79
第 16 表 沖縄産陶器観察一覧 1 ~ 2.....	51	第 35 表 ウシ・ウマ出土一覧.....	80
第 17 表 円盤状製品出土一覧.....	59	第 36 表 ジュゴン・海獣・ヤギ・トリ・イヌ・種不明出土一覧.....	81
第 18 表 円盤状製品観察一覧.....	59		
第 19 表 土製品觀察一覧.....	59	第 37 表 魚類出土一覧.....	81

挿図図版

第 1 図 調査区周辺の遺跡.....	8	第 24 図 青磁 3.....	39
第 2 図 調査区の位置.....	9	第 25 図 青磁 4.....	40
第 3 図 調査区のグリッド設定図.....	11	第 26 図 青磁 5.....	41
第 4 図 調査区の現況.....	12	第 27 図 白磁.....	43
第 5 図 調査区のセクションポイント.....	14	第 28 図 青花.....	45
第 6 図 調査区 断面図 1.....	15	第 29 図 その他の輸入陶磁器.....	47
第 7 図 調査区 断面図 2.....	16	第 30 図 本土産陶磁器.....	53
第 8 図 調査区 断面図 3.....	17	第 31 図 沖縄産陶器 1.....	54
第 9 図 石積み 位置図.....	20	第 32 図 沖縄産陶器 2.....	55
第 10 図 石積み 1 基底部 平面・立面図.....	21	第 33 図 沖縄産陶器 3.....	56
第 11 図 石積み 2 平面・立面図.....	22	第 34 図 沖縄産陶器 4.....	57
第 12 図 近世~ヘグスク時代遺構 位置図.....	23	第 35 図 沖縄産陶器 5.....	58
第 13 図 集石 平面・断面図.....	24	第 36 図 円盤状製品・土製品・瓦.....	60
第 14 図 貝溜まり 平面・断面図.....	25	第 37 図 金属製品 1.....	63
第 15 図 獣骨出土状況 平面・断面図.....	25	第 38 図 金属製品 2.....	64
第 16 図 土坑 1 平面・断面図.....	26	第 39 図 錢貨.....	64
第 17 図 土坑 2 平面・断面図.....	27	第 40 図 石器.....	68
第 18 図 土坑 3 平面・断面図.....	28	第 41 図 貝製品 1.....	69
第 19 図 近世造成土の検出状況.....	29	第 42 図 貝製品 2・骨製品.....	70
第 20 図 調査区の全掘状況.....	30	第 43 図 貝類遺体種別検出状況.....	72
第 21 図 土器.....	33	第 44 図 貝類遺体層別検出状況.....	72
第 22 図 青磁 1.....	37	第 45 図 貝類遺体生息場所類型組成.....	72
第 23 図 青磁 2.....	38		

写真図版

巻頭図版 1 調査区遠景 北西より

巻頭図版 2 調査区遠景 北より

図 版 1 調査状況 1	4	図 版 22 その他の輸入陶磁器	105
図 版 2 調査状況 2	5	図 版 23 本土産陶磁器	106
図 版 3 整理作業状況	6	図 版 24 沖縄産陶器 1	107
図 版 4 調査区の現況・伐採後状況	87	図 版 25 沖縄産陶器 2	108
図 版 5 石積み 1	88	図 版 26 沖縄産陶器 3	109
図 版 6 石積み 2	89	図 版 27 沖縄産陶器 4	110
図 版 7 手序	90	図 版 28 沖縄産陶器 5	111
図 版 8 集石・貝溜まり	91	図 版 29 円盤状製品・土製品・瓦	112
図 版 9 貝溜まり・骸骨	92	図 版 30 金属製品 1	113
図 版 10 土坑 1・土坑 2	93	図 版 31 金属製品 2・銭貨	114
図 版 11 土坑 3・ピット	94	図 版 32 石器	115
図 版 12 近世の遺物包含層・近世の造成土検出状況	95	図 版 33 貝製品・骨製品	116
図 版 13 完掘状況	96	図 版 34 卷貝 1	117
図 版 14 土器	97	図 版 35 卷貝 2	118
図 版 15 青磁 1	98	図 版 36 二枚貝 1	119
図 版 16 青磁 2	99	図 版 37 二枚貝 2	120
図 版 17 青磁 3	100	図 版 38 二枚貝 3	121
図 版 18 青磁 4	101	図 版 39 脊椎動物遺体 1	122
図 版 19 青磁 5	102	図 版 40 脊椎動物遺体 2	123
図 版 20 白磁	103	図 版 41 脊椎動物遺体 3	124
図 版 21 青花	104		

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

比屋根遺跡は比屋根の旧集落の北東側に位置し、大殿（ウフドゥン）等の拝所や獅子屋が所在するオシアゲ森（ムイ）と呼ばれる丘陵に位置する。この比屋根遺跡が所在する丘陵に災害時緊急避難通路の整備が行なわれることとなった。

沖縄市役所道路課より2013（平成25）年11月26日付で「文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」を受け、同年12月12日付で「文化財の所在の有無及びその取扱いについて（回答）」において、計画予定地には比屋根遺跡が所在し保護対象であり、調整が必要である旨の回答を行なった。

その後、2015（平成27）年3月16日から19日にかけて10ヶ所、2015（平成27）年6月24・25日にかけて3ヶ所の計13ヶ所で試掘調査を実施し、一部で、近代から古くはグスク時代に遡る可能性のある遺物包含層を確認した。災害時緊急避難通路整備が、埋蔵文化財へ影響を与えるため記録保存調査を実施することで調整を行なった。費用は沖縄市役所道路課が負担し、調査は沖縄市教育委員会で実施することとなった。

沖縄市長より文化財保護法第94条第1項に基づき、2015（平成27）年10月19日付け沖市道第1019006号「埋蔵文化財発掘の通知について」が県宛てに提出され、沖縄県教育委員会より2015（平成27）年10月26日付け教文第1145号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が出され、発掘調査を実施するよう通知が行なわれた。

2015（平成27）年11月18日より、現場における発掘調査業務に着手し、2016（平成28）年2月12日に調査は終了した。

第2節 調査体制

2015（平成27）年度 発掘調査業務

調査主体	沖縄市教育委員会	教育長	狩俣 智
調査責任者	〃	教育部長	比嘉 良憲
	〃	教育部次長	崎山 尚也
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	新里 邦一
調査総括	〃	文化財係長	比嘉 清和
調査担当者	〃	学芸員	繩田 雅重
植生調査協力	沖縄市文化財調査審議会	会長	池原 直樹
事業協力者			八田 夕香 比嘉 二規

発掘作業支援業務委託 有限公司 ティガネー

2017（平成 29）年度 資料整理業務

調査主体 沖縄市教育委員会

調査責任者	"	教育長 狩俣 智
	"	教育部長 森川 政寿
	"	教育部次長 森山 雅人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長 新里 邦一
	"	副館長 尾崎 江利子
調査総括・担当者	"	文化財係長 繩田 雅重
事業協力者		八田 夕香

出土遺物整理作業業務委託 有限会社 ティガネー

2020（令和 2）年度 資料整理及び報告書発刊業務

調査主体 沖縄市教育委員会

調査責任者	"	教育長 比嘉 良恵
	"	教育部長 島袋 秀明
	"	教育部次長 兼本 正人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長 盛島 久代
	"	副館長 徳嶌 智彦
	"	副主幹 比嘉 清和
調査総括・担当者	"	文化財係長 繩田 雅重
指導・助言	沖縄県教育庁文化財課	主任専門員 新垣 力
	沖縄県立埋蔵文化財センター	主任専門員 瀬戸 哲也
事業協力者		島田 由利佳
		曾木 菊枝
		長堂 紗
		八田 夕香

資料整理及び報告書発刊作業等支援業務委託 有限会社 ティガネー

第3節 発掘調査の経過

現地での発掘調査は2015（平成27）年11月18日から開始し、2016（平成28）年2月12日までの日程で行った。それに先駆け、11月8日に調査区周辺の植生調査を実施している。以下、主な作業内容についてその概要を時系列に記す。

- ・現況の記録作業 [2015（平成27）年11月18日～同月27日]

調査区とその周辺の調査前の現況は、雑草が繁茂し低木や高木も散見される状態であった。さらに、調査区の北東に隣接する獅子屋と伊礼門中の拝所が所在する方形状の平坦な区画から、その西側を通る里道へと繋がる小道の東西端部に2基の石積みが残存していた。調査はまず、地形測量を含めたこれら現況の記録作業及び石積みの精査を行うべく、2015年11月18日に伐操作業から開始した。伐操作業と並行して磁気探査を行い、調査区表層下の安全を確認後に石積みの精査を実施した。11月27日までに、現況の地形測量と2基の石積みの写真測量及び撤去を済ませ、重機掘削に備えた。

- ・重機掘削 [2015（平成27）年11月30日～12月4日]

表土層・現代の造成・攪乱層除去を目的とした重機掘削は、調査区内の土層観察用セクションベルトの位置を割付後に行い、調査区の南半から北半へと進めた。作業期間は11月30日から12月4日である。

- ・人力掘削 [2015（平成27）年12月7日～2016（平成28）年1月22日]

人力掘削は12月7日に調査区内の遺物包含層検出状況の写真撮影を行い、翌日から着手した。まず調査区の短軸方向にサブトレンチを2箇所設定して斜面地での層の堆積状況の把握から始めた。掘削の結果、近世の遺物包含層と、同時期と推定される造成土（整地土）の堆積を再確認した。そこで、造成土までの掘削を第一段階、造成土の掘削を第二段階として区切り、作業を進めた。第一段階は12月8日から翌年の2016年1月10日にかけて実施した。第一段階の掘削作業中に、集石・貝溜まりや、近世期の造成土（整地土）上面で遺構を数基発見している。第二段階の掘削もサブトレンチの掘削を先行させ、本格的な掘削は1月12日から開始した。近世期の造成土（整地土）の掘削と並行して調査区内の土層観察用セクションベルトを除去し、1月15日からは造成土直下のグスク時代の遺物包含層の掘削を行い、1月22日には調査に伴う掘削作業を全て終了させた。各遺構の実測等の記録作業もこの期間内において隨時行っている。

- ・現地見学会 [2016（平成28）年1月24日]

今回の調査結果を一般公開すべく、現地見学会の計画・準備を行ったが、当日はあいにく雨天のため、見学会の中止を余儀なくされた。ただし、中止が分からず来場する方々を想定して、調査区の南東約50mにある比屋根地域のアシビナーに仮設テントを設置し、調査写真のパネルと出土遺物を展示して来場者への対応を行った。

- ・最終記録作業と調査区の現状復旧 [2016（平成28）年1月25日～2月12日]

調査区壁面の写真撮影・写真測量実施し、調査区完掘状況の俯瞰・斜め写真撮影をドローンにて行った。全ての撮影データを確認後、即座に調査区の埋め戻し作業を開始し、現地での発掘調査は2月12日に全て完了した。



伐採作業（重機）



伐採作業（人力）



磁気探査（表層）



磁気探査（経層）



石積みの精査



現況の地形測量



石積みの写真測量



石積みの除去

図版1 調査状況1



重機掘削



重機掘削



人力掘削



遺構掘削



遺構の写真測量



完掘状況の写真測量



現地見学会



現地見学会用パネル展示

図版2 調査状況2

第4節 整理作業の経過

整理作業の業務は2017（平成29）年度と2020（令和2）年度の2年度行い、両方とも業務委託として実施した。以下、各年度の主な作業の概要を時系列に記す。

1. 2017（平成29）年度の整理作業

2017（平成29）年度は出土遺物の基礎整理作業を行った。対象となる遺物は約1,900点で、具体的な作業としては、注記・接合・復元・集計・金属製品の保存処理である。

7月27日～8月23日にかけて注記作業を行った後、接合及び実測用遺物の選定作業を9月22日まで行った。ピックアップ遺物の復元作業を10月4日で終了し、最後に集計作業を実施した。

出土遺物の中には保存処理が必要な金属製品が含まれていたため、それらの保存処理も上記作業と並行して実施した。

2. 2020（令和2）年度の整理作業

2020（令和2）年度は実測・写真・本報告書の作成と印刷・製本を行った。2017（平成29）年度の基礎整理で選定された遺物の実測・トレイス・写真撮影等を行い、最終工程として文書・挿図・写真図版等全てのデジタルデータをAdobe InDesignで統合し、編集を行った。



図版3 整理作業状況

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 自然的環境

沖縄市は、沖縄島の中央部に位置し、県都・那覇市から北東に約20kmの距離にある。総面積49km²、人口142,973人、世帯数64,380世帯（沖縄市人口統計2021年1月1日現在）である。地形としては、中城湾に面する東海岸部の低地から西北部の丘陵地へと斜面地域が広がっており、市域の9割は標高100m以下である。この地形は地質に由来し、その大きな特徴として、市域を流れる比謝川や天願川をおおよその境界とし、沖縄島の北側と南側で地質が異なる。その境界部分にあたる本市域は、北側は沖縄島北域に広く発達している名護層であり、約4,000～7,000万年前に形成された変成岩からなる。南側には沖縄島南部一帯に広く発達する、約200～500万年前に形成された泥岩からなる島尻層が見られる。加えてその島尻層域中央部（胡屋～知花）には基盤の島尻層を琉球層群石灰岩層と砂礫層が不整合に広く覆っている。その地域の特徴的な地形として、石灰岩層の浸食残留地形（円錐カルスト）が列をなして点在する。島尻層域東部（古謝～与儀）は標高100m以下の小起伏の丘陵地形となる。その丘陵上を広い盆状の谷（浅谷）が刻み、沖積層をもつ平坦な谷底地と傾斜が緩やかな孤立上の丘が混在する。

比屋根遺跡は、沖縄市比屋根に所在、旧比屋根集落の北東、標高約47mに位置し、島尻層群泥岩層の小丘陵上に形成され、丘陵東斜面は急傾斜となっているが、西側斜面は比較的緩やかとなる。

第2節 歴史的環境

沖縄市の市域には先史時代の遺跡である室川貝塚や仲宗根貝塚などがあり、少なくとも約4,000年前から人々が暮らしていたことが分かっている。グスク時代には、越來グスクや知花グスクをはじめ遺跡が点在しており、沖縄市東部には、比屋根遺跡、大里エーヤマ遺跡、満喜世遺跡、与儀遺跡等が確認されている。そのうち比屋根遺跡や大里エーヤマ遺跡、与儀遺跡については、麓にそれぞれの集落を望む丘陵上に立地し、地域の拝所も所在することから、集落の変遷がうかがえる場所となっている。

琉球国時代には、行政区として間切（現在の市町村にあたる）制度がつくられ、沖縄市域の大半は越來間切となった。1666年には越來間切から与儀・比屋根・西原（現美里）以下15村を分離して美里間切が新設された。

1879年には廃藩置県によって沖縄県となり、その後、それまでの間切が村に改められ、越來村、美里村が生まれた。太平洋戦争末期には、沖縄県は壮絶な地上戦にまみわれ、多くの犠牲者を出した。

戦後、越來村は、コザ村を経てコザ市となり、1974年コザ市と美里村が合併して「沖縄市」が誕生した。

比屋根地域は、琉球国時代には美里間切に含まれ、『絵図郷村帳（1649年）』にその名が見られる古い集落である。比屋根遺跡が所在する小丘陵は『琉球国由来記（1713年）』に「オシアゲ森（ムイ）」と記載される御嶽に相当する。頂上部には「大殿（ウフドゥン）」と呼ばれる比屋根地域の拝所があり、『琉球国由来記』に記載されている「比屋根之殿」に当たると考えられている。

比屋根遺跡の所在する丘陵の南から南西にかけての斜面には、方形形状の平坦な区画が階段状に複数見られ、比屋根地域の獅子屋や門中の拝所が複数所在し、その他は耕作地等になっている。この区画には、古い屋敷跡と考えられるものもあり、戦前の比屋根集落の前身だった可能性が考えられる。

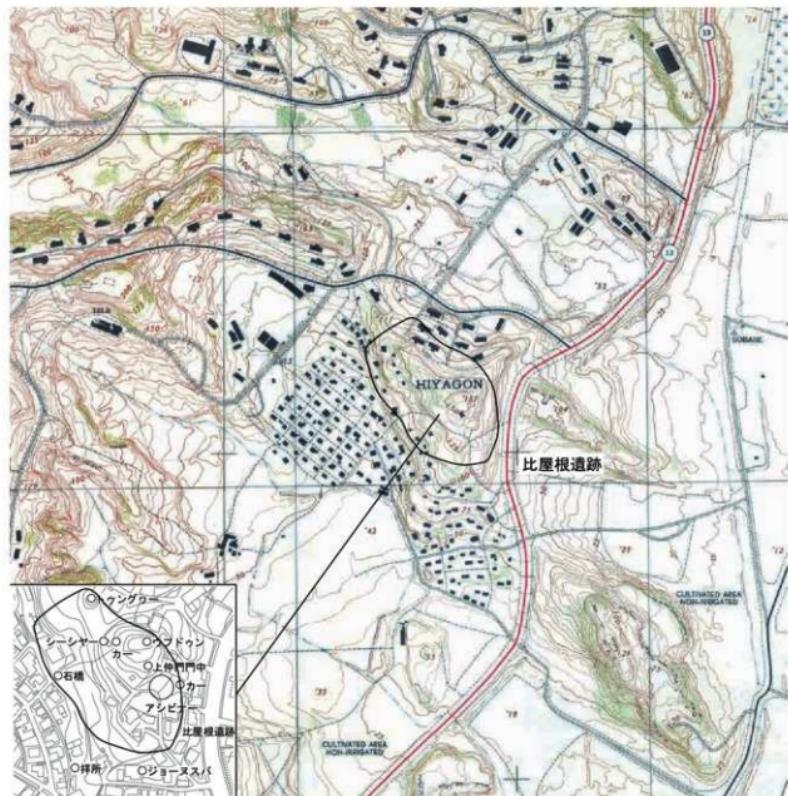
また丘陵の北西側には、独立した小山があり、『琉球国由来記』では「小獄」と記載され、「佐久



第1図 調査区周辺の遺跡

真之殿」に比定されると考えられる「殿小(トゥングワー)」が所在する。元々「オシアゲ森」と「小獄」はなだらかにつながった地形だったが、戦後の造成で削られ「小獄」は小山状となっている。本来は大殿が丘陵頂上部に位置し、殿小は北西側になだらかに下る丘陵突端部に位置していたと考えられる。

比屋根遺跡は、沖縄市教育委員会が1981（昭和56）年度に実施した遺跡詳細分布調査で、土器や青磁等の中国産陶磁器、沖縄産陶器等が表採され、グスク時代から近世・近代にかけての遺跡であることが確認されている。比屋根遺跡を含む丘陵一帯は、古くはグスク時代から近世・近代を経て現在にいたるまで、脈々と人の営みの痕跡が見られ、集落の変遷過程を考える上で貴重な場所である。



第2図 調査区の位置

※この位置図は1948年に米軍が作成した地形図に今回の調査区を加筆したものである。

参考文献

沖縄市教育委員会	『沖縄市の埋蔵文化財』遺跡分布調査報告書	1982 年
沖縄県	『土地分類基本調査 沖縄本島中南部地域 「那覇」「沖縄市南部」 「糸満」「久高島」5 万分の 1』	1983 年
沖縄市教育委員会	『沖縄市史 第 2 卷 資料編 I 文献資料にみる歴史』	1984 年
沖縄市教育委員会	『室川貝塚』 沖縄市文化財調査報告書第 20 集	1997 年
沖縄市教育委員会	『馬上原遺跡』 沖縄市文化財調査報告書第 22 集	2000 年
沖縄市教育委員会	『沖縄市の遺跡』 沖縄市文化財調査報告書第 28 集	2002 年
沖縄市役所	『沖縄市史 第 4 卷 自然・地理・考古編 - 自然編 -』	2007 年
沖縄市役所	『沖縄市史 第 4 卷 自然・地理・考古編 - 地理・考古編 -』	2008 年
沖縄市役所	『沖縄市史 第 3 卷 民俗編 - CD 編 -』	2015 年
沖縄市役所	『2015 年 沖縄市市勢要覧』	2015 年
沖縄市立郷土博物館	『沖縄市の自然 やんばるの入口』	2016 年

第III章 調査方法と成果

第1節 調査の方法

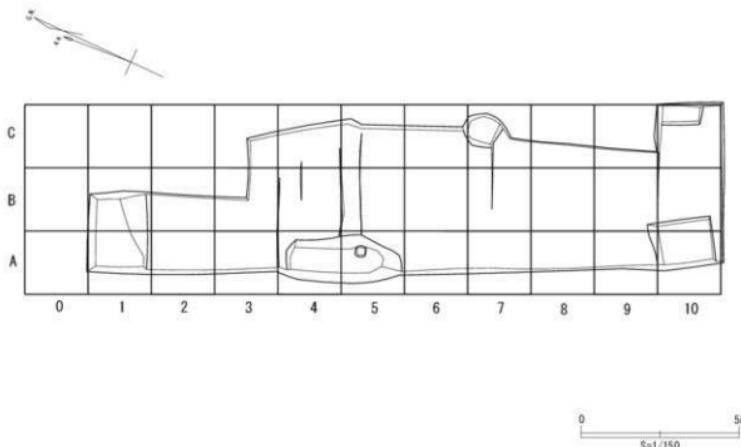
今回の調査区は北西から南西にかけて傾斜する丘陵斜面と頂部の境付近に位置しており、その地目は、集落の拝所への導線となる里道である。里道部分以外は下草や樹木が繁茂しており、それらに埋もれる形で石積み遺構が2基残存していた。

本格的作業の準備として、まずは調査区及びその周辺の伐採・除根作業から開始した。伐採・除根作業後に現況の観察と記録作業（現況の写真撮影、地形測量、石積み遺構の精査・測量・撤去）を実施した。調査区の設定は、避難通路整備計画の設計図に工事による影響範囲を落とし込み、その座標値をもとに現地で割付を行った。そして、発掘調査の管理に供するため、調査区にメッシュをかけて区割りを行うグリッドシステムを用いた（第3図）。グリッドは2mメッシュで、調査区の長辺を主軸に、調査区の北西隅を起点にして南東方向に0から10、北東方向にAからCと表記した。これら作業と並行して調査区範囲の表層を磁気探査して安全を確認後に重機掘削を開始した。

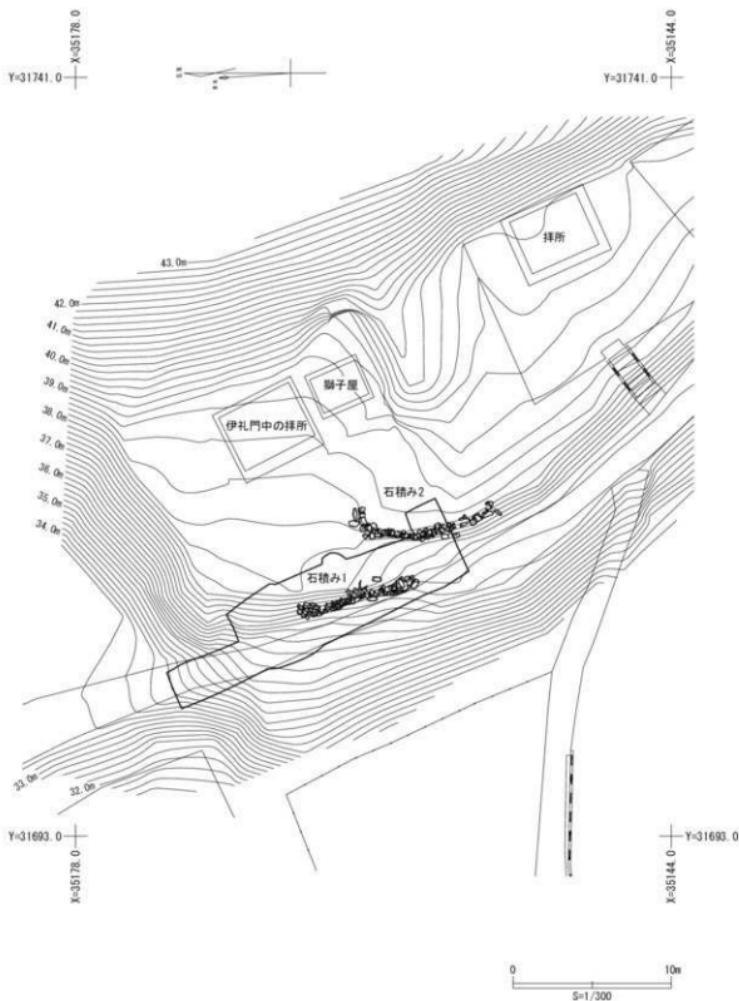
重機掘削は、層序が把握されている、試掘坑のポイントから開始して、遺物包含層の上面を目安に掘り広げていく手法をとった。人力掘削は斜面の傾きに対して直交する方向に設けた土層観察用セクションベルトに沿うようにサブトレレンチの掘削を先行させ、掘削する土層の順序と遺物の包含状況の把握に努めた。出土遺物の取り上げには前述のグリッドシステムを用いた。

日々の作業記録や遺構の詳細等の記録写真撮影には、デジタル一眼レフカメラとアナログ一眼レフカメラ（ポジティブカラーフィルム）を併用して行った。

各土層断面及び遺構の実測は全てデジタル写真測量を用い、解析作業を行うことで3次元の点群データを生成してオルソ画像を作成し、CADソフトでデジタルトレースを行っている。



第3図 調査区のグリッド設定図



第4図 調査区の現況

第2節 層序

今回の調査区は南西側に傾斜する丘陵斜面地に位置しており、標高は34m～39mを測る。この斜面の堆積土の層厚は1.5～1.8mである。先に実施された試掘調査において近世からグスク時代にかけての遺物包含層等が確認されていたが、今回の本調査においてこれらの詳細がより具体的となった。なお、後述の基本層はそれぞれ土質・色調等でさらに細分されているが、これら各層の詳細については層序一覧表を参照願いたい。

基本層序

堆積土の層序は5つに区分されるため、これらを当該区域の基本層序として設定した。

I層：表土及び現代の擾乱土

現況の表土・本調査前に実施した試掘坑の埋め戻し土・現代の擾乱土の3種(I a～I c層)に大きく分けられる。タバコのパッケージ片やガラス片等の現代の廃棄物が出土する。

II層：近現代の造成土

表土の直下にある近現代の造成土である。調査区北東に隣接する敷地の堆積で、2基の石積み遺構の裏込め土にあたる。石積みの補修の際に乱された層とその下層の2種(II a・II b層)に分けられる。直径約5～20cm程度の小礫や炭片・焼土片・貝殻片を微量に含む砂質土である。

III層：近世の遺物包含層

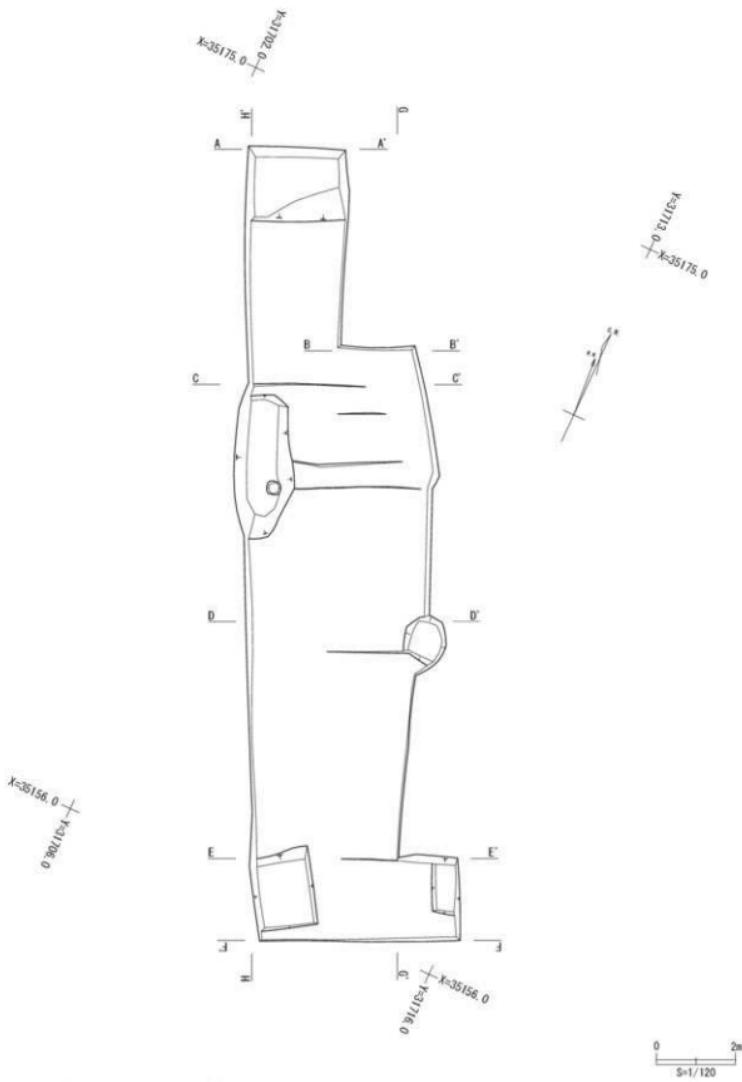
本調査区において最も厚い堆積土である。貝殻・貝製品・獸骨片・土器・カミイヤキ・陶磁器片等が出土する。陶磁器類は、グスク時代から近世にかけての遺物が出土する。この遺物包含層は大きく3層に区分され(III a・III b・III c層)、III a・III b層は黄褐色～黒褐色系の砂質土である。III a層には遺棄された貝殻が多数出土する混土貝層が含まれ、この層は後述する貝溜まりの埋土となる。III c層はにぶい黄色系の粘質土で、地山の泥岩層(クチャ)を由来とする人為的に入れられた近世の造成土と考えられる。

IV層：グスク時代の遺物包含層

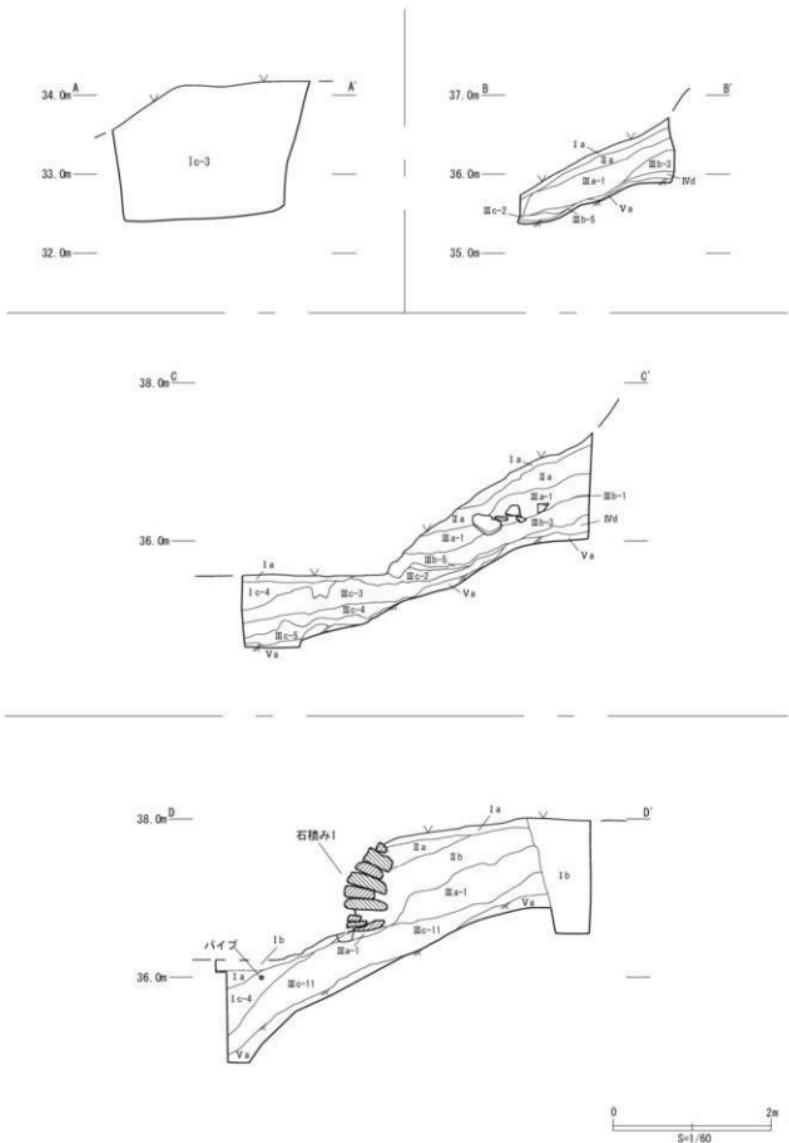
主に調査区中央付近の北東端部付近での堆積がみられる。暗灰黄色～黒褐色系の砂質土で、4層に区分された遺物包含層(IV a～IV d層)と後述する土坑3の埋土(IV e層)の5種に分けられる。遺物はグスク土器片・青磁片のみである。

V層：地山

島尻層群泥岩層(クチャ)である。風化氣味で柔らかい岩質のものと、硬い岩質の2種に分けられる。

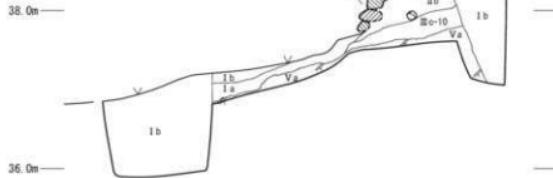


第5図 調査区のセクションポイント

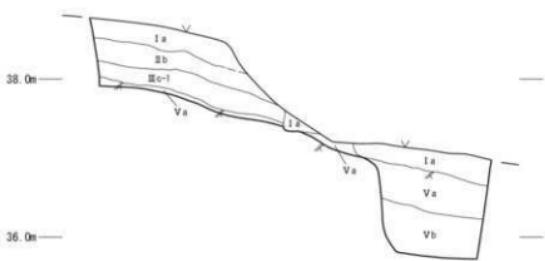


第6図 調査区 断面図1

40.0m E ————— E

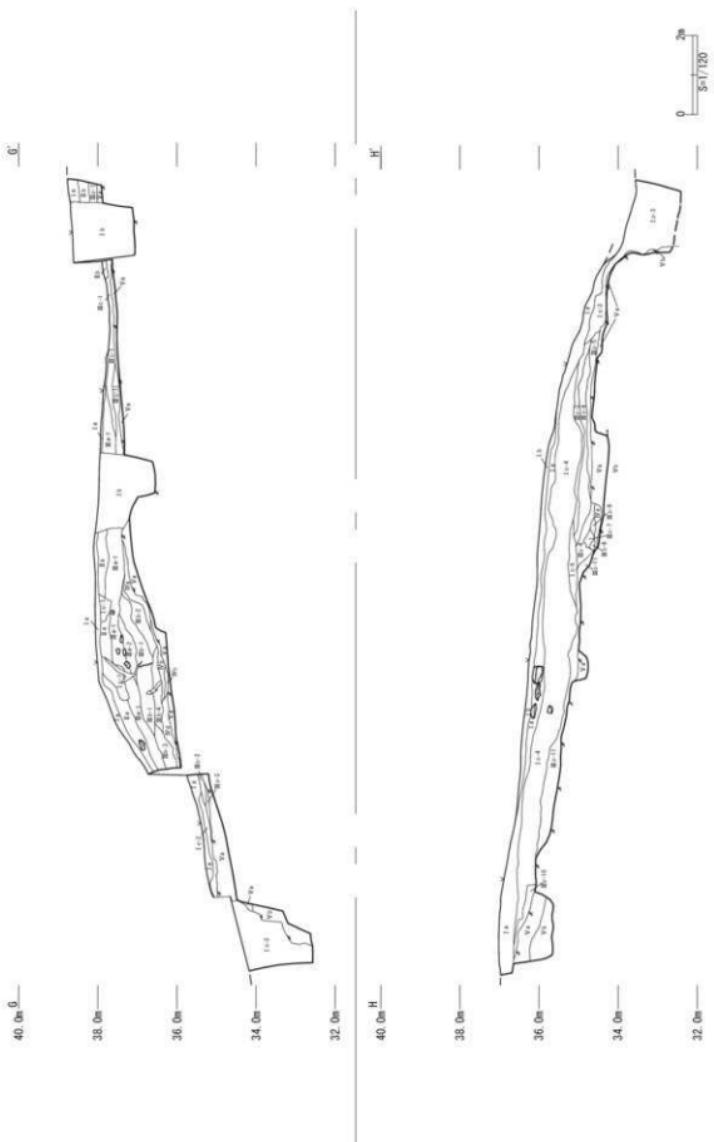


40.0m F ————— F



0 2m
S=1/60

第7図 調査区 断面図2



第8図 調査区 断面図3

第1表 土層観察表

基本剖面	層名	種別	記号	土色名	特徴
I層	I a	擾乱土	10YR5/2	灰褐色砂質土	調査区現況の地表土。
	I b		2.5Y5/3	黄褐色砂質土	前回の試掘坑No.1・No.2・No.10の埋め戻し土。
	I c-1		2.5Y5/2	暗灰褐色粘性砂質土	崩壊による擾乱土である。
	I c-2		2.5Y5/3	黄褐色砂質土	地表直下に部分的にみられる擾乱土。
	I c-3		2.5Y5/3	黄褐色砂質土	調査区が位置する丘陵部を北西方向へ大きく削平した後、埋め戻された擾乱土である。
	I c-4		2.5Y4/2	暗灰褐色粘性砂	比較的新しい時期に埋め戻され、その後水道管を埋設している。タバコのパッケージ片やガラス片等現代に属する遺物が出土する。
	I c-5		2.5Y5/3	黄褐色粘性砂質土	I c層と同時期の擾乱土と推定しているが、I c層より色調が明るめである。II層の可能性もある。
II層	II a	近・現代層	2.5Y5/4	黄褐色粘性砂質土	やや粘質気味であるが、締りは良くない。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 10～20mm程度）を微量に含む。貝殻片も微量に混じる。
	II b		10YR6/3	に赤い黄褐色粘性砂質土	石積み2の剥離土である。締りが悪く、乾燥し易い土層である。貝片・埴土片・貝殻片を微量に含み、砂・粘土・20cm程度の小礫も少量含まれる。
III層	III a-1	遺物包含層 (近世)	2.5Y5/3	黄褐色粘性砂質土	やや粘質気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）とともに、貝片・埴土片・貝殻片を微量に含む。グスク時代から近世の陶磁器片が出土している。
	III a-2		2.5Y4/2	暗灰褐色粘性砂質土	やや粘性気味であるが、貝殻片を多く含む（80%程度）ため、締りは良くない。グスク時代から近世にかけての陶磁器片に加え、刀子と考えられる鋒製品が出土している。また、扇の下位より牛の下顎骨も出土している。
	III b-1		2.5Y4/3	オリーブ褐色粘性砂質土	粘性気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）とともに、他の遺物包含層に比してゴルト気味である。貝片・埴土片・貝殻片を微量に含む。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	III b-2		2.5Y5/3	黄褐色粘性砂質土	粘性気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）とともに、貝片より少ないので、グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	III b-3		5Y4/3	暗オリーブ粘性砂質土	やや粘性気味であるが、貝殻片を多く含み（80%程度）ため、締りは良くない。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	III b-4		5Y3/2	オリーブ黑色粘性砂質土	やや粘質気味で締りが良い。貝片・埴土片を少額含み、貝殻片の出土は遺物包含層の中でも最も少ない。グスク時代から近世にかけての陶磁器片が出土する。
	III b-5		2.5Y3/1	黑褐色粘性砂質土	色調・土質ともにIV d層に似るが、粘性は弱く、締りも良くない。埴土片を微量に含む。粘性気味の砂質土で、締りは良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 3～5cm）を微量に含んでいる。
	III c-1		2.5Y6/3	に赤い黄色砂質土	粘性気味で締りは良いが、III c層よりは良くない。貝片・埴土片・貝殻片を微量に含むが、III c層よりは少ない。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	III c-2		2.5Y6/3	に赤い黄色砂質粘土	やや粘性気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）を多く含み、貝殻片を微量に含む。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	III c-3		2.5Y6/3	に赤い黄色砂質粘土	やや粘性気味であるが、締りは良くない。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）を微量に含んでいる。
IV層	III c-4	遺物包含層 (グスク時代)	2.5Y6/3	に赤い黄色砂質粘土	色調はIII a層と似てある。土質もIII a層と似るが、やや粘性が強く、締りは同程度である。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）の混入は比較的多い。
	III c-5		2.5Y6/4	に赤い黄色砂質粘土	IV d層と同じく、クチャの破砕が由来となる粒（Φ 10～20mm程度）を多く含むが、締りが良い。貝殻片を含む遺物は出土しない。
	III c-6		2.5Y7/4	浅黄色砂質粘土	粘性は強いが、締りは良くない。全体的な特徴はIII a層に近く似る。
	III c-7		5Y5/1	灰色砂質粘土	III d層とIV層に混じり合ったような色調となる。土質は粘性が少く、締りが良い。貝片と埴土片を微量に含んでいる。
	III c-8		2.5Y7/4	浅黄色砂質粘土	色調・土質ともにIII d層に近似するが、貝殻片を含んでいるのが、本層の特徴である。
	III c-9		5Y5/1	灰色砂質粘土	粘性は強いが締りは良くない。埴土片と貝殻片を微量に含んでいる。
	III c-10		2.5Y6/2	灰黄色砂質粘土	やや粘性気味で締りは良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）の混入は見られないものの、造成土の中でも比較的均質で安定している。
	III c-11		2.5Y6/4	に赤い黄色砂質粘土	やや粘性気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 1～2cm）の混入は見られないものの、造成土の中でも比較的均質で安定している。
V層	IV a	遺物包含層 (グスク時代)	2.5Y4/2	暗灰褐色砂質土	やや粘性気味で締りが良い。混入している貝片・埴土片は、Φ 50mm～100mm程度と粒が比較的大きい。
	IV b		2.5Y3/2	黑褐色粘性砂質土	土質はIV a層と近似し、やや粘性気味で締りが良いが、色調は暗い。
	IV c		2.5Y4/1	黄褐色粘性砂質土	土質はIV b層と近似し、やや粘性気味で締りが良いが、下層の地山（クチャ）と同質の土がプロック状に入る。貝片と埴土片が微量に含まれる。
	IV d		2.5Y3/1	黑褐色粘性砂質土	土質はIV b層・IV c層に近似するが、埴土片の混入が目立つ。貝殻片も微量に含まれている。
	IV e		5Y4/1	灰色砂質粘土	水分が多く含み、粘性は強いが、締りはあまり良くない。貝殻片・貝片・埴土片を微量に含んでいる。遺物はグスク時代のもの（グスク土器片・青磁片）のみが出土している。
VI層	V a	地山	2.5Y6/3	に赤い黄色シルト	本来は硬質であるクチャの岩盤が風化した層である。風化鉄を由来とする矽藻の筋理が全体的にみられる。破砕して風化した個所も散見される。
	V b		2.5Y5/1	黄褐色シルト	風化硬質がみとめられない硬質のクチャの岩盤層である。

第3節 遺構

本調査区では近代からグスク時代にかけての石積み・集石・貝溜まり・土坑・ピットが確認されている。これら遺構の年代も近代からグスク時代にかけてと時期幅がある（第9～20図）。

以下、遺構ごとにその概要を述べる。

1. 石積み

この遺構は調査区の南半部において、南北方向に2基確認されている。これらの石積みは現地表土上に露出しており、調査前からその存在は確認済みであった。

これらの石積みは、調査区の北東に隣接する獅子屋と伊礼門中の拌所がある方形状の平坦な区画から調査区西端部を南北方向に走行する里道へと繋がる小道の東西端部にそれぞれ構築されている。

この小道は里道から敷地ヘアプローチの際の傾斜を解消するために等高線上に設えてある。

以下、各石積みの観察所見を記す。

1) 石積み1（第9・10図 図版5）

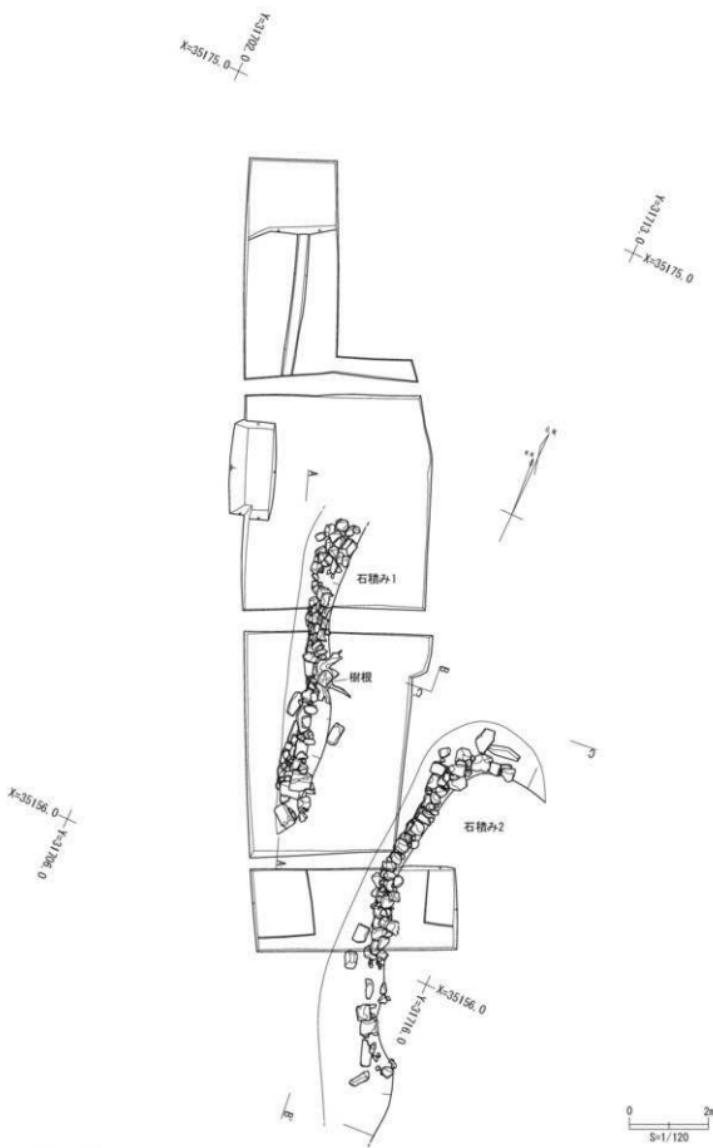
この石積みは調査区の西に隣接する里道の東側斜面に構築されている。長軸方向の残存長は約8.0m、高さ約0.8～0.9m、幅約0.6～0.9mを測る。この石積みを構成する各石は不統一で、間知石・割石・野面石が混在しているため、全て転用石材と考えられる。各石の長径は約20～60cmである。各石の配置は基本的に横長手を意識しているが、積み方に規則性は無く乱雑である。里道の東側斜面の崩落防止を目的に作られたのであろう。

石積みの基底部付近は地中に埋没していたため、地表に露出していた石積み部分を除去後に精査を実施したところ、各石材の最も広い平坦面を天端とする8つの石で構成された石列が残存していた。各石材の長径は約40～50cm、短径は約20～40cmを測る。これら基底石は、近世の遺物包含層（Ⅲa層）を切り込んで据えられており、石積み背後の裏込め土は近現代の造成土（Ⅱa・Ⅱb層）を充填している。

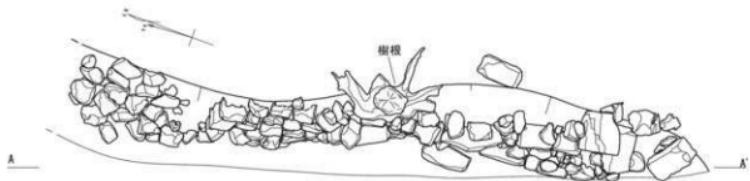
この石積みに関連する遺物は、裏込め土及び基底石直下からの出土である。青磁や染付の破片が出土しているが、近現代のガラス片や陶磁器類も混在している。

2) 石積み2（第9・11図 図版6）

この石積みは調査区の東に隣接する平坦部の西縁辺に構築されている。この平坦部は石積みの北端部を東側に屈曲させており、長軸方向の残存長は約9.6m、高さ約0.9m、幅約0.4～0.9mを測る。この石積みを構成する各石は不統一で、間知石・割石・野面石が混在し、各石の長径は約20cm～60cmである。石積み1と同様、積み方に規格は無く乱雑である。このことから、石積み1と同様に、敷地平坦部の西側縁辺の崩壊を防ぐために、作られたのであろう。この石積みの最下段は近現代の造成土（Ⅱa層）上に設えてあり、石積み背後の裏込め土も同じ近現代の造成土を充填している。



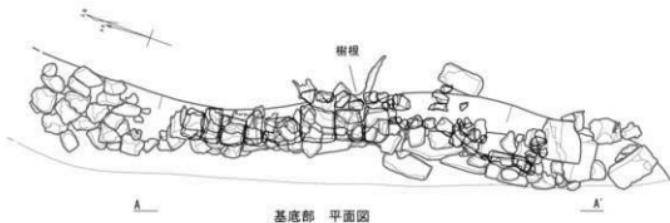
第9図 石積み 位置図



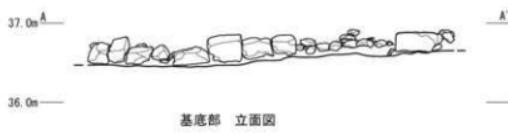
石積み1 平面図



石積み1 立面図



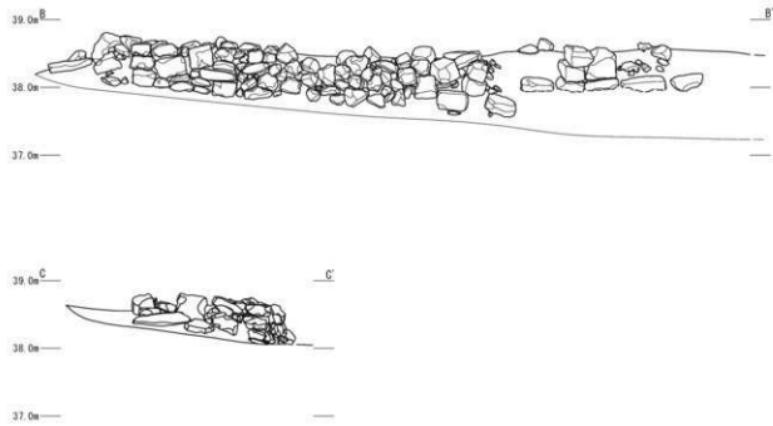
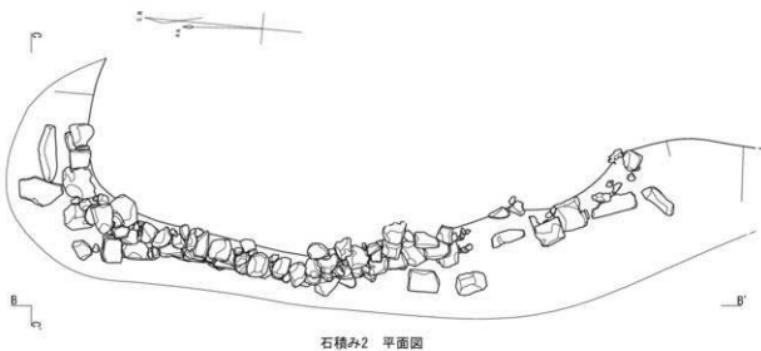
基底部 平面図



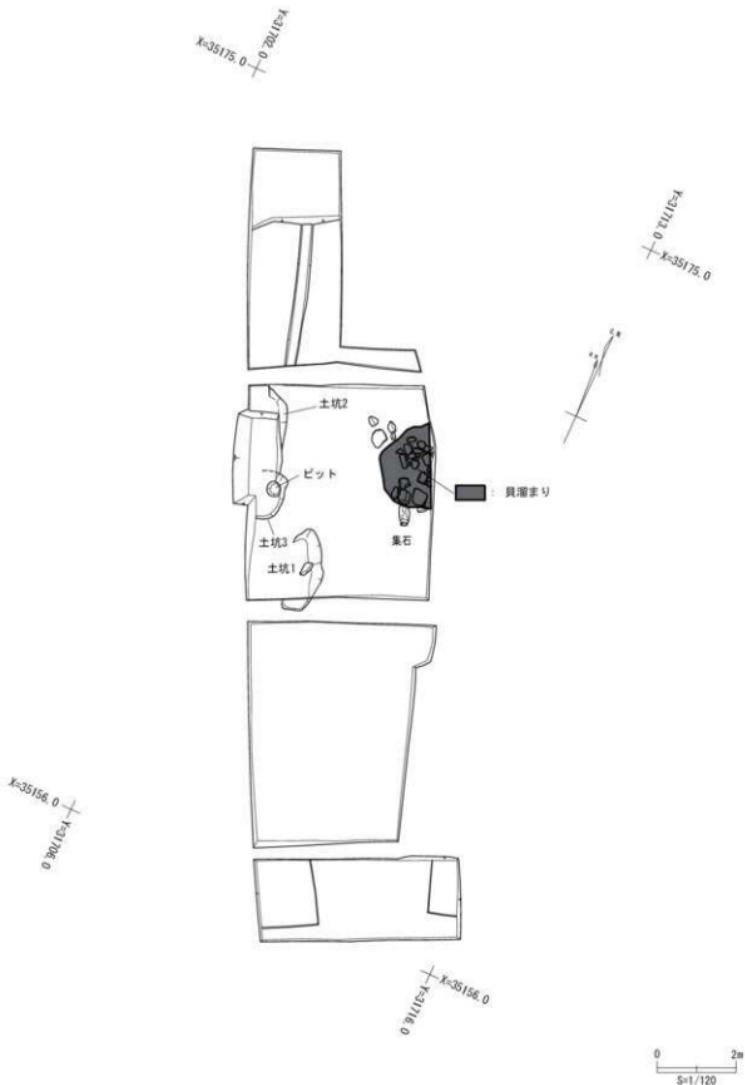
基底部 立面図

0
S=1/60
2m

第10図 石積み1 基底部 平面・立面図



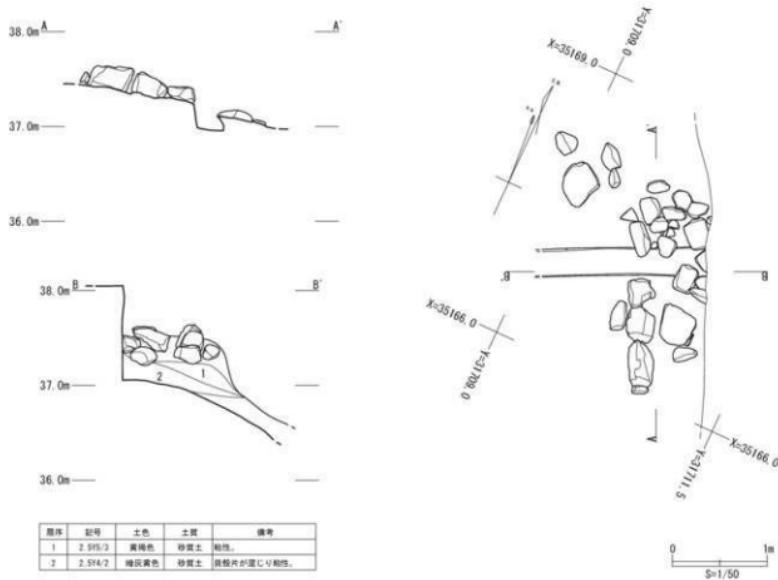
第 11 図 石積み 2 平面・立面図



第12図 近世～ゲスク時代遺構 位置図

2. 集石 (第13図 図版8)

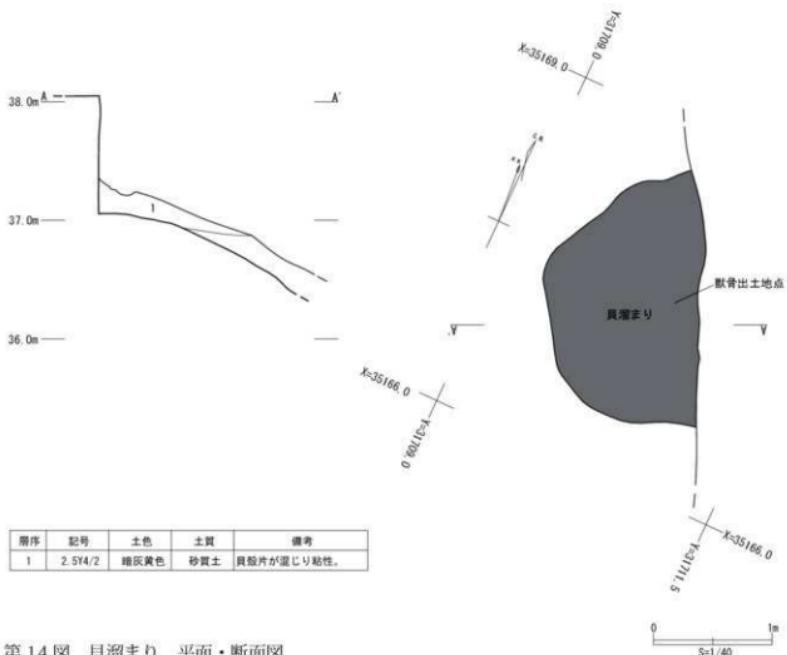
この遺構は調査区の中央やや北より付近の4C・5C区で確認した。各石の長径は約10~50cmである。遺構の性格を示す意図的な石の配置は見られないが、斜面と平坦部の境目付近の石が横長手に立石して残存していることから、元々はその付近での土留め用の石材であった可能性が考えられる。調査区内での集石の範囲は、長径約2.8m、短径約1.6mを測り、その範囲は東側の調査区外へ広がる可能性がある。各石との共伴遺物は無かったため明確な帰属時期は不明であるが、各石の接地面が近世の遺物包含層(Ⅲa層)上面の直上であることから、古くは近世につくられた可能性がある。



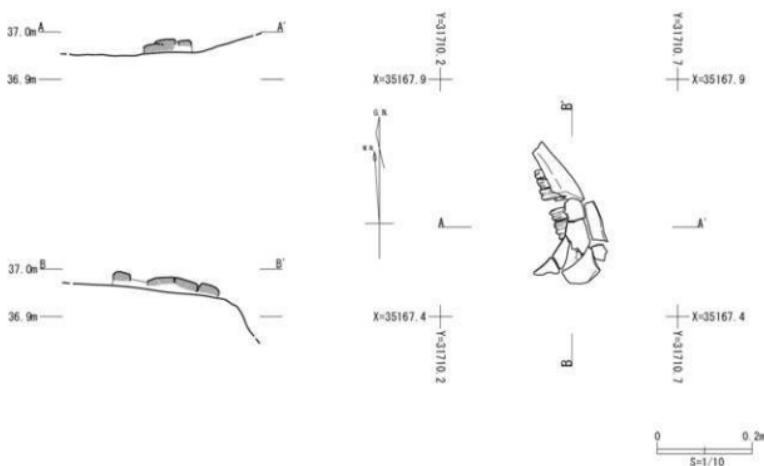
第13図 集石 平面・断面図

3. 貝溜まり (第14・15図 図版8・9)

この遺構は4C・5C区において集石直下で確認した。近・現代層であるⅡ層とこの層に埋没していた集石を除去すると、貝殻片を多量に含む楕円形状の輪郭がみとめられた。その範囲は調査区の東側の調査区外へと広がりを見せており全体の大きさは不明であるが、調査区内での範囲は、長径約2.2m、短径約1.3mを測る。埋土は単層でその層厚は約40cmである。土質は暗灰黄色の砂質土で、やや粘質であるが、貝殻片を多く含むためその締まりは良くない。土坑のような明瞭な掘り方は無いが、貝殻片が無くなり、締まりの良い土に変化するまでが埋土の範囲と想定し掘削を行った。遺物は埋土中から多量の貝殻片に加え、貝製品(第41・42図、図版33)・陶器片・鉄製品が出土し、遺構の底面付近において、牛の下頬骨が1点出土している。この下頬骨は埋納したものかは不明である。



第14図 貝溜まり 平面・断面図

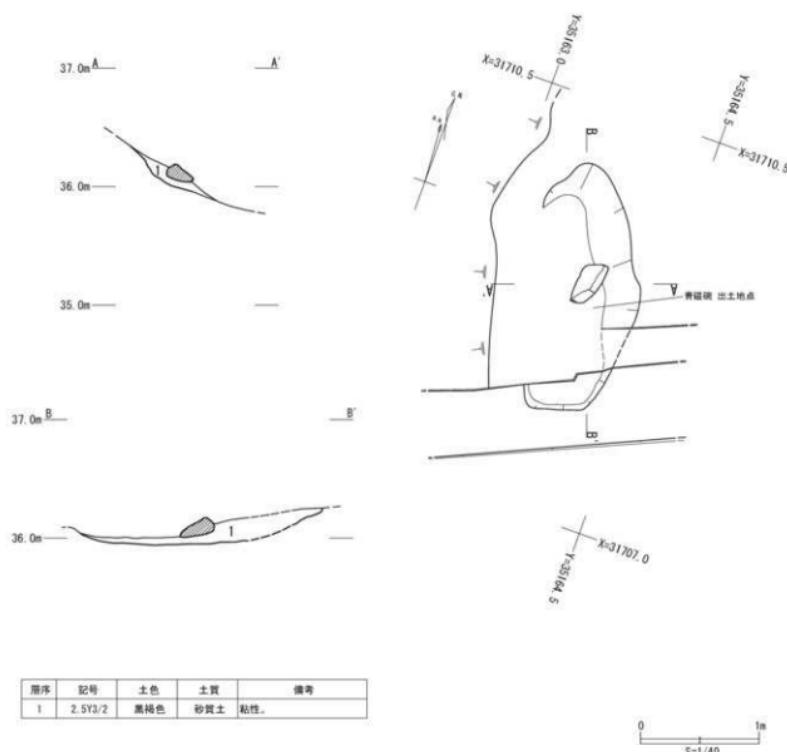


第15図 獣骨出土状況 平面・断面図

4. 土坑 1 (第 16 図 図版 10)

この遺構は調査区の中央やや西より付近の 5A・5B・6A・6B 区で確認した。遺構の平面形状は楕円形で、その規模は長径約 2.1m、短径約 1m、深さ約 20cm である。埋土は単層で黄褐色の砂質土である。この埋土の特徴が近・現代の土層に酷似していたため、当初は擾乱と考えていたが、遺構の輪郭を精査中に、ほぼ完形の青磁碗 1 点(第 24 図 18)が遊離した状態で出土し、その後も近・現代の遺物は出土しなかったため、遺構として扱った。

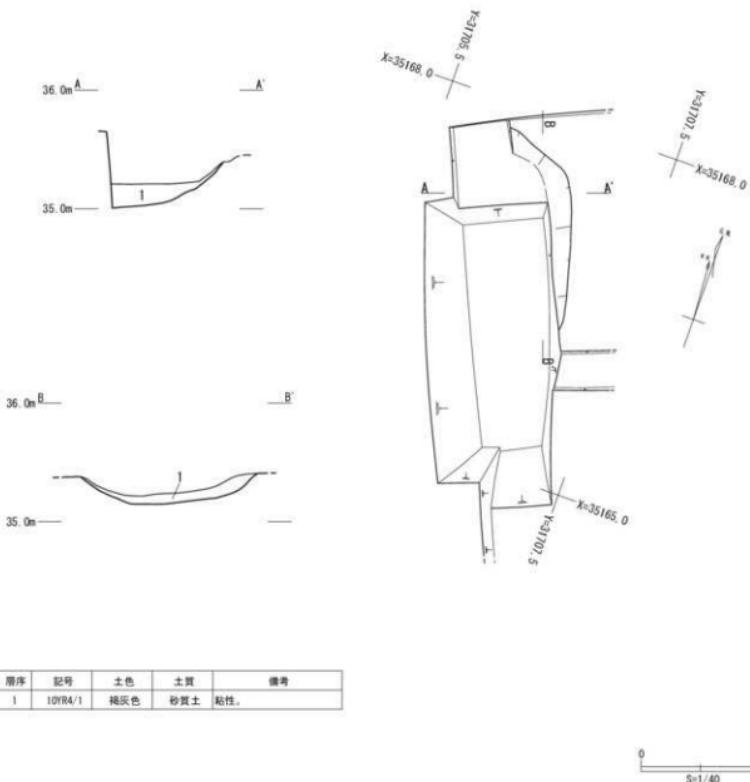
遺物は埋土から青磁の細片や獸骨片が出土している。遺構の性格は不明であるが、この土坑の検出層位が近世の造成土(Ⅲc 層)上面であることから判断すれば、その帰属時期は近世の可能性が考えられる。



第 16 図 土坑 1 平面・断面図

5. 土坑2 (第17図 図版10)

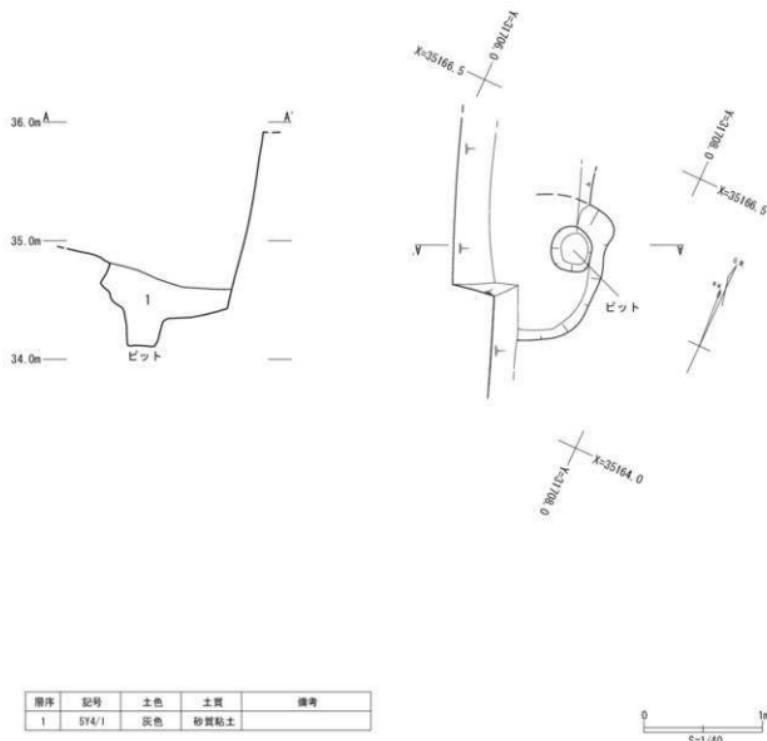
この土坑は4A区で確認した。遺構の大半が調査区南西端部の仮設水道管敷設工事の擾乱によって失われており、残存する範囲は長径約1.8m、短径約40cm、深さ約20cmである。埋土は単層で褐色灰色の砂質土である。この埋土は本調査前に実施した試掘調査時の試掘坑No.5において近世の遺物包含層として認識されていた。遺物は白磁や青花を含む陶器の細片が出土している。遺構の性格は不明であるが、この土坑の検出層位が近世の造成土(Ⅲc層)上面であることから判断すれば、その帰属時期は近世以降であろう。



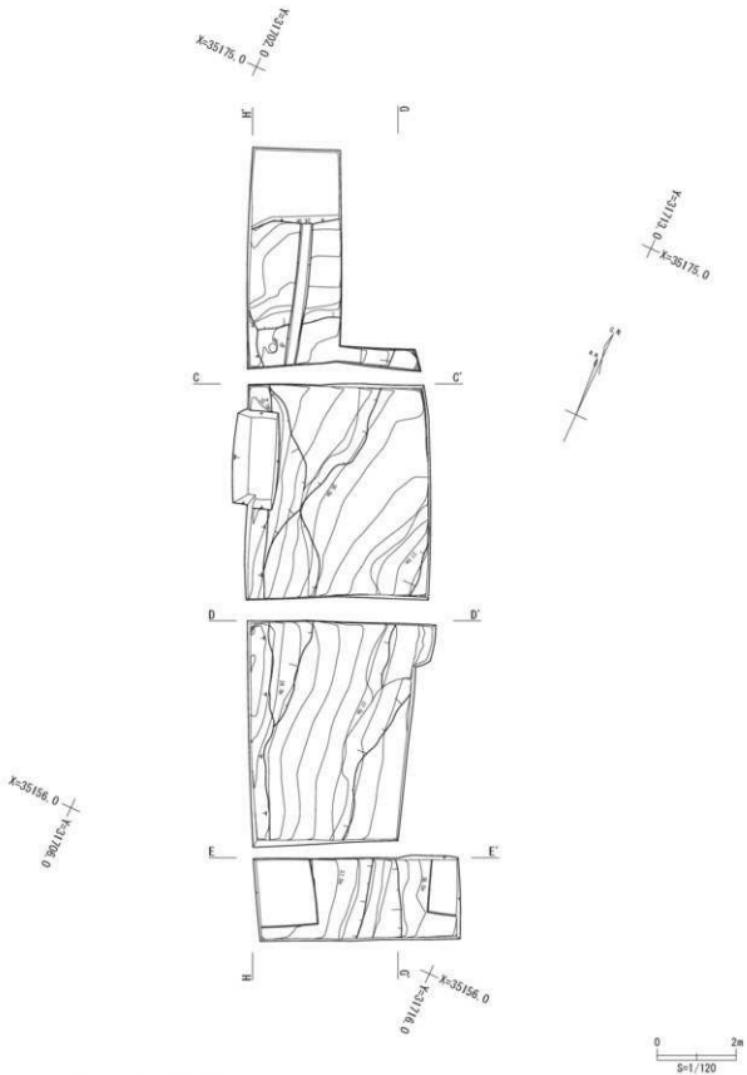
第17図 土坑2 平面・断面図

6. 土坑3（第18図 図版11）

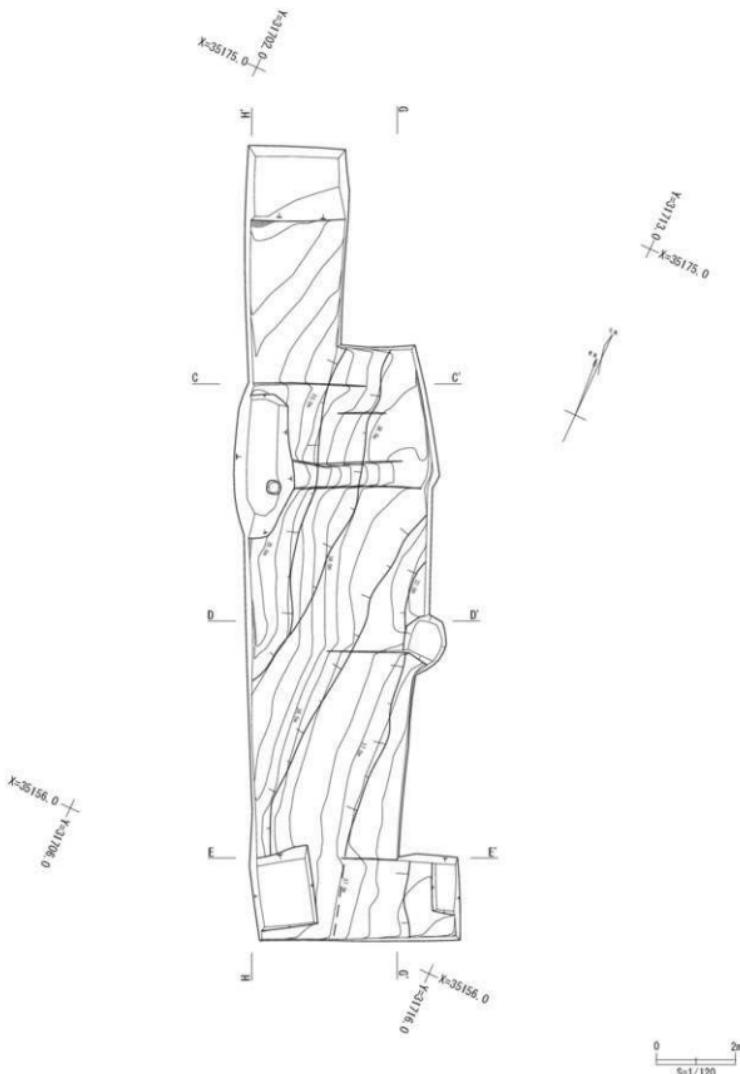
この土坑は5A区で確認しており、調査区南西壁を境に調査区外へと続く。遺構の平面形状は隅丸の方形で、その大きさは、調査区外を含めた長径約1.6m、短径約1.3m、深さ約20～50cmである。埋土は単層で灰色の砂質土である。掘り方の北東隅付近にピット状の小穴1基が穿たれており、ピットの大きさは長径38cm、短径34cm、深さ22cmを測る。この小穴の埋土は土坑本体と同質・同色である。小穴を含めたこの土坑の性格は不明である。この土坑の帰属時期を示す遺物は出土していないが、この土坑の検出層位が近世の造成土（Ⅲc層）直下であることから判断すれば、その帰属時期はグスク時代の可能性が考えられる。



第18図 土坑3 平面・断面図



第19図 近世造成土の検出状況



第20図 調査区の完掘状況

第4節 遺物

本調査地区では、総数 34,873 点の遺物が出土した。最も出土量の多いのは貝類遺体で、33,013 点である。総数の約 9 割が近世の遺物包含層であるⅢ層から出土している。貝類遺体以外では、ガスク土器・中国産陶磁器・沖縄産陶器が主体となり、カムイヤキ・タイ産陶器・ベトナム産染付が少数出土している。その他の遺物としては、瓦・円盤状製品・土製品・石器・骨製品・貝製品・錢貨・金属製品・ガラス製品等が出土している。各種類のうち、特徴的なものを抽出して図化を行つた。なお、ガラス製品については、ガラス板の破片やビー玉等の現代遺物であったため、図化は行わず、出土状況表も作成していない。

以下、遺物の種類ごとにその概要を述べる。なお、中国産陶磁器の分類にあたっては、沖縄分類（瀬戸ほか 2007）を参考にしている。

第2表 出土遺物一覧

種類	種類	層序	表記	層序				遺構				合計
				I層	II層	III層	IV層	石積み1	土坑1	土坑2	土坑3	
土器	土器	6	15	22	182	6	2	4	1	—	—	238
カムイヤキ	カムイヤキ	—	—	—	6	—	—	—	—	—	—	6
外国産陶磁器	青磁	5	16	30	77	2	5	2	—	—	—	137
	白磁	2	5	4	19	—	—	—	1	—	—	31
	青花	3	10	13	12	—	1	—	1	—	—	40
	色絵	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	褐釉陶器	1	7	4	18	—	3	—	1	—	—	34
	緑釉陶器	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
	鉄釉陶器	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	タイ産鉄鉱	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	ベトナム産染付	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	本土産陶磁器	3	16	27	11	—	1	—	—	—	—	58
日本古物	沖縄産陶器	16	77	97	42	—	13	—	—	—	—	245
	產地不明陶磁器	—	3	5	4	—	—	—	—	—	—	12
	円盤状製品	—	2	4	5	—	—	—	—	—	—	11
	土製品	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2
	瓦	1	8	4	2	—	1	—	—	—	—	16
	金屬製品	—	15	5	9	—	2	—	—	—	—	31
	錢貨	—	1	1	3	—	—	—	—	—	—	5
	石器	1	—	2	2	—	—	—	—	—	—	5
	貝類品	—	6	8	62	—	—	—	—	—	—	76
	骨製品	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
自然物	ガラス製品	—	17	7	—	—	2	—	—	—	—	26
	貝類遺体	151	874	1,094	30,387	226	72	166	32	11	33,013	
	脊椎動物遺体	2	75	47	311	7	4	16	1	—	463	
	炭	—	2	3	—	—	—	—	—	—	—	5
	燒土	2	24	22	201	7	3	3	1	1	264	
木材	木材	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
	石	1	15	27	95	5	3	2	—	—	—	148
	合計	194	1,190	1,429	31,452	253	112	193	38	12	34,873	

1. 土器・カムイヤキ (第21図 第3・4表 図版14)

土器は総数238点出土しており、ゲスク時代の土器と考えられ、全てが小破片である。出土状況としては、表採やI層・II層から43点、III層から182点、IV層から6点出土している。遺構に伴うものは7点で、石積み遺構から2点、土坑1から4点、土坑2から1点出土している。内訳は、口縁部が12点、胴部が209点、底部が14点、部位不明が3点である。器種は判別可能なものに、羽釜形・甕形・壺形・鍋形がある。このうち特徴的な10点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

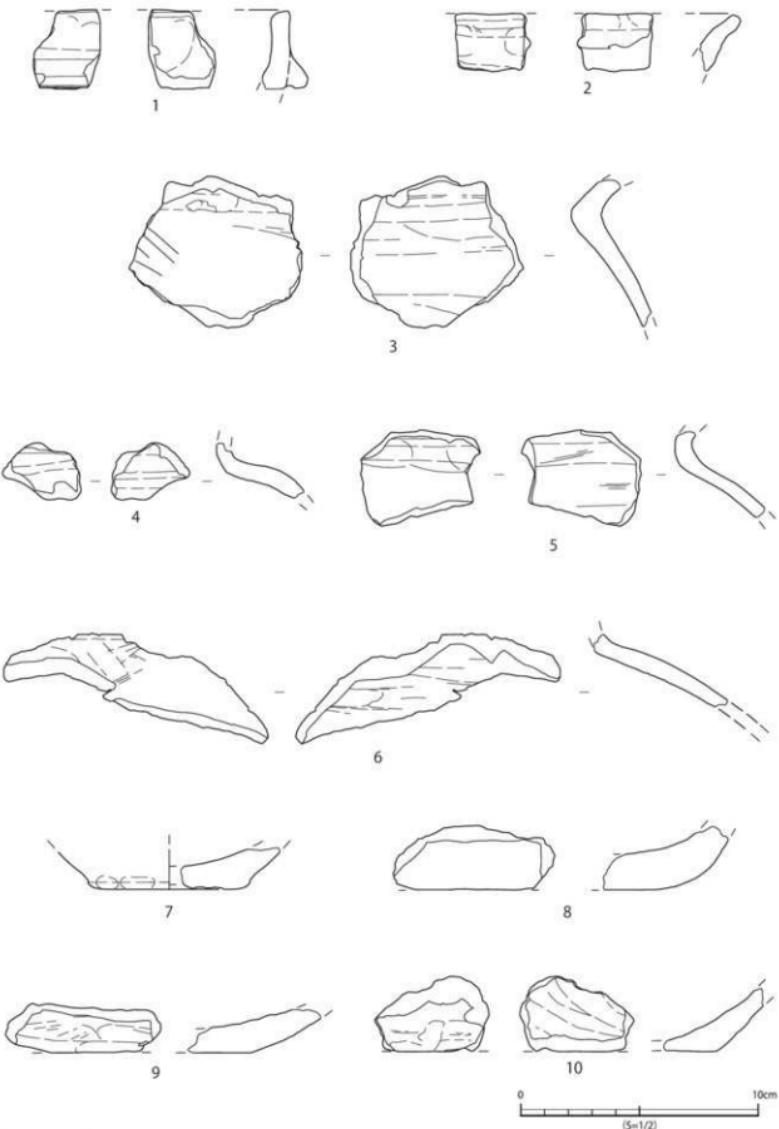
カムイヤキは総数6点出土しており、出土状況としては、III層からのみである。これら全てが小破片で、器種も不明であるため、図化は出来なかった。

第3表 土器・カムイヤキ出土一覧

種類	器種	部位	表採	地平				遺構			合計	
				I層	II層	III層	IV層	石積み1	土坑1	土坑2		
ゲスク土器	口縁部	—	—	—	—	5	1	—	—	—	6	30
	胴部	1	4	3	13	—	—	2	—	—	23	238
	底部	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	
	鍋形?	胴部	—	—	5	12	1	—	—	—	18	
	甕形	胴部	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	甕形?	胴部	—	—	—	1	—	—	—	—	2	
	甕形?	胴部	—	—	—	4	—	—	—	—	4	
	口縁部	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	
	鍋・甕形	胴部	—	—	—	18	—	—	—	—	18	
	底部	1	1	—	7	—	—	—	—	—	9	
	甕形	胴部	—	—	—	3	—	—	—	—	3	
	甕形?	胴部	—	—	—	1	—	—	—	—	1	
	羽釜形	口縁部	—	—	—	1	—	—	—	—	1	
	羽釜形?	胴部	1	—	—	—	—	—	—	—	1	
カムイヤキ	口縁部	—	—	—	1	2	—	—	—	—	3	150
	胴部	3	8	11	111	3	1	2	1	140	150	
	底部	—	1	1	1	—	1	—	—	—	4	6
	部位不明	—	—	1	2	—	—	—	—	—	3	
直	胴部	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1
	部位不明	胴部	—	—	—	4	—	—	—	—	4	
	底部	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	5
合計			6	15	22	188	6	2	4	1	244	

第4表 土器観察一覧

辨認番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 基高 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第21図 図版14	1	羽釜形	口縁	—	口縁は胴部から垂直に立ち上がる。口縁は平坦に形成し、胴部上位に円錐状の張り出し部を形成する。内外面は丁寧に器面調整される。施成は良好。	III b-2 ~ 4
	2	甕形	口縁	—	口縁部を指で押さえ、外反させる。内外面は丁寧に器面調整される。胎土に白色粘土混色粘土を含み、施成は良好。	1 a
	3	甕形	胴部	—	側面は「く」の字状に掘出し、口縁に向かって外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕がある。胎土に白色粘土や赤褐色粘土を多く含む。施成はやや良好。	III a-1
	4	甕形	胴部	—	側面は張り、側部から口縫に向かって緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕がある。胎土に白色粘土や赤褐色粘土を多く含む。施成はやや良好。	III a-1
	5	甕形	胴部	—	側面は張り、側部から口縫に向かって緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕がある。胎土に白色粘土や赤褐色粘土を含む。施成はやや良好。	III b-2 ~ 4
	6	甕形	胴部	—	側面は張り、側部から口縫に向かって緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕がある。胎土に白色粘土や赤褐色粘土を多く含む。施成はやや良好。	III a-1
	7	不明	底部	—	底面は小さく、底部から胴部にかけて、ややくびれながら緩やかに立ち上がる。内外面は丁寧に器面調整される。胎土にガラス質の器物を含む。施成はやや良好。	1 c-4
	8	鍋形	底部	—	底面開口は不規則で、底面から丸く緩やかに立ち上がる。内外面は丁寧に器面調整される。胎土は厚く、胎土にガラス質の器物を含む。施成はやや良好。	IV d
	9	不明	底部	—	底面の側面から緩やかに立ち上がる。内外面は多段の凹凸が見られ、アバタ状を成す。胎土に白色粘土や赤褐色粘土を多く含む。施成はやや良好。	石積み1の 基底石直下
	10	不明	底部	—	底部から直角的に引きながら立ち上がる。内外面の器面調整は粗雑で、明瞭な調整痕を残す。胎土に白色粘土を含み、暗褐色に焼成される。	II a



第21図 土器

2. 青磁 (第22~26図 第5・6表 図版15~19)

青磁は総数137点出土している。出土状況としては、表採やI層・II層から51点、III層から77点とIV層から2点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から5点、土坑1の埋土から2点出土している。年代が推定できる資料については、14世紀半ばから16世紀後半のものが確認できた。内訳は、碗類が105点、皿が16点、盤が4点、香炉が1点、器種不明が11点である。碗・皿の分類については、沖縄分類(瀬戸ほか2007)を参考に行った。このうち特徴的な39点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第5表 青磁出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序				遺構		合計	
				I層	II層	III層	IV層	石積み1	土坑1		
青磁	碗	口縁部	—	—	—	1	—	—	1	2	104
		口縁部	1	7	5	26	—	1	1	41	
		側部	1	2	9	29	—	3	—	44	
		底部	1	3	6	5	1	1	—	17	
	小皿	口縁部	—	—	—	1	—	—	—	1	1
		口縁部	1	1	—	10	1	—	—	13	
		側部	—	—	1	—	—	—	—	1	
	皿	口縁部	—	—	1	2	—	—	—	3	16
		底部	1	—	—	—	—	—	—	1	
	香炉	口縁部	—	1	—	—	—	—	—	1	1
		口縁部	—	—	1	—	—	—	—	1	
	器種不明	側部	—	1	7	2	—	—	—	10	11
合計				5	16	30	77	2	5	2	137

第6表 青磁観察一覧1

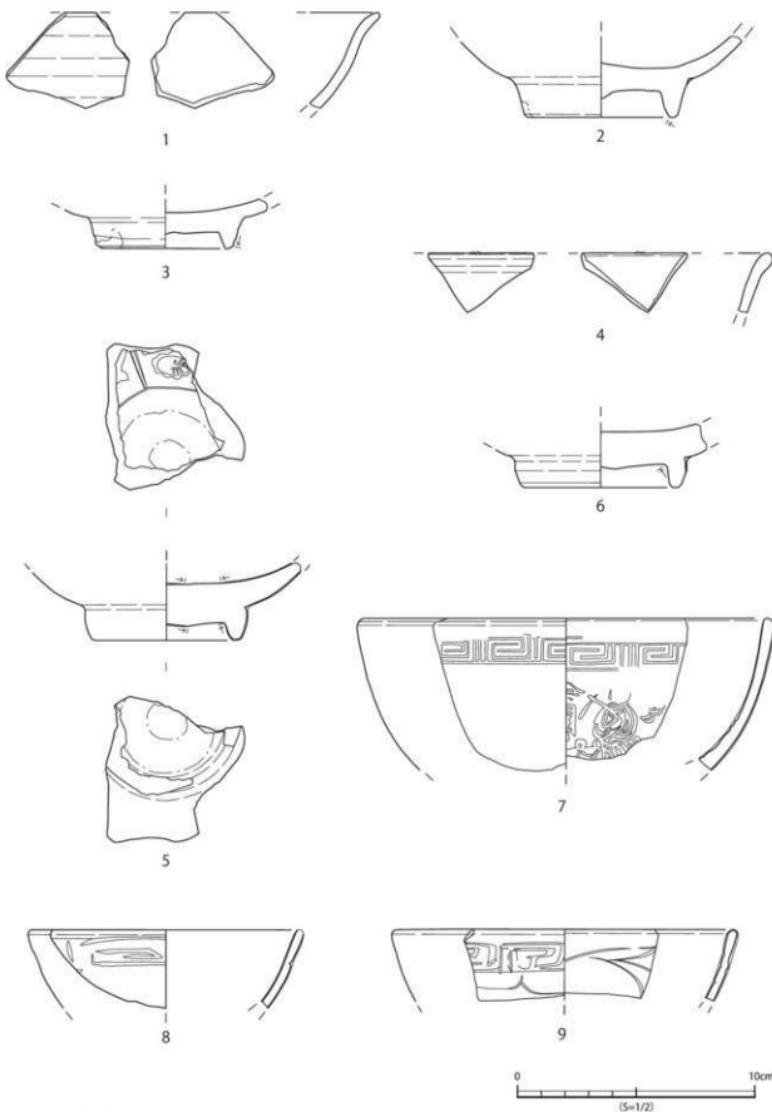
掛図番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第22図 図版15	1	碗	口縁	IV類	— — —	口縁は外反する。外面に緑がかった透明釉を施す。買入が見られる。内外共に無文。	土坑1 埋土
	2	碗	底部	IV類	— (6.4)	内面から椎付間まで緑がかった透明釉を施す。腹付から高台内には露胎するが、腹付の一部に釉薬が掛る。	I c-4
	3	碗	底部	IV類	— (5.9)	内面から外面椎付間まで灰緑色の失透釉を施すが、一部椎付に掛る。高台の形成は粗雑で焼成は不良。	石積み1 の 石材除去 作業中出土
	4	碗	口縁	IVまたは IV'類	— — —	口縁は外反する。口内はやや肥厚する。外面に緑がかった透明釉を施す。内外共に無文。	III a-1
	5	碗	底部	IV'類	— (6.2)	高台に粗い削りの形痕を残す。外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、内底面と高台内底を蛇の目状に輪削ぎする。内面に陽刻の型押し文を持ち、外面は無文。	I c
	6	碗	底部	IV'類	— (6.8)	外面に緑がかった透明釉を厚く施釉後、外面は高台内底を輪削ぎする。内面は無文。釉薬の透明度は低く、胎土は粗雑で赤褐色に焼成する。	III b-1~3
	7	碗	口縁	V類	(17.6) — —	口縁形態は直口。外面に緑がかった透明釉を厚く施し、粗い買入が見られる。内外の口縁に型押しの雷文帯、内面に型押しの人物文を持つ。胎土は粗雑。	I a

第6表 青磁観察一覧2

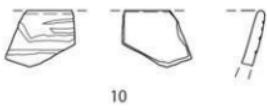
辨別番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口縁 器高 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第22図 図版15	8	碗	口縁	V類	(11.6) — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。内面は無文、外面は粗雑な捺引きの雷文帯を持つ。胎土は緻密。	III b-2~4
	9	碗	口縁	V類	(14.6) — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。外面白口縁にヘラ形の雷文帯と内外面に草花文を持つ。胎土は緻密。	II b
第23図 図版16	10	碗	口縁	V類	— — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を施す。外面は粗雑な捺引きの雷文帯を持つ。	III b-2~4
	11	碗	口縁	V類	(15.0) — —	口縁は外反する。口回はやや肥厚する。内外面に粘度の高い青緑黄色の失透釉を施す。釉薬の流动性が弱く、表面は凸凹し、所々胎土が現く。内外面共に無文。	III a-1
第24図 図版17	12	碗	口縁	V類	— — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を施し、粗い買入が見られる。内面は無文。外面は口縁に1条の開闊を持つ。	III a-1
	13	碗	脚部	V類	— — —	内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。内面は型押しの文様を持ち、外面は無文。	石積み1 基底石直下
	14	碗	底部	V類	— — (6.4)	外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を釉割ぎする。外面は逆走文、内面に片切彫りの草花文を持つ。胎土は緻密。	III b-2~4
	15	碗	底部	V類	— — (6.2)	底部器物の早い大型の器皿。高台の形成は丁寧で置付外側を斜めに削る。内外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を蛇の目状に釉割ぎする。粗い買入が見られる。内面は型押しの文様、内面は片切彫りの草花文を持つ。	III a-1
	16	碗	底部	V類	— — (7.4)	底部器物の早い大型の器皿。高台の形成は丁寧で置付外側を斜めに削る。外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を蛇の目状に釉割ぎする。内面は型押しの文様。外面は蓮瓣文を持つ。内底面の文字文は不明瞭なため、判読できない。「眞」または「真」か?	II b
	17	碗	底部	V類	— — 5.55	高台が小型の器皿。高台に粗い削りの調整を残す。内面から外面の置付際まで黄みがかった透明釉を施し、内底面に印伝文を持つ。	II b
	18	碗	口～底	VI類	(12.7) 6.40 (5.2)	口縁形態が直口で小型の器皿。内底面は広く、器高は低い。内面から外面の高台置付け際まで赤褐色の失透釉を施釉後、置付を斜めに削る。内外面共に無文。高台内底は露胎。胎土は粗雑。	土坑1
	19	碗	口縁	VI類	(13.2) — —	口縁形態は直口。内外面に青みがかった透明釉を施す。内面は無文、外面は粗雑な細蓮弁文を持つ。	III b-3
	20	碗	口縁	VI類	(13.2) — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は細蓮弁文を持つ。釉薬の透明度は低く、胎土、文様ともに粗雑。	III a-1
	21	碗	口縁	VI類	— — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は粗雑な細蓮弁文を持つ。	III a-1
	22	碗	口縁	VI類	— — —	口縁形態は直口。内外面に縁がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は弁先の省略された細蓮弁文を持つ。	III b-1~3
	23	碗	口縁	VI類	(14.7) — —	口縁形態は直口で、器高が低い小型の器皿。内外面に縁がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は弁先の省略された細蓮弁文を持つ。	I c-4

第6表 青磁観察一覧3

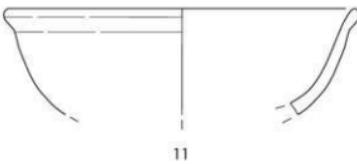
排闇番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第24図 図版17	24	碗	底部	VI類	— — (5.0)	高台が小型の器形。内面から外側の高台内まで青みがかった透明釉を施し、高台内底は露胎。軽い買入が見られる。内底面に印伝文を持ぐ。	II a
	25	碗	底部	VI類	— — 4.95	高台は小型で、稍い割りの形成痕を残す。内面から外側買付の際まで縁がかった透明釉を施す。釉薬の一部は高台内底に掛り、施釉後に買付の釉薬を剥ぐ。	I c-4
第25図 図版18	26	碗	口～底	VII類	最大(13.95) (6.15) (5.4)	口縁形態は直口、内底面が広く器高が高い器形。内面から外側高台際まで縁がかった透明釉を施す後、内底面を蛇の目状に輪削ぎする。釉薬の一部は高台に掛る。形成は難く、高台は器の中央から離れた位置に形成される。内面は退化した印伝文、外面は櫛突きの線刻蓮瓣文を持つ。	III
	27	碗	口縁	VII類	(14.6) — —	口縁が逆「n」の字状に開く直口の器形。器肉は薄く、外側に明顯な輪削痕を残す。内外面に縁がかった透明釉を施す。	I c-4
	28	皿	口縁	V類	— — —	口折れ皿。口縁の折れは弱く、内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。胎土は緻密。	III
	29	皿	口縁	V類	— — —	外反または葵花皿。内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。内面は片切取りの草花文を持ち、外面は無文。胎土は緻密。	III b-1～5
	30	皿	口縁	VI類	— — —	葵花皿。内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。内面は片切取りの草花文を持ち、外面は無文。	IV e
	31	皿	口縁	VI類	(8.4) — —	直口皿。内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。内面は3本組の簡略化された蓮瓣文を持つ。	III b-1～3
	32	皿	口縁	VI類	(10.0) — —	菊花皿。内外面に青みがかった透明釉を施す。口縁を割り、花弁状に形成する。内面に型押しした花卉。外面に線刻の花卉文を持つ。	III a-1
	33	皿	口縁	VI類	(13.0) — —	葵花皿。内外面に青みがかった透明釉を厚く施す。内面は草花文を持ち、外面は無文。釉薬の透明度は低く、文様や模様なども不明瞭で粗雑。	III b-2～4
	34	皿	口縁	VI類	— — —	葵花皿。内外面に青みがかった透明釉を厚く施す。内面は草花文を持ち、外面は無文。釉薬の透明度は低く、文様の用ひは浅く細い。	表採
第26図 図版19	35	盤	底部	VII類	— — 5.5	輪削が「く」の字状に屈曲する器形。内面から外側買付際まで縁がかった透明釉を施すが、一部が買付から内底まで掛る。内底面を輪削ぎし、輪削ぎの中心に径3mm深さ1mm程度の小孔が確認できる。釉薬の透明度は低く、胎土は粗雑で赤褐色に燒成する。	III b-2～4
	36	皿	底部	VII類	— — (4.7)	輪削が「く」の字状に屈曲する器形。内面から外側買付際まで縁がかった透明釉を施す。高台内底は露胎。施釉後、買付際の釉薬を削り取るが、一部が買付に残る。釉薬の透明度は低く、露胎するところは赤褐色に燒成し、胎土は粗雑。	I b
	37	盤	口縁	—	(23.0) — —	製輪口輪盤。輪縁の先端をつまみ上げて形成し、内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。内面は笠置きの蓮瓣文を持ち、外面は無文。胎土は緻密。青磁V類と同時期。	III b-2～4
	38	盤	底部	—	— (12.0)	高台から輪部に掛けて緩やかに立ち上がる。内外面に縁がかった透明釉を厚く施釉後、外側の高台内底を蛇の目状に輪削ぎする。内底は先端が丸い輪削きの蓮瓣文を持ち、外面は無文。胎土は緻密。青磁V類と同時期。	表採
	39	香炉	口縁	—	(12.9) — —	小型の香炉。内外面に縁がかった透明釉を厚く施す。釉面は薄く、細かな買入が見られる。胎土は粗雑で、黒褐色釉や白色釉を含む。	I a



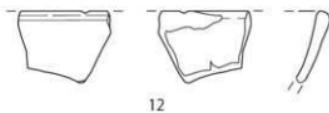
第22図 青磁1



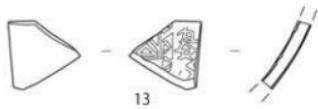
10



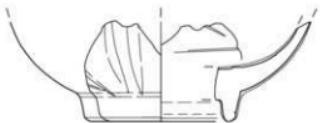
11



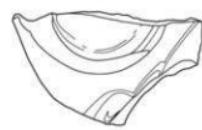
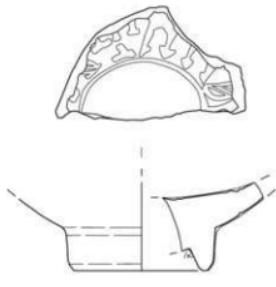
12



13



14



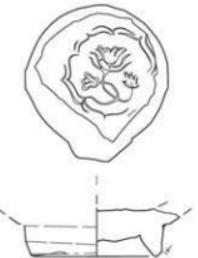
15



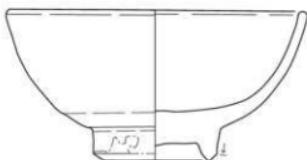
16



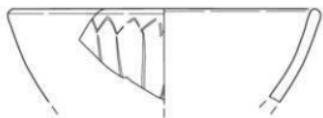
第23図 青磁2



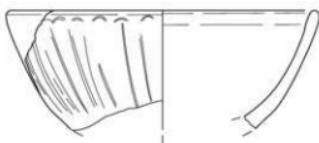
17



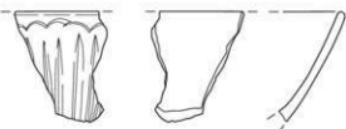
18



19



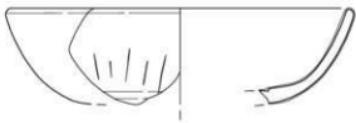
20



21



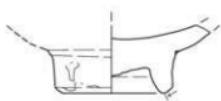
22



23



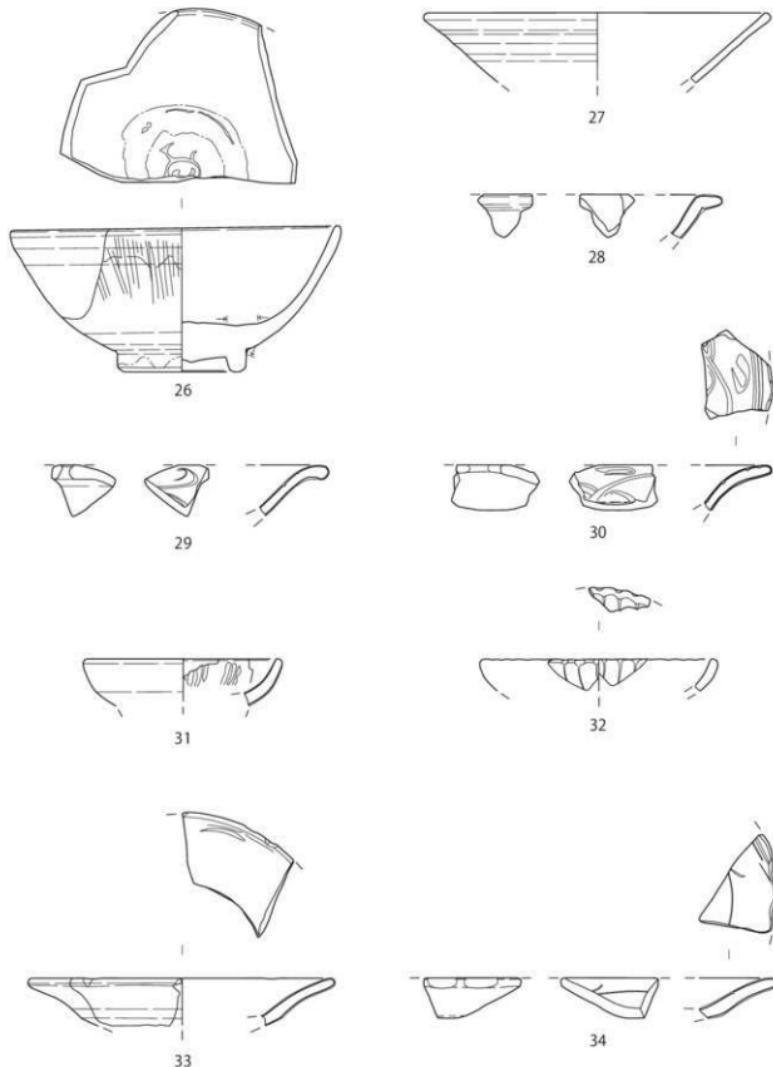
24



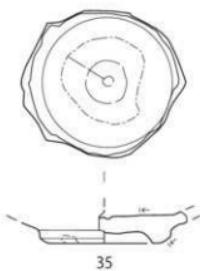
25



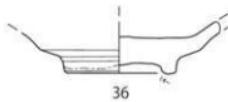
第24図 青磁3



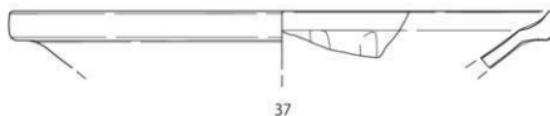
第25図 青磁4



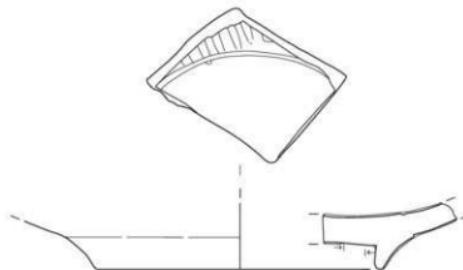
35



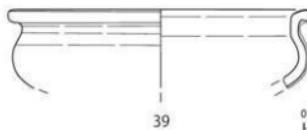
36



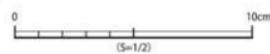
37



38



39



第26図 青磁5

3. 白磁 (第27図 第7・8表 図版20)

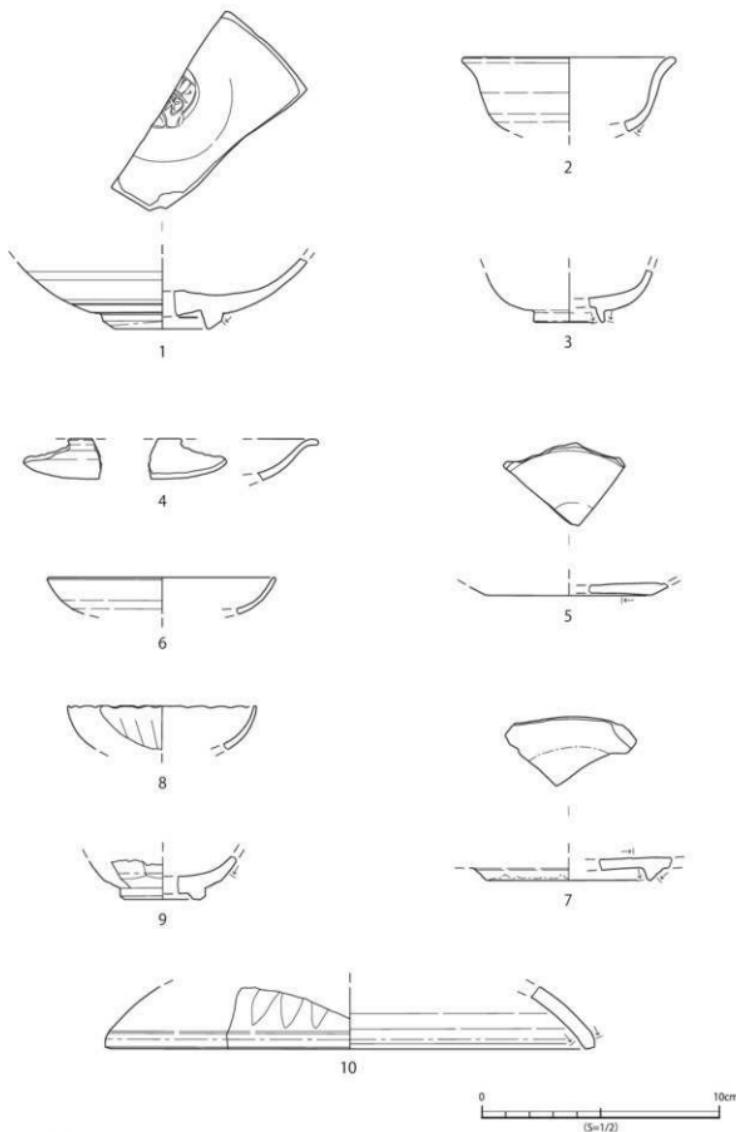
白磁は総数31点出土している。出土状況としては、表探やI層・II層から11点、III層から19点出土している。遺構に伴うものは土坑2から1点出土している。年代が推定できる資料については、13世紀後半から16世紀前半のものが確認できた。内訳は、碗類が17点、皿類が6点、瓶・杯・蓋が各1点、器種不明が5点で、碗・皿の分類については沖縄分類(瀬戸ほか2007)を参考に行った。このうち特徴的な10点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第7表 白磁出土一覧

種類	器種	部位	表探	層序				遺構 土坑2	合計		
				I層	II層	III層					
白磁	碗	口縁部	1	1	2	3	—	7	14	31	
		胴部	—	1	—	5	—	6			
		底部	—	1	—	—	—	1			
	小碗	口縁部	—	—	—	1	—	1	3		
		底部	—	—	2	—	—	2			
	皿	口縁部	—	—	—	1	1	2	5		
		底部	1	1	—	1	—	3			
	小皿	口縁部	—	—	—	1	—	1	1		
		底部	—	—	—	1	—	1			
	八角杯	底部	—	—	—	—	—	—	—	—	
器種不明	瓶	胴部	—	1	—	—	—	1	1	—	
	蓋?	端部	—	—	—	1	—	1	1	—	
	器種不明	胴部	—	—	—	5	—	5	5	—	
	合計				2	5	4	19	1	31	

第8表 白磁観察一覧

探査番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ()は推定値	観察所見		出土地
						内面	外側	
第27図 図版20	1	碗	底部	D群	— — (5.0)	内面は広く、腰部にかけての器内が深い。高台外側は斜めに削られ、腰部には明瞭な輪轂底が残る。内面から外面の高台脇まで透明釉を厚く施す。内底面は一部崩壊し、「溝」の文字文を型押す。	—	I-c-4
	2	小碗	口縁	D群	(9.0) — —	口縁が外反する小碗。内面から外面腰部まで透明釉を施す。内外両方に細かい買入が見られる。胎土は緻密で軟質。	—	III-a-1
	3	小碗	底部	—	— (3.0)	内外面に透明釉を施用後、匂付を釉剥ぎする。型づくり。強化窯系。	—	II-b
	4	皿	口縁	—	— — —	口縁が外反し、器高の浅い器皿。器内は薄く、内外両面に透明釉を施す。細かい買入が見られる。泉州窯系。	—	土坑2埋土
	5	小皿	底部	A群	— (7.0)	高台を持たない平底の器皿。底面を薄く削る。かすかに背みを帯びた透明釉を外底面まで施すが、一部底面に掛る。内底面に圓線を持つ。	—	III-b-1～3
	6	小皿	口縁	D群	(9.6) — —	口縁は直口で器内の薄い器形。透明釉を外側面に施す。外側は輪轂底を残す。胎土は緻密で硬質。	—	III-a-1
	7	皿	底部	E群	— (6.9)	灰白色の失透釉を内外両面に施す。内底面は中心部に輪轂を残しながら釉剥ぎし、外側は匂付を釉剥ぎする。景德鎮窯系。	—	表探
	8	皿	口縁	E群	(8.0) — —	菊花皿。胎土は白色で精良緻密。かすかに背みを帯びた透明釉を施す。口円を削り、外側は線刻して花紋状に成形する。景德鎮窯系。	—	III-b-2～4
	9	八角杯	底部	D群	— (3.6)	腰部を面取りする。内面から外面腰部まで、やや白濁した透明釉を施す。胎土は緻密で軟質。	—	III-b-1～3
	10	蓋?	端部	—	(20.6) — —	内外面に透明釉が施され、底部は釉剥ぎする。外面に不明瞭な蓮瓣文を持つ。胎土は粗雑で、硬質。	—	III



第27図 白磁

4. 青花（第28図 第9・10表 図版21）

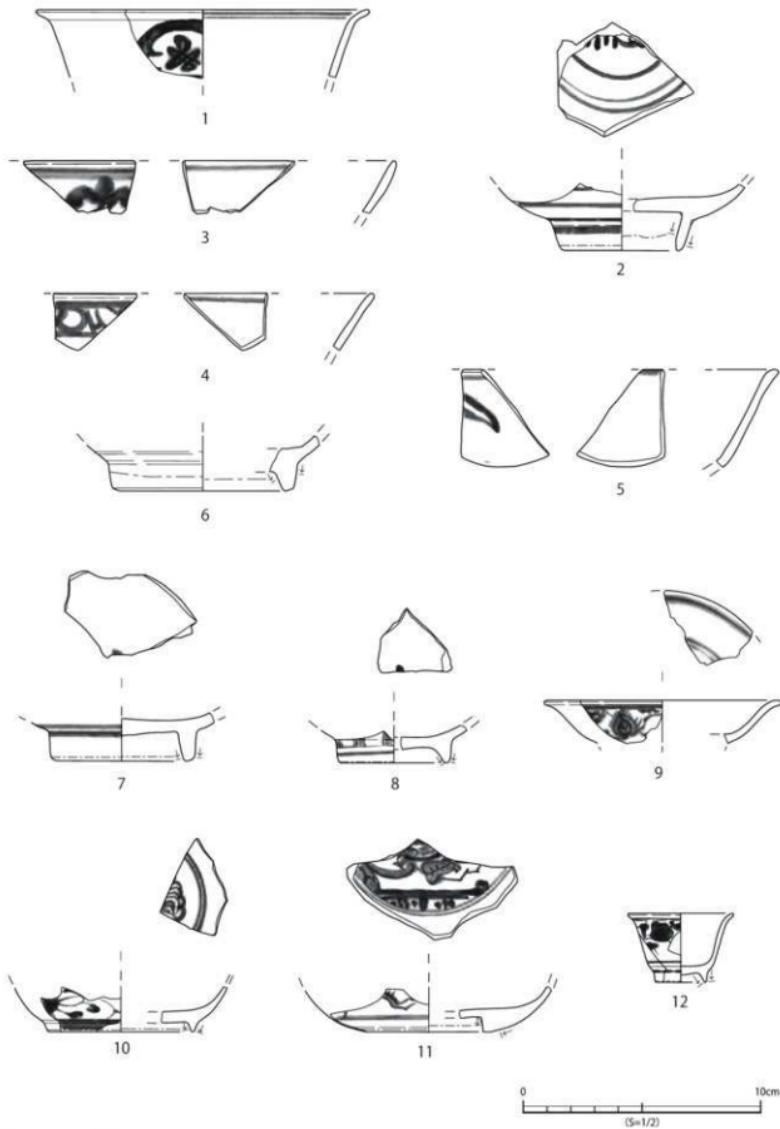
青花は総数40点出土している。出土状況としては、表採やI層・II層から26点、III層から12点出土している。遺構に伴うものは石積み1の裏込め土と土坑2の埋土から各1点出土している。年代が推定できる資料については、15世紀前半から19世紀のものが確認できた。内訳は、碗類が30点、皿が5点、小杯が1点、器種不明が4点で、碗・皿の分類については、沖縄分類（瀬戸ほか2007）を参考に行った。このうち特徴的な12点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第9表 青花出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序			遺構		合計	
				I層	II層	III層	石積み1	土坑2		
青花	碗	I縁部	2	3	3	4	—	1	13	29
		脚部	—	4	2	4	—	—	10	
		底部	—	2	2	2	—	—	6	
	小碗	底部	—	—	1	—	—	—	1	1
		I縁部	—	1	1	1	—	—	3	
	皿	底部	—	—	2	—	—	—	2	5
		I～底部	—	—	—	1	—	—	1	
	器種不明	脚部	1	—	2	—	1	—	4	4
合計				3	10	13	12	1	40	

第10表 青花観察一覧

辨認番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ()は推定値	観察所見			出土地	
第28図 図版21	1	碗	I縁	B1群	(14.0) — —	I縁は外反し、内外面に透明釉を施す。内面I縁に二重團線、外面は文花を描く。				I-c-4
	2	碗	底部	B1群	— — (5.3)	高台は器内が薄く、内傾する。内外面に透明釉を施す後、唇付と高台の一部を釉剥ぎする。内底面に二重團線、界線と「福」の文字文、外面には太さの違う二重團線と團線を描く。胎土は白色で緻密。				Ⅲ
	3	碗	I縁	C群	— —	I縁形態は直I、内外面に透明釉を施す。内面I縁に團線、外面に二重の界線と草花文を描く。				I-b
	4	碗	I縁	—	— —	I縁形態は直I、内外面に釉調の純い透明釉を施す。内面I縁に團線、外面は二重の界線と粗雑な草花文を描く。Ⅵ州窯系。				Ⅲ-a
	5	碗	I縁	—	— — —	I縁形態は直I、I-2はやや丸る。内外面に透明釉を施す。内外面I縁に團線、外面に葉文を描く。福建・広東系。				Ⅲ-a
	6	碗	底部	—	— (7.6)	内底面は露胎で、外側は高台内側で透明釉を施す後、釉剥ぎする。福建・広東系 17～18 c.				Ⅲ-b
	7	碗	底部	—	— (6.1)	型で形成、内外面に透明釉を施す後、唇付を釉剥ぎする。外面の高台上部と腹間に團線を描く。信息化系。				I-a
	8	小碗	底部	—	— (4.55)	型で形成、内外面に透明釉を施す後、唇付を釉剥ぎする。施継、釉剥ぎ、共に粗雑。外面は高台上部間に二重の界線と芭蕉草文を描く。信息化系。				Ⅲ-a
	9	皿	I縁	B1群	(10.0) — —	I縁は外反する。内外面に透明釉を施す。内面I縁に團線、内底面には二重團線。外面は界線と粗雑な官相草唐草文を描く。				Ⅲ-a
	10	皿	底部	B1群	— (6.1)	内外面に透明釉を施す後、唇付を釉剥ぎする。内底面に二重の界線と十字花文、外面に二重の界線と草花文を描く。胎土は白色で緻密。				Ⅲ-a
	11	皿	底部	C群	— (5.2)	平底を円周に削る跡の底の皿。内外面に透明釉を施す後、底面を釉剥ぎする。内底面に二重の界線と草花文を描く。外面は二重の界線と草花文を描く。胎土は白色で緻密。				Ⅲ-a
	12	小杯	I～底	—	(4.5) 2.9 (2.2)	I縁は外反する。内外面に透明釉を施す後、唇付を釉剥ぎする。内面は無文。外面は界線内に梅花文と高台上部間に團線を描く。景德鎮窯系。				Ⅲ-a-1



第28図 青花

5. その他の輸入陶磁器（第29図 第11・12表 図版22）

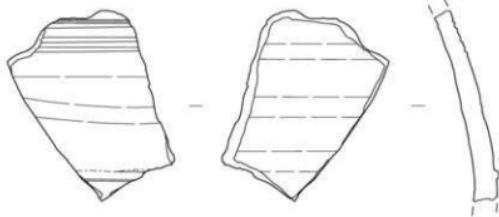
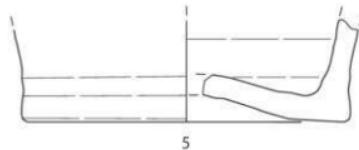
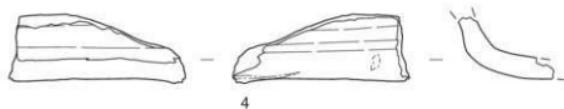
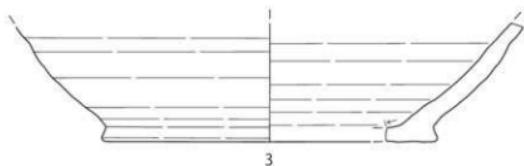
その他の輸入陶磁器は総数39点出土している。出土状況としては、表採やI層・II層から16点、III層から19点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から3点、土坑2から1点出土している。年代が推定できる資料については、15世紀半ばから17世紀代のものが確認できた。内訳は褐釉陶器が34点、ベトナム産染付の碗・タイ産の鉄絵の合子・色絵・緑釉陶器・鉄釉陶器が各1点出土している。このうち特徴的な6点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。なお褐釉陶器の分類については、沖縄分類（瀬戸ほか2007）を参考に行った。

第11表 その他の輸入陶磁器出土一覧

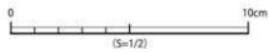
種類	器種	部位	表採	層序			遺構		合計			
				I層	II層	III層	石積み1	土坑2				
ベトナム産染付	碗	口縁部	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
タイ産鉄船	合子	胴部	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
褐釉陶器	鉢	胴部	—	—	—	1	1	—	2	3	34	
		底部	—	—	1	—	—	—	1			
	壺	胴部	1	7	2	15	1	—	26	27		
		底部	—	—	—	1	—	—	1			
	器種不明	胴部	—	—	1	1	1	1	4	4		
色絵	碗	胴部	—	—	1	—	—	—	1	1	1	
緑釉陶器	器種不明	胴部	—	—	—	1	—	—	1	1	1	
鉄釉陶器	瓶	胴部	—	—	1	—	—	—	1	1	1	
合計				1	9	6	19	3	1	39		

第12表 その他の輸入陶磁器観察一覧

排列番号 図版番号	番号	分類	器種	部位	口縁 器高 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第29図 図版22	1	ベトナム産 染付	碗	口縁	— — —	内面に簡線と波文、外面は二重周線と草花文?を描き、内外面に透明釉を施す。釉薬の発色は純く不透明で、釉薬表面には微小な穴と貫入が見られる。胎土は灰白色で軟質。	I c-4
	2	タイ産鉄船	合子	胴部	— — —	外面は鉄を含む粘着で複数の團線を描き、透明釉を施す。内面は露胎する。器内は薄く、胎土に黒色粒や白色粒を含む。	I b
	3	中国産 褐釉陶器	鉢	底部	— — (14.1)	底部は平底を高台状に形成する。腰部は膨らみながら緩やかに立ち上がる。内面に黒褐色釉を施し、外面は露胎するが、一部釉薬がかかる。外面に器面調整痕が残る。胎土は白色粒を含む。	II a
	4	中国産 褐釉陶器	壺	胴部	— — —	肩部は張り出し、腰部は口縁方向に窄まりながら立ち上がる。内外面に暗褐色釉を施す。胎土は白色粒や暗褐色粒を含む。5類(瀬戸ほか、2007) 15c中	III a-1
	5	中国産 褐釉陶器	壺	底部	— — (13.8)	底径は小さく、中心部は半球形状に上かる。内面から外表面まで暗褐色釉を施す。胎土は白色粒や暗褐色粒を含む。5類(瀬戸ほか、2007) 15c中	III a-1
	6	褐釉陶器	壺	胴部	— — —	外面は三重の沈線を施させ、帯状の凸部を形成する。外面に黒褐色釉を施すが、釉薬の発色は弱い。内面は露胎し、胎土に黒褐色粒を含む。東南アジア產か。	III a-1



6



第29図 その他の輸入陶磁器

6. 本土産陶磁器（第30図 第13・14表 図版23）

本土産陶磁器は総数58点出土している。出土状況としては、表採やI層・II層から46点、III層から11点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から1点出土している。内訳は、白磁が4点、染付が18点、色絵が1点、近・現代磁器類が19点、施釉陶器が15点、近・現代陶器が1点となる。染付の中には古伊万里の徳利、施釉陶器には肥前の内野山窯の碗などがあり、年代が推定できる資料については、17世紀後半から19世紀のものが確認できた。このうち特徴的な8点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第13表 本土産陶磁器出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序			遺構 石積み1	合計		
				I層	II層	III層		1	1	
白磁	碗	口縁部	—	—	1	—	—	1	1	4
	杯	口縁部	1	—	—	—	—	1	1	
	小杯	口～底部	—	—	1	—	—	1	1	
	器種不明	口縁部	—	—	1	—	—	1	1	
染付	碗	口縁部	—	1	3	—	—	4	—	18
	胸部	1	—	1	—	—	—	2	8	
	底部	—	—	2	—	—	—	2	—	
	小皿	口～底部	—	—	—	—	1	1	—	
	小皿	口縁部	—	1	1	—	—	2	6	
	小皿	胸部	—	1	—	—	—	1	—	
	底部	—	—	1	1	—	—	2	—	
	袋物	胸部	—	1	—	—	—	1	1	
	急須	口縁部	—	1	—	—	—	1	—	
	急須	底部	—	—	1	—	—	1	—	
色絵	碗	胸部	—	1	—	—	—	1	1	1
	碗	口～底部	—	—	1	—	—	1	1	
近・現代磁器	小皿	口～底部	1	—	1	—	—	2	—	19
	小皿	口縁部	—	2	2	—	—	4	8	
	小皿	底部	—	—	2	—	—	2	—	
	皿	口縁部	—	1	1	—	—	2	2	
	小杯	口～底部	—	—	1	—	—	1	1	
	香炉	胸部	—	—	1	—	—	1	—	
	香炉	底部	—	—	1	—	—	1	2	
	急須	胸部	—	—	2	—	—	2	3	
	急須	耳部	—	1	—	—	—	1	—	
	器種不明	胸部	—	2	—	—	—	2	2	
施釉陶器	器種不明	底部	—	1	—	—	—	1	1	15
	碗	口縁部	—	—	—	1	—	1	—	
	碗	胸部	—	—	1	1	—	2	3	
	小皿	口～底部	—	1	—	—	—	1	1	
	皿	胸部	—	—	1	—	—	1	1	
近・現代陶器	急須	胸部	—	1	—	—	—	2	2	8
	急須	耳部	—	1	—	—	—	1	1	
合計			3	16	27	11	1	58		

第14表 本土産陶磁器観察一覧

排岡番号 図版番号	番号	種類	器種	部位	口径 高さ 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第30回 図版23	1	染付	碗	底部	— — (4.55)	腹部から丸みを帯びて立ち上がる。内底面と外腹縁部に擦線を描く。内外面に透明釉を厚く施釉後、豊付を輪削ぎする。割れ入が見られる。高台の成形は粗雑で、胎土は白色で黒色を含む。	II a
	2	染付	碗	底部	— — (4.6)	「スカンカンマカイ」と呼ばれる型輪染付碗。内底面、外面はコバルト釉を型紙で絞付けする。全面に透明釉を施釉後、豊付を輪削ぎし、耐火土を施す。内定面には二か所に胎土目が見られる。近代磁器。	II a
	3	染付	小碗	底部	— — (3.0)	内外面に透明釉を施釉後、豊付を輪削ぎする。内底面は折枝文を描く。胎土は白色で緻密。	III b-3
	4	染付	小碗	口～底	(7.4) 4.40 (2.6)	外面はコバルト釉をゴム版で絞付けし、高台内底面に擦線を描く。全面に施釉後、豊付を輪削ぎする。近代磁器。	石積み1の 石材除去 作業中出土
	5	白磁	小杯	口～底	(5.0) 21.5 (2.1)	型で成形。内外面に透明釉を施釉後、豊付を輪削ぎする。胎土は白色で緻密。近代磁器。	II a
	6	染付	博利	胴部	— — —	外面は透明釉を施釉し、内面は一部透明釉が残かる。外面は上位に二重界線と網目目を描く。胎土は灰色で緻密。古伊万里。	I a
	7	施釉 陶器	小碗	口～底	(9.0) 4.30 (3.8)	腹部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁は外反する。豊付は垂直に形成し、外面筋曲線を工具で削え棱をつくる。内面から外面高台中位まで灰釉を施し、高台内は露胎する。胎土は灰色で緻密。	I a
	8	施釉 陶器	碗	胴部	— —	胴部は丸く膨らむ。内面は丁寧に器面調整するが、外面は工具痕を残す。内面は透明釉、外面に網目釉を施す。胎土は緻密。内野山窯。	III a-1

7. 沖縄産陶器（第31～35図 第15・16表 図版24～28）

沖縄産陶器は総数245点出土している。出土状況としては、表採やI層・II層から190点、III層から42点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から13点出土している。内訳は「施釉陶器（ジョウヤチ）」が77点、「無釉陶器（アラヤチ）」が158点、「陶質土器（アカムン）」が10点出土している。種類としては、碗・皿・瓶・鉢・壺・鍋・火取・火炉・急須・蓋・土瓶・擂鉢・水鉢・片口・甕・水甕等がある。このうち特徴的な42点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第15表 沖縄産陶器出土一覧 1

種類	器種	部位	表採	層序			遺構 石積み 1	合計
				I層	II層	III層		
施釉陶器	碗	口～底部	—	—	1	—	—	1
		口縁部	—	2	4	2	2	10
		胴部	—	1	4	2	1	8
		底部	2	2	4	2	—	10
	小碗	口縁部	—	1	1	1	—	3
		胴部	—	1	—	—	—	3
	皿	口縁部	—	1	—	—	—	1
		胴部	—	—	—	—	—	1
	瓶	口縁部	—	1	—	—	—	1
		胴部	—	—	1	—	—	1
	酒器	胴部	—	—	1	—	—	1
		底部	—	—	1	—	—	2
	袋物	胴部	—	—	2	1	—	3
		底部	—	—	2	—	—	2
	鉢	胴部	—	—	2	—	—	2
		底部	—	—	2	—	—	4
	壺	胴部	1	1	1	2	—	5
		底部	—	1	—	—	—	1
		6						

第15表 沖縄産陶器出土一覧2

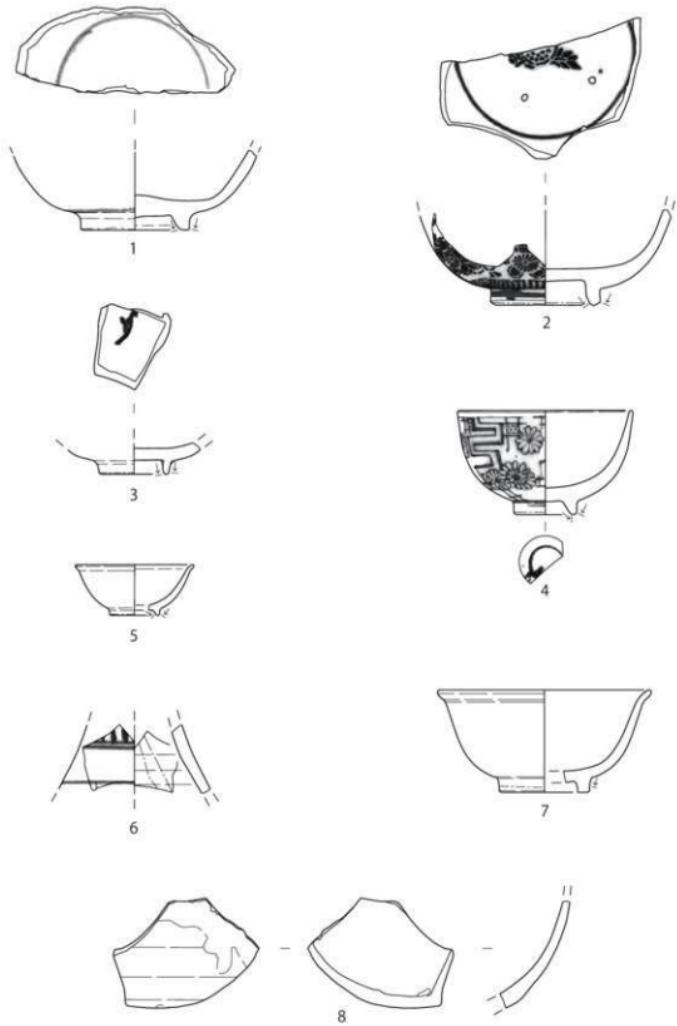
種類	器種	部位	表採	層序			遺構 石積み1	合計	
				I層	II層	III層			
施釉陶器	青・黄類	胸部	—	1	1	—	—	2	2
	鍋	胸部	—	—	—	1	—	1	2
	把子部	底部	—	1	—	—	—	1	1
	火取	底部	—	—	1	—	—	1	1
	急須	胸部	—	3	1	—	—	4	8
	蓋	端部	—	1	—	—	—	1	1
	器種不明	胸部	1	4	5	3	1	14	14
無釉陶器	碗	口縁部	—	1	—	1	—	2	2
	瓶	胸部	—	1	—	—	—	1	2
	袋物	底部	—	1	—	—	—	1	1
	鉢	口縁部	—	—	1	—	—	1	3
		底部	—	1	1	—	—	2	
	擂鉢	口縁部	—	1	1	—	—	2	
		胸部	—	1	3	3	—	7	12
		底部	—	3	—	—	—	3	
	水鉢	口縁部	—	3	—	—	—	3	4
		胸部	—	1	—	—	—	1	
	片口	口縁部	—	—	1	—	—	1	1
	壺	口縁部	—	1	—	—	—	1	
		胸部	—	—	1	—	—	1	8
	甕	底部	—	3	1	2	—	6	
	瓶	胸部	—	—	1	—	—	2	2
	青・黄類	底部	7	21	40	9	6	83	90
	水甕	胸部	—	1	—	—	—	1	1
	鍋	胸部	—	—	—	3	—	3	3
	火取	底部	—	—	—	—	1	1	1
	火炉	口縁部	1	1	—	—	—	2	
		耳部	—	—	1	—	—	1	
	火炉?	口縁部	—	—	1	—	—	1	1
	蓋	端部	1	—	—	—	—	1	1
器種不明	口縁部	—	—	—	1	—	—	1	
	胸部	—	4	1	5	1	11		21
	底部	—	1	3	—	—	—	4	
	部位不明	—	3	1	1	—	—	5	
	合計		16	77	97	42	13		245
陶質土器	鍋	口縁部	—	1	—	—	—	1	1
	火炉	胸部	—	1	—	—	—	1	1
	土瓶	胸部	—	—	1	—	—	1	1
	蓋	口縁部	1	—	—	1	—	2	
		胸部	—	—	2	—	—	2	
	器種不明	胸部	—	—	2	1	—	3	3
合計			10						

第16表 沖縄産陶器観察一覧 1

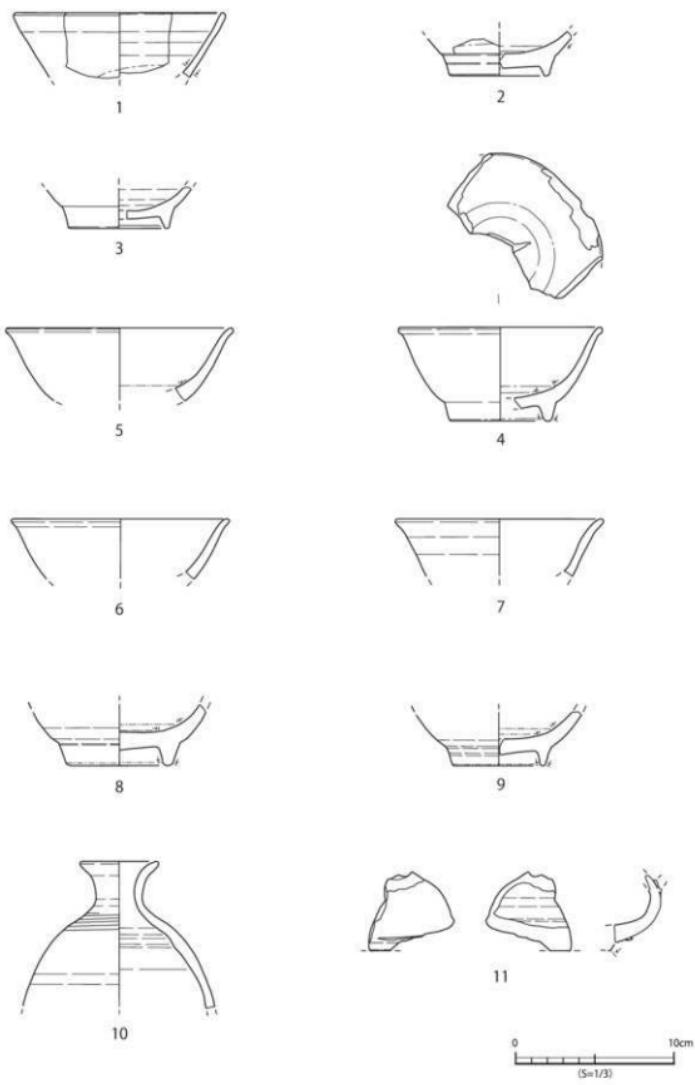
排岡番号 図版番号	番号	種類	器種	部位	口徑 高さ 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第31図 図版24	1	施釉	圓	口縁	(13.4) — —	腹部から口縁まで直線的に立ち上がる。内外面の腹部まで灰緑色の灰釉を施す。	Ⅲ a-1
	2	施釉	碗	底部	— — (6.4)	腹部は膨らまずに直線的に立ち上がる。腹部あたりまで灰緑色の灰釉を施し、内外底は露胎する。外面には跡が見られる。	表様
	3	施釉	圓	底部	— — (6.4)	腹部は膨らまずに直線的に立ち上がり、内外底は露胎する。形状より灰陶碗の底。	Ⅲ
	4	施釉	圓	口～底	(12.9) 5.95 (6.5)	腹部が緩やかに膨らみ口縁が外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す後、豊付と内底面を蛇の目状に釉割ぎする。細かい買入が見られる。	Ⅱ a
	5	施釉	碗	口縁	(14.4) — —	口縁は緩やかに外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す。粗い買入が見られる。	石積み1の 石材除去 作業中出土
	6	施釉	圓	口縁	(13.8) — —	口縁は緩やかに外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す。粗い買入が見られる。	I a
	7	施釉	圓	口縁	(13.2) — —	口縁は緩やかに外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す。粗い買入が見られる。	I a
	8	施釉	圓	底部	— — (6.8)	腹部が緩やかに膨らむ。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す後、豊付と内底面を蛇の目状に釉割ぎする。細かい買入が見られる。	I c-4
	9	施釉	圓	底部	— — (6.0)	腹部が緩やかに膨らむ。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す後、外底豊付と内底面を蛇の目状に釉割ぎする。粗い買入が見られる。	II b
	10	施釉	瓶	口縁	(5.0) — —	口縁は外反し、頭から肩にかけて緩やかに膨らむ。肩上位に沈線を残す。外面上に釉調の浅い褐色釉を施す。	I a
	11	施釉	酒器	底部	— — —	外面を白土で白化粧し、透明釉を施す。内面は露胎。注ぎ口取り付け部を青緑色の釉薬で色付ける。外面には溶着痕と石ハゼと考えられる痕が見られる。	II a
第32図 図版25	12	施釉	鉢	底部	— — (8.8)	内面は白土で白化粧し、透明釉を施す。内底面を蛇の目状に釉割ぎする。外表面は内台まで黒釉を施し、豊付を釉割ぎする。内底面に重ね焼き痕を残し、粗い買入が見られる。	I a
	13	施釉	壺	底部	— — (9.1)	内外面に黒釉を施す後、釉割ぎし。高台の一帯を三角に抉る。内面に植蠅痕と重ね焼きの痕を残す。	I c-4
	14	施釉	火取	底部	— (7.8)	高台は低く、腹部が垂直に立ち上がる。上部は欠損し、残存部は露胎する。	II b
	15	施釉	蓋	端部	底(5.85) — —	外面は跨頭まで白土で白化粧し、文様を線刻後、藍色の釉薬で色付して透明釉を施す。内面は釉薬せず、一部は粗土が残る。拂りから萼にかけては露胎、5mmの空気泡穴を持つ。拂りは欠損する。	I a
	16	施釉	急須	胴部	— — —	全面を白土で白化粧後、二重の界線と格子文を線刻し、蓝色の釉薬で色付する。内面は透明釉が施され、細かな買入が見られる。注ぎ口は欠損するが、貼り付け痕と小孔で確認できる。	I b
	17	施釉	急須	胴部	— — —	外面は線刻後、白土で埋めて象嵌にし、灰釉を施す。線刻は口縁から腹部にかけて古本絵を模倣的に成す。内面は施釉せず、露胎し植蠅痕を残す。	I a
	18	施釉	急須	底部	— — (8.0)	全面を白土で白化粧後、文様を線刻し、蓝色の釉薬で色付する。内面から外腹底部まで透明釉が施され、一部は脚に掛る。外外面に細かな買入が見られ、内面は植蠅痕が残る。外底面には、張り付けられた脚が一部残存する。	II b
	19	施釉	急須	底部	— (7.4)	全面を白土で白化粧後、内面から外腹底部まで透明釉を施す。外底面は水平に削られ、腹部下位に張り付けられた脚が一部残存する。	Ⅱ a～Ⅲ a-1
	20	施釉	急須	底部	— — —	外底面は水平に削られ、内面から外腹底部まで光沢のある白色釉を施す。細かな買入が見られる。	I a
	21	無釉	片口	口縁	— — —	外面の口縁を押さず、内から外に押し出し、丁寧に注ぎ口を形成する。胎土は粗く、内外面に泥跡を施す。	II a

第16表 沖縄県陶器観察一覧

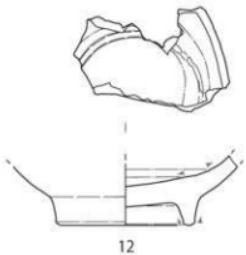
排闇番号 図版番号	番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径 ()は推定値	観察所見	出土地
第33図 図版26	22	無釉	鉢	口縁	— — —	先端は外側に水平に折り曲げ、逆「L」字型に口縁を形成する。内面屈曲部は規則で、口縁平坦部に沈線を残す。焼き締めは弱い。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）IV式。	II a
	23	無釉	鉢	底部	— — (15.0)	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外表面は丁寧に器面調整され、内面は微妙に工具痕が残る。焼き締めは良好。	II a
	24	無釉	鉢	底部	— —	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外表面は丁寧に器面調整されるが所々工具痕が残る。内面の器面調整はやや粗い。焼き締めは良好。	I a
	25	無釉	擂鉢	口縁	— — —	先端は外側に水平に折り曲げ、逆「L」字型に口縁を形成する。外面屈曲部に明顯な工具痕が残る。内面屈曲部は緩やかで、胴部に向けたやや凹凸がある。胎土は粗雑で、黒褐色を多く含む。焼き締めは弱い。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）I式。	II b
	26	無釉	擂鉢	口縁	— — —	先端は外側に水平に折り曲げ、逆「L」字型に口縁を形成する。内面屈曲部は規則で、口縁平平坦部には自然軸があり、重ね伏せる痕が見られる。内面にスリ日を施す。外表面には回転による調整痕が明顯に残る。焼き締めは良好。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）IV式。	I b
	27	無釉	擂鉢	底部	— — —	底部から胴部にかけてやや直線的に立ち上がる。外表面の器面調整は丁寧にされ、内面にスリ日を施す。胎土に貝を含む。焼き締めは弱い。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）IV式。	I a
	28	無釉	擂鉢	底部	— —	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外表面の器面調整は粗雑で、内面はスリ日を施す。胎土は粗雑で、黒褐色粒や赤褐色粒を含む。焼き締めは弱い。	I a
	29	無釉	水鉢	口縁	(25.4) — —	I) 神は丸く形成し、口縁から胴部にかけ緩やかに内溝させる。外表面には浅く不規則な楕円形の沈線と横波状文様が残る。内外面の器面調整は丁寧で、内面に微かに工具痕が残る。焼き締めは良好。 II) 神は丸く形成し、口縁から斜面にかけ凹凸を残せる。外表面屈曲部に浅く不明瞭な幅広の二重性縦と横で波状文を描く。内外面の器面調整は丁寧で、内面に微かに工具痕が残る。焼き締めは良好。	I c-4
第34図 図版27	30	無釉	水鉢	口縁	(25.2) — —	I) 神は丸く形成し、口縁から斜面にかけ凹凸を残せる。外表面屈曲部に浅く不明瞭な幅広の二重性縦と横で波状文を描く。内外面の器面調整は丁寧で、内面に微かに工具痕が残る。焼き締めは良好。 II) 神は丸く形成し、口縁から斜面にかけ凹凸を残せる。外表面屈曲部に浅く不明瞭な幅広の二重性縦と横で波状文を描く。内外面の器面調整は丁寧で、内面に微かに工具痕が残る。焼き締めは良好。	I c-4
	31	無釉	盃	口縁	(10.8) — —	先端を外側に折り曲げ、口縁を形成する。彫刻は肩から垂直に立ち上がるが、外表面は光沢があり、焼き締めは良好。	I a
	32	無釉	盃	底部	— — (17.2)	底部から胴部にかけてやや直線的に立ち上がる。外表面は丁寧に器面調整される。内底には自然軸があり、外底面には砂目が残る。外表面は光沢があり、底面は薄く、焼き締めは良好。音納・知念。	III a-1
	33	無釉	盃	底部	— — (10.6)	底部から胴部にかけてやや直線的に立ち上がる。外表面は丁寧に器面調整されるが、内底には自然軸による調整痕が明顯に残る。胎土は粗雑で、黒褐色粒を含む。焼きムラが確認でき、焼き締めはやや不良。	Ⅲ?
	34	無釉	盃	底部	— — (19.2)	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外底面の角を削り、面取りする。内底面は丁寧に器面調整される。	I a
	35	無釉	盃	底部	— — —	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。内外面の器面調整は粗雑で、工具痕が残される。焼き締めは良好。	II a
	36	無釉	盃	底部	— — —	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外底面の角は角ナド調整で丸める。外表面はやや丁寧に器面調整され、内面は工具痕が明顯に残る。	I b
第35図 図版28	37	無釉	瓶	底部	— — (7.4)	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外表面の器面調整は粗雑で、石ハゼが見られる。内面の器面調整の工具痕を残す。	I a
	38	無釉	火取	底部	— — (12.0)	平底の底部から胴部にかけてやや垂直に立ち上がる。底面を強く外表面は丁寧に器面調整されるが、外底面の角は割く、面取りされる。内面には回転による調整痕が明顯に残る。胎土は赤褐色粒や白色粒を含む。焼き締めはやや良好。	石積み1の基底石直下
	39	無釉	火炉?	口縁	(16.0) — —	口縁は少し傾斜した平底を持ち、内洗する。外表面は丁寧に器面調整され、外表面には浅く楕円形の凹窓でない沈線を持つ。口縁にスス痕を残す。胎土は粗雑で、赤褐色粒や白色粒を含む。焼き締めは弱い。	II a
	40	無釉	火炉	口縁	— — —	陶質土器。内外面は丁寧に器面調整される。内面にスス痕を残す。胎土にガラス質の鉢物を含む。	表採
	41	無釉	火炉	耳	— — —	陶質土器。「ヒル（火炉）」の取っ手。中央に10mm程度の孔を穿つ。胎土にガラス質の鉢物を含む。	II a
	42	無釉	蓋	端部	— — (5.6)	陶質土器。土器の蓋と考えられる。縁みは欠損する。内外面に錐削痕を残し、胎土にガラス質の鉢物を含む。	表採



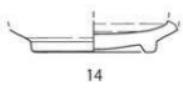
第30図 本土産陶磁器



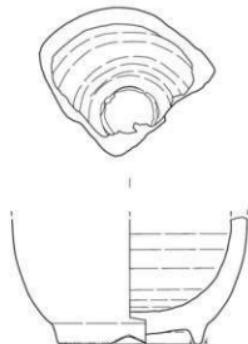
第31図 沖縄産陶器 1



12



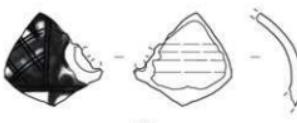
14



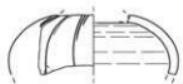
13



15



16



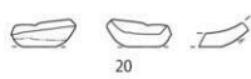
17



18



19



20



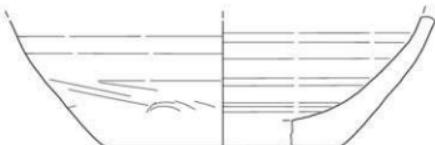
第32図 沖縄産陶器2



21



22



23



24



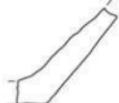
25



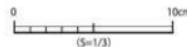
26



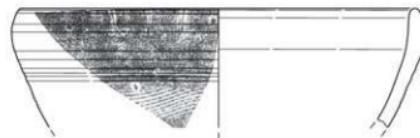
27



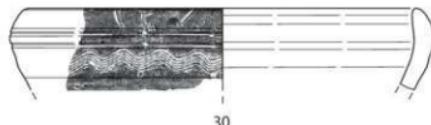
28



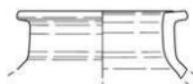
第33図 沖縄産陶器3



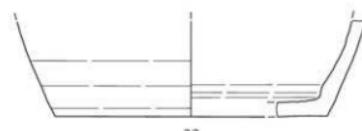
29



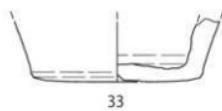
30



31



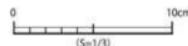
32



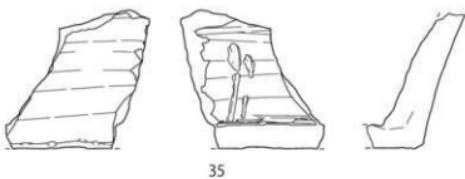
33



34



第34図 沖縄産陶器 4



35



36



37

38



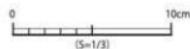
39

40

41



42



第35図 沖縄産陶器 5

8. 円盤状製品（第36図 第17・18表 図版29）

円盤状製品は総数11点出土している。出土状況としては、I層・II層から6点、III層から5点出土している。遺構に伴うものは無い。内訳は土器を加工したものが4点、本土産陶器を加工したもののが2点、沖縄産陶器を加工したものが5点である。このうち特徴的な2点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第17表 円盤状製品出土一覧

形状	材質	残存状況	層序			合計		
			I層	II層	III層	2	3	
円形	土器	完形	—	—	2	2	3	10
		1/2以上	—	—	1	1	1	
		1/2未満	—	1	—	1	1	
	本土産陶器	1/2以上	1	—	—	1	1	
		完形	—	1	—	2	—	
		1/2未満	—	1	—	1	1	
方形	土器	完形	—	—	1	1	1	1
		合計	2	4	5	1	1	

第18表 円盤状製品観察一覧

辨別番号 図版番号	番号	形状	法量 (cm・g)				観察所見	出土地
			長軸	短軸	厚み	重量		
第36図 図版29	1	円形	3.75	3.65	1.75	13.9	沖縄産施釉器の小皿の底部を利用して円形板に形成される。全体の1/3は小皿内底の施削ぎの外周に沿って丁寧に打削するが、残りは高台内底の外周に沿って粗雑に打削され、やや小さな円形に仕上げる。	II a
	2	円形	3.2	3.15	0.75	11.1	沖縄産無施釉器を利用して円形板に形成される。素材の内外面から丁寧に打削し、整った円形に仕上げる。	II a

9. 土製品（第36図 第19表 図版29）

土製品は総数2点出土している。いずれもIII層から出土しており、遺構に伴うものは無い。3は煙管の雁首部分と推定され、土製（瓦質）である。

第19表 土製品観察一覧

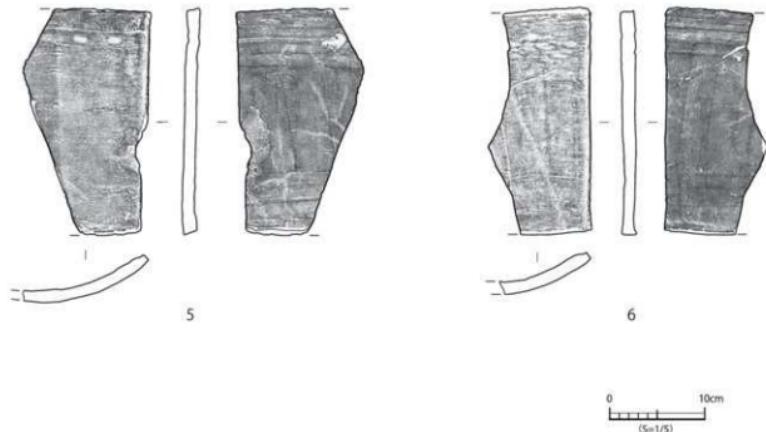
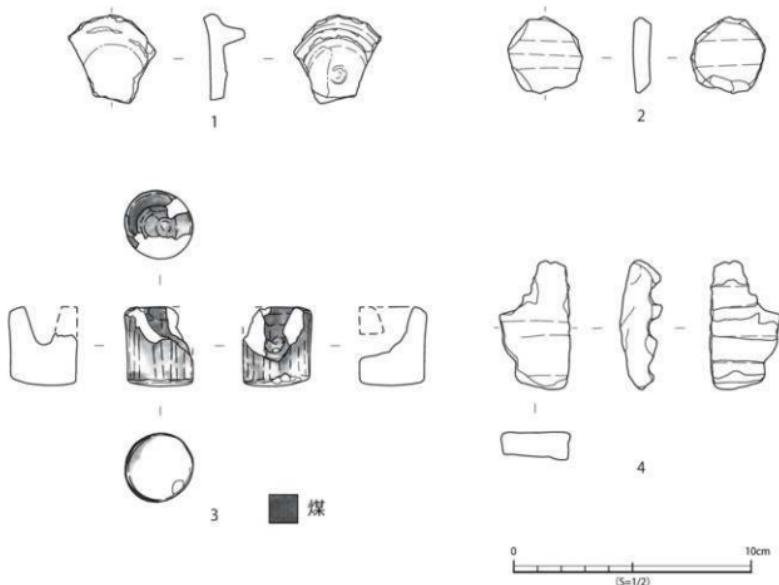
辨別番号 図版番号	番号	種類	法量 (cm・g)				観察所見	出土地
			長軸	短軸	厚み	重量		
第36図 図版29	3	煙管	3.35	2.85	2.9	29.4	煙管の雁首部分。瓦質の素材を円柱状に形成し、煙草の葉を詰めるための凹みと吸引用の跡を差し込むための孔を形成する。外面は丁寧に磨き調整され、火皿部分と外面の一部に側が付着する。火皿部分と孔にかけて部分的に欠損する。	III a-1
	4	不明	5.45	2.95	1.15	16.0	外面は面調整が成され、内面は断面が「U」字状の痕跡が並列する。胎土は粗雑で、赤褐色を含む。	III b-1～3

10. 瓦（第36図 第20・21表 図版29）

瓦は総数16点出土している。出土状況としては、表採やI層・II層から13点、III層から2点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から1点出土している。内訳は平瓦が10点、丸瓦が2点、種類が不明なものが4点となる。全て明朝系赤瓦で、このうち特徴的な2点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第20表 瓦観察一覧

辨別番号 図版番号	番号	種類	残存状況	法量 (cm)	観察所見		出土地
第36図 図版29	5	平瓦	1/2以上	全長: 23.85	凸面と端部は表面を丁寧にナデ調整し、横位のナデ痕が残る。四面には布目と細圧痕を残す。色調は褐色で、胎土に貝を含む。焼成は良好。		I a
	6	平瓦	1/2以下	全長: 23.30	凸面と端部は表面を丁寧にナデ調整し、横位のナデ痕が残る。四面には布目と細圧痕を残す。色調は褐色。焼成は良好。		I a



第36図 円盤状製品・土製品・瓦

第21表 瓦出土一覧

種類	色調	部位・残存状況	表採	層序			遺構 石積み 1	合計
				I層	II層	III層		
平瓦	赤色	側面部	—	—	2	—	—	2
		抉端部	—	1	—	—	—	1
		広端部	—	3	—	—	—	3
		肩部	—	—	1	—	—	1
		1/2以上	—	1	—	—	—	1
		1/2以下	—	1	—	—	—	1
丸瓦	赤色	部位不明	—	—	—	1	—	1
		肩部	—	1	—	—	—	1
		玉縁部	1	—	—	—	—	2
種類不明	赤色	肩部	—	—	—	—	1	1
		部位不明	—	1	1	1	—	3
合計				1	8	4	2	16

11. 金属製品 (第37・38図 第22・23表 図版30・31)

金属製品は総数31点出土している。出土状況としては、I層・II層から20点、III層から9点出土している。遺構に伴うものは、石積み遺構から2点出土している。内訳は簪が2点、釘が4点、針金が2点、金属片が13点、留め具が2点、鎌・蓋・刀子・板状製品・鉄鍔・鉄滓が各1点、不明品が2点である。このうち特徴的な8点を図化し、その詳細を観察一覧に記載する。

1は簪、2は鉄鍔で、鑿型のものと推定される。4の刀子は直線的な刃部をもつ。

第22表 金属製品出土一覧

種類	材質	残存状況	層序			遺構 石積み 1	合計
			I層	II層	III層		
簪	青銅	半部	1	1	—	—	2
釘	鉄	完形	1	—	—	—	1
鍔	鉄	破損	3	—	—	—	3
針金	鉄	破損	—	1	—	—	1
金属片	鉄	破損	1	1	—	—	2
留め具	鉄	破損	6	2	5	—	13
留め具	鉄	完形	1	—	—	—	1
		破損	1	—	—	—	2
蓋	鉄	完形	1	—	—	—	1
刀子	鉄	破損	—	—	1	—	1
板状製品	鉄	破損	—	—	—	1	1
鉄鍔	鉄	完形	—	—	1	—	1
種類不明	鉄	部位不明	—	—	2	—	2
鉄滓	鉄	—	—	—	—	1	1
合計			15	5	9	2	31

第23表 金属製品観察一覧 1

神岡番号 岡阪番号	番号	器種	残存状況	法量 (cm・g)			観察所見	出土地
				長軸	短軸	厚み		
第37岡 岡阪30	1	簪	竿部	7.5	0.35	0.3	2.5 青銅製の簪である。頭面部が失われて竿部のみが残っているので、全体の形状は不明。竿の先端に向かって漸次細くなっている。竿の断面は6角形を呈する。	Ⅲ a
	2	鉄鍔	完形	5.9	1.5	1.05	10.8 鉄製の鍔である。矢頭の平面形が直角を呈するものである。鍔身の変形により鍔身と竿の区別ははつきりしない。鍔身の基部幅は矢頭まではほぼ同じで、漸次幅が薄くなり刃を作っている。	Ⅲ a-2
	3	角釘	破損	11.1	1.6	1.1	44.3 鉄製の角釘である。釘が逆立てて板状に剥離していたものを接合・保存処理している。先端が欠けているが、全体の形状は残っている。頭部がL字型で、先端に向かって細くなっている。	Ⅲ a
	4	刀子	破損	21.2	2.3	1.1	83.6 鉄製の刀子である。刃がほぼ直線を描き、先端に向かって漸次細くなっている。某部が破損しているので全体の形状は不明だが、細身的印象である。頭部が逆立てて板状に剥離していたので、接合・保存処理をした。	Ⅲ a-2
	5	板状製品	破損	5.15	2.3	0.35	8.4 破損しているため全体の形状や用途は不明。厚さ0.35cmの薄い鉄板を素材に板状に加工している。長軸の先端の両端を丸く整形しているが、片面は折れ曲がっている。	石積み 1 の基底
	6	不明	部位不明	5.8	5.45	1.15	41.8 厚みが約1cmの鉄製の破片。破損しているため形状は不明である。頭のためか角みが一定していないが、全体的にゆるやかにカーブしている。	Ⅲ a-1

第23表 金属製品観察一覧2

辨認番号 図版番号	番号	器種	残存状況	法量 (cm・g)				観察所見	出土地
				長軸	短軸	厚み	重量		
第38図 図版31	7	不明	部位不明	3.65	3.25	1.3	15.8	厚みが約1mmの底割の破片。破損しているため全体の形状は不明である。 鏡のためはっきりしないが、正面がアバク状に所々空洞になっており。 裏面は平坦ではあるが中心に向かって埋んでいる。	Ⅲ b-2～4
	8	鉄津	—	5.65	4.75	1.9	71.4	全体的に暗灰色を呈する。無数の気泡痕が表面に見られる。	石川県立 作中出土

12. 銭貨 (第39図 第24・25表 図版31)

銭貨は総数5点出土しており、いずれも銅銭である。出土状況としては、Ⅰ層・Ⅱ層から2点、Ⅲ層から3点出土している。遺構に伴うものはない。内訳は寛永通宝が2点、無文銭が2点、銭名が不明なものが1点となる。全てを図化し、その詳細を観察一覧に記載する。

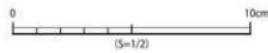
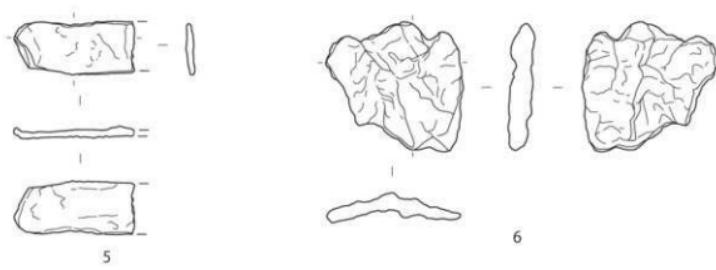
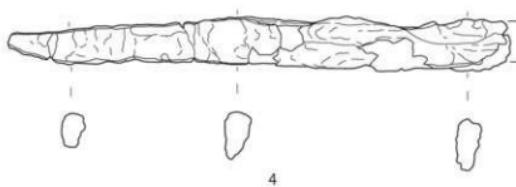
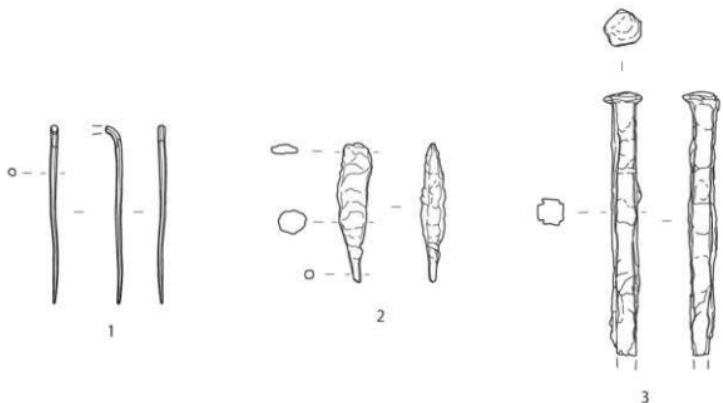
3は内径の文字が判然とせず、輪の形状も不定である。4・5はいわゆる鳩目銭である。

第24表 銭貨出土一覧

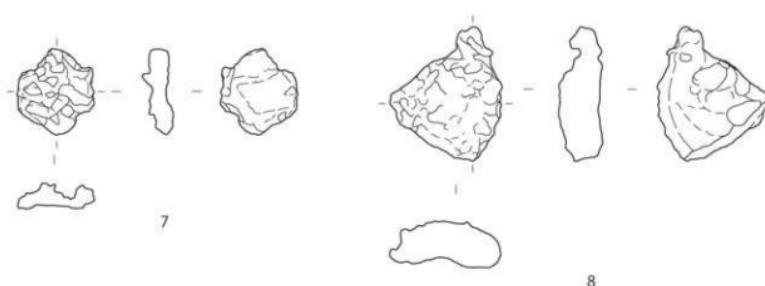
銭名	種類	残存状況	層序			合計
			I層	II層	III層	
寛永通寶	銅銭	完形	—	—	1	1
		破損(1/2以上)	1	—	—	2
天○○寶	銅銭	破損(1/2以上)	—	—	1	1
無文銭	銅銭	完形	—	1	1	2
合計			1	1	3	5

第25表 銭貨観察一覧

辨認番号 図版番号	番号	銭名	法量 (cm・g)						観察所見	出土地
			長軸	短軸	厚み	孔(長)	孔(短)	重量		
第39図 図版31	1	寛永通寶	2.44	2.44	0.12	0.53	0.53	3.5	「寛」「永」「通」「寶」が確認できる。背文なし。	Ⅲ c
	2	寛永通寶	2.05	1.95	0.1	0.58	—	1.4	「寛」「寶」が確認できる。「永」「通」は欠損する。背文なし。	Ⅲ a
	3	天○○寶	2.5	2.1	0.12	0.55	—	2.0	「天」「情?」「寶」が確認できる。「通」は欠損する。背文なし。(天情寶室:北宋践 1017年鑄造)	Ⅲ b-2～4
	4	無文銭	1.3	1.3	0.7	0.75	0.7	0.4	鳩目銭であり、銭文はなく、銭厚は薄い。中央の孔は粗雑な方孔を成す。	Ⅲ a
	5	無文銭	1.4	1.35	0.7	0.75	0.75	0.3	鳩目銭であり、銭文はなく、銭厚は薄い。中央の孔は粗雑な方孔を成す。	Ⅲ a-1

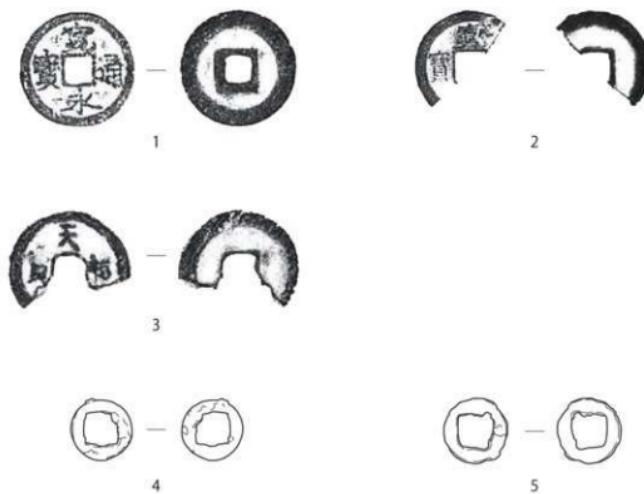


第37図 金属製品 1



第38図 金属製品2

0 10cm
(S=1/2)



第39図 錢貨

0 3cm
(S=1/1)

13. 石器（第40図 第26・27表 図版32）

石器は総数5点出土している。出土状況としては、表採やⅡ層から3点、Ⅲ層から2点出土している。遺構に伴うものはない。内訳は敲石兼磨石が4点、砥石が1点である。

全点を図化し、その詳細を觀察一覧に記載する。

第26表 石器出土一覧

種類	種類	現存状況	表採	層序		合計
				Ⅱ層	Ⅲ層	
砥石	粘板岩	破損	—	1	—	1
敲石兼磨石	砂岩	破損	1	1	2	4
合計			1	2	2	5

第27表 石器觀察一覧

辨別番号 図版番号	番号	種類	材質	法量 (cm · g)			観察所見	出土地
				長軸	短軸	厚み		
第40図 図版32	1	敲石兼磨石	砂岩	10.1	8.5	6.65	620 破損している。台形のような形をしている。表面に円形の敲打痕がある。また、側面にも敲打痕が残っている。	Ⅲ-a-1
	2	敲石兼磨石	砂岩	4.9	3.75	1.65	37.1 破損しているため、全体の形状は不明であるが、卵形を縦半分し、横半分に切ったような形をしている。表面に敲打痕があり、右側面に研磨痕が見られる。	Ⅲ
	3	敲石兼磨石	砂岩	8.6	7.3	3.85	300 表面のみ当初の器形を残し、他は破損している。残存する面は研磨がなれ、所々むきに敲打痕が見受けられる。左上に半円状に削られた痕が残る。	Ⅱ-a
	4	砥石	粘板岩	6.55	5.4	1.75	83.1 残存する表面は滑らかになっており、數条の細い研磨痕が見られる。破損した裏面にも削面に整形の跡がみられる。側面に一部、当初の裏面が残っているが、あとは削割したかもしくは破損している。	Ⅱ-a
	5	敲石兼磨石	砂岩	12.7	7.85	6.45	930 表面に研磨痕がある。中央部に敲打痕があり残んでいる。また、上部と内側面にも敲打痕がある。	6A

14. 貝製品・骨製品（第41・42図 第28・29表 図版33）

貝製品は総数76点出土している。出土状況としては、Ⅰ層・Ⅱ層の現代層から14点、Ⅲ層から62点出土している。遺構に伴うものはない。骨製品は1点のみで、Ⅱ層からの出土である。

内訳は、貝匙が1点、独楽が3点、シガヤー捕りの仕掛けが7点、有孔製品が62点、加工痕のあるものが3点出土している。

骨製品はサメ類の脊椎骨を素材とする有孔製品が1点出土している。これらのうち特徴的なものを選び、貝製品は18点、骨製品は1点を図化し、詳細は觀察一覧に記載している。それぞれの製品の概要については以下に種類別に記す。

1) 貝匙

ヤコウガイ製貝匙の破損品が1点出土している。外面の外層は入念に研磨され、真珠層が露出している。柄端の中央部にV字型に抉りを入れ、魚の尾鱗状に加工している。

2) 独楽

マガキガイ製の独楽が3点出土している。体層部を打ち欠いて螺旋を露出させている。

殻頂部の先端には使用によると思われる摩耗が認められる。

3) シガヤー捕りの仕掛け

イモガイの殻頂部に孔を穿ったもので、現在でも見られるようなシガヤー（小型のタコ）を捕る仕掛けに使われたものと考られる。イモガイ科の4種類7点が出土している。内訳は、クロミナシ4点、アジロイモ・キヌカツギイモ・ヤセイモが各1点である。

4) 有孔製品

総数62点出土している。卷貝は10種22点で内訳は、ハナマルユキ7点、イトマキボラ5点、ハナビラダカラ・ホシキヌタが各2点、オハグロガイ・コモンダカラ・スイショウガイ・ニシキウズ・マガキガイ・ヤクシマダカラが各1点となっている。

二枚貝は9種40点出土している。内訳は、カワラガイ21点、リュウキュウザル7点、アラスジケマンガイ3点、トガリシラナミ・ヒメシャコ・ユウカゲハマグリが各2点、イオウハマグリ・ベニエガイ・リュウキュウマスオが各1点となっている。素材としてカワラガイが最も多く利用されており、次いでリュウキュウザルとハナマルユキとなっている。出土量が豊富なため、保存状態が良好な資料を中心に図化した。

5) 加工痕のある製品

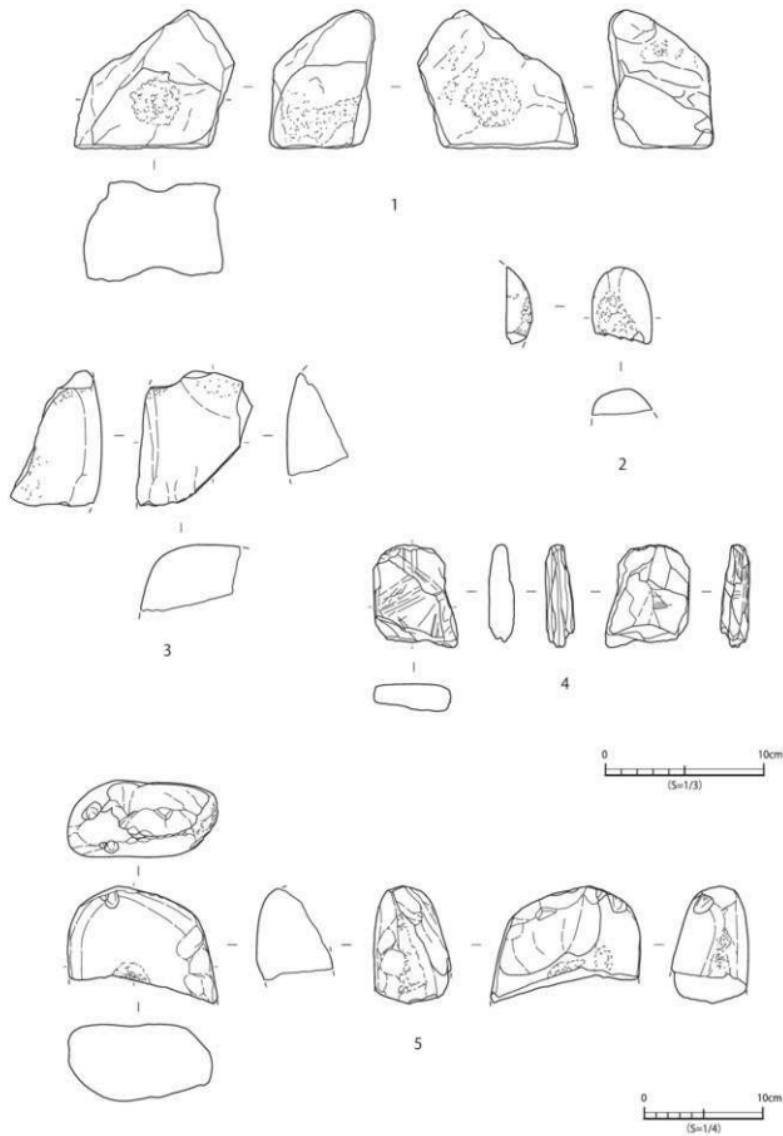
加工痕のあるものが3点出土している。その内、特徴的なイモガイ科のサラサミナシを1点図化した。螺塔部を敲打し、体層部を縦位に切り取って側縁部の両端に抉りを入れており、内面には光沢が残っているが、器種や用途等も不明である。その他に、ヤコウガイとカワラガイに加工痕のあるものが出土している。

第28表 貝製品・骨製品出土一覧

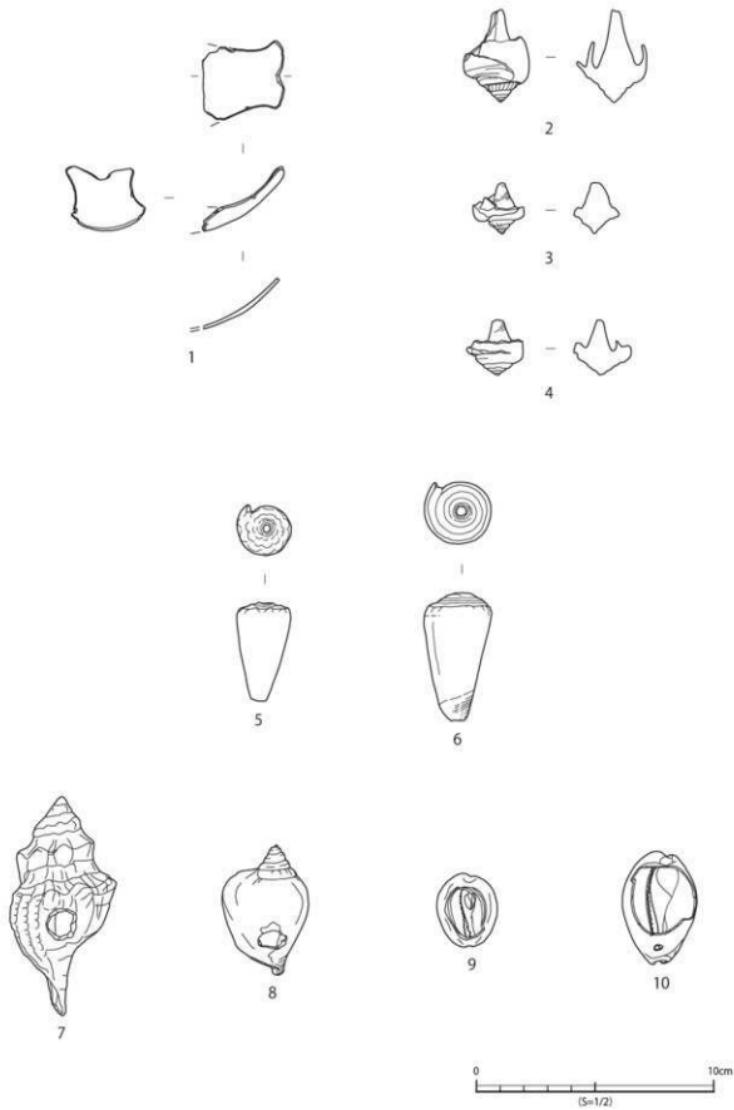
分類	種類	残存	順序			合計		
			I層	II層	III層	I	II	III
貝製品	貝殻 卷貝	ヤコウガイ	破損	—	—	1	1	1
	換葉 卷貝	マガキガイ	完形	—	—	3	3	3
	シガヤー捕りの仕掛け 卷貝	クロミナシ	完形	—	—	3	3	4
		破損	—	—	1	1	1	7
		アシロイモ	完形	—	—	1	1	1
		キヌカツギモ	完形	—	—	1	1	1
		ヤセイモ	完形	—	—	1	1	1
貝製品 有孔製品	卷貝	ニシキウズ	完形	—	—	1	1	1
		オハグロガイ	完形	—	1	—	1	1
		マガキガイ	破損	—	—	1	1	1
		スイショウガイ	完形	—	—	1	1	1
		ヤクシマダカラ	破損	—	1	—	1	1
		ホシキヌタ	完形	—	1	1	2	2
		コモンダカラ	完形	—	—	1	1	1
		ハナビラダカラ	完形	—	—	2	2	2
		ハナマルユキ	完形	1	2	4	7	7
		イトマキボラ	完形	—	—	3	3	5
	二枚貝	破損	1	—	—	1	2	62
		ベニエガイ	破損	—	—	1	1	
		リュウキュウザル	完形	1	1	5	7	
		カワラガイ	完形	2	—	19	21	
貝製品 加工痕	二枚貝	ヒメシャコ	完形	—	—	1	1	2
		破損	—	—	—	1	1	
		トガリシラナミ	完形	—	1	1	2	
		アラスジケマンガイ	完形	—	—	3	3	
		ユウカゲハマグリ	完形	—	—	2	2	
	卷貝	イオウハマグリ	完形	—	1	—	1	3
		リュウキュウマスオ	完形	—	—	1	1	
骨製品	有孔製品	ヤコウガイ	破損	1	—	—	1	1
		サラサミナシ	破損	—	—	1	1	
	二枚貝	カワラガイ	完形	—	—	1	1	1
		サメ類	完形	—	1	—	1	
合計			6	9	62	77		

第29表 貝製品・骨製品観察一覧

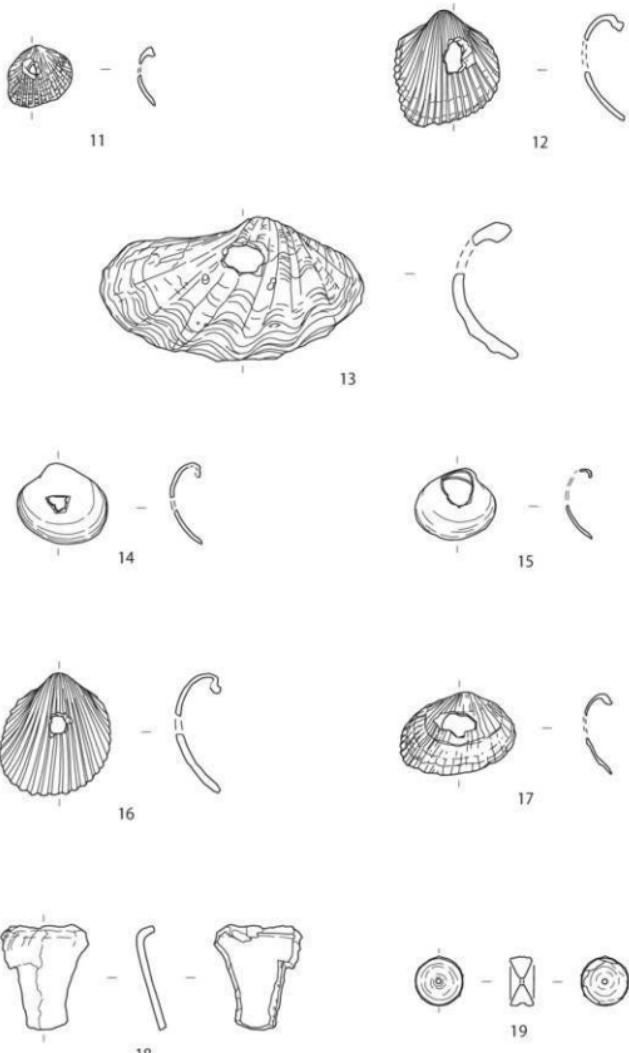
掉回番号 回版番号	番号	分類	種類	法量 (cm · g)					観察所見	出土地	
				長軸	短軸	厚さ	孔 (長)	孔 (短)	重量		
第41回 回版33	1	貝此	ヤコウガイ	4.5	3.15	0.2	—	—	4.4	鰓端部、身部の一端を欠く。 鰓端中央部にV字状の抉りを入れ、魚の尾ひれ状に仕上げている。 加工は丁寧で、外側の輪郭は完全に削られ、真鰓まで研磨されている。 残存状況から小型の貝造製品と考えられる。	III
	2	蝶貝	マガキガイ	3.9	2.75	—	—	—	14.8	体肩部を打ち欠いて、殻頂・螺軸中心を残している。 螺頭部がわざわざして摩耗している。	III b2～4
	3	蝶貝	マガキガイ	2.15	2.15	—	—	—	5.1	体肩部を打ち欠いて、殻頂・螺軸中心を残している。 バランスをとるため外側の一部がやわらかに残っている。 螺軸の部分がやや破損している。螺頭部がわざわざして摩耗している。	III b2～4
	4	蝶貝	マガキガイ	2.35	2.4	—	—	—	8.3	体肩部を打ち欠いて、殻頂・螺軸中心を残している。 螺頭部が少分やや摩耗している。螺軸の部分がやや破損している。	III b1～3
	5	シガヤー 捕りの仕掛け	クロミナシ	4.18	2.3	—	0.35	0.3	11.5	螺頭部の中央に孔を穿っている。 背や底化しているが外側の螺軸は残っている。 シガヤー（小型のタコ）捕りに使う仕掛けと考えられる。	III a1
	6	シガヤー 捕りの仕掛け	ヤセイモ	5.43	2.85	—	0.45	0.4	29.6	螺頭部の中央に孔を穿っている。全体的に風化している。シガヤー（小型のタコ）捕りに使う仕掛けと考えられる。	III
	7	有孔 製品	イトマキボラ	9.25	4.5	—	1.05	1.0	65.0	背面の外側により孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 孔の周囲は摩耗している。水溶を受けている。	III b2～4
	8	有孔 製品	スイショウガイ	5.45	3.65	—	1.2	0.75	23.3	背面の外側より孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 外側はやや底化している。全体的にやや風化している。	III b2～4
	9	有孔 製品	ハナマルユキ	3.1	2.55	—	2.05	1.35	7.3	背面部の孔を穿いている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 水溶を受けている。	III a1
	10	有孔 製品	ホシキヌタ	4.8	3.15	—	2.8	2.6	15.1	背面部の孔を穿いている。 内部の螺軸部分を削すように背面を欠いている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 螺頭の反対側にももう一つ孔を穿っている。	III b5
第42回 回版33	11	有孔 製品	アラスジグマシガイ	2.7	2.6	0.1	0.4	0.3	3.0	体肩部の中央からやや左寄りに孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。	III a2
	12	有孔 製品	カワラガイ	4.9	4.4	0.15	1.3	0.8	13.0	体肩部の螺頭寄りに縦長の孔を穿っている。	III a1
	13	有孔 製品	トガリシラミ	11.1	6.1	0.3	1.7	1.2	81.4	中央のやや螺頭より孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 周囲と孔の周縁はやや摩耗している。水溶を受けている。	II a
	14	有孔 製品	ユウカグマバグリ	3.8	3.4	0.15	0.75	0.65	5.4	体肩部の中央から螺頭寄りやや台形の孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 内面の側面がわざわざして残っている。	III b2～4
	15	有孔 製品	ユウカグマバグリ	3.4	3.05	0.1	1.5	1.2	2.9	體肩部に近い体肩部に孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 内面の側面がわざわざして残っている。	III
	16	有孔 製品	リュウキュウザル	5.15	4.65	0.25	0.75	0.7	17.0	体肩部の中央から螺頭寄りにやや内角い孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。	III b1～5
	17	有孔 製品	リュウキュウマスオ	4.85	3.5	0.1	1.4	1.0	5.3	体肩部のやや中央にいびつな孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 内面の裏面が色褪せつつも残っている。	III b2～4
	18	加工痕	サラサミナシ	4.45	3.7	0.3	—	—	9.3	螺頭部を敲打し、体肩部を縦に切り取って加工したものである。 縦に切り取った螺頭部の両端に抉りを入れてある。 なお、内面には光面が残っているが、自然によるものか削いたものが判然しない。外面上にはわざわざして褪色が残っている。	III b2～4
骨 製品	19	有孔 製品	サメ類	2.05	2.0	1.0	0.2	0.2	3.0	サメ類の脊椎骨を利用し、その中央部に孔を穿っている。凸凹部を研磨し平滑に加工する。	II a



第40図 石器



第41図 貝製品 1



第42図 貝製品2・骨製品

0
10cm
(S=1/2)

15. 自然遺物 (第 43 ~ 45 図 第 30 ~ 37 表 図版 34 ~ 41)

1) 貝類遺体

本調査地区より出土した貝製品を除く貝類遺体は、腹足綱（巻貝）が 22 科 60 種、二枚貝綱 16 科 32 種の計 38 科 92 種が確認できた（不明を除く）。これらの種別・層別検出状況及び生息場所類型組成に示した。（第 43 ~ 45 図）

最少個体数の算出方法について、巻貝は完形（全体の様相が確認でき、かつ僅かな欠けであれば完形とする）と殻頂部が残存しているものを合計し、最少個体数とした。なお、破片のみ出土した場合、1 個体として扱っている。サザエ科は殻と蓋に分けて数え、多い方を最少個体数としている。二枚貝は左右それぞれの完形・殻頂を合計し、点数の多い方を最少個体数として扱った。また、巻貝と同様に破片のみ出土した場合、数に限らず 1 個体として扱っている。

膨大な量の貝類遺体が出土しているが、種類別にみると突出して多いのが、アラスジケマンガイで全体の 71% を占めている。次いでカンギクの 14%、カワラガイ 3%、ユウカゲハマグリ 3% の順となっている。

層別の出土状況をみると、Ⅲ層が圧倒的に多く 30,387 個出土しており、次いで、Ⅱ層の 1,094 個、Ⅰ層 874 個の順となっている。Ⅲ層出土の資料が圧倒的に多いのは、貝溜まりから出土したもののが含まれているからである。

これらを生息場所類型（第 45 図）で見てみると、アラスジケマンガイの生息する河口干潟・マングローブ域と、カンギク・カワラガイ・ユウカゲハマグリの生息する内湾・転石地域がほとんどを占めており、サンゴ礁域はわずか 1% 程度であった。

2) 脊椎動物遺体

本資料からは、硬骨魚綱 10 群、鳥綱 1 群、哺乳類綱 7 群が得られた。分類群が特定できないものは「種不明」とした。これら全ての種類の詳細については出土一覧にまとめている。

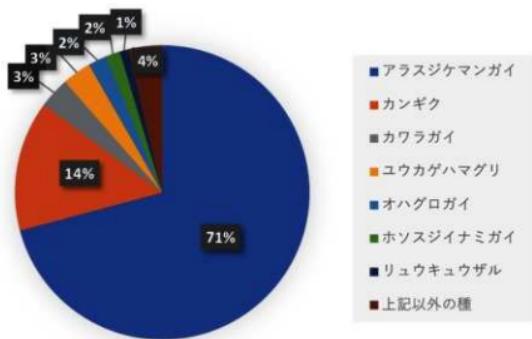
魚骨は 58 点出土している。資料の半数が種類不明であるが、ダツ科・カマス科・アジ科・タイ科・エフキダイ科・ベラ科・ブダイ科・モンガラカワハギ科・ハリセンボン科がみられる。

哺乳類骨は 405 点出土し、全体の 6 割がウシ・ウマ・ブタ・イノシシで占められる。その他の哺乳類骨は、海獣、ヤギ・トリ・イヌが 4 割を占める。これらのうち、特徴的なものやカットマークが残存するものを抽出して写真図版に掲載している。

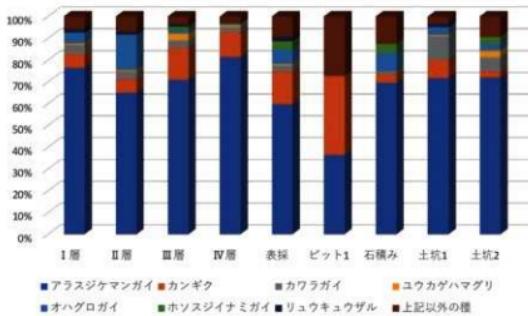
第 30 表 貝類遺体の生息場所類型表

I 外洋・サンゴ礁域	0 潮間帶上部 (I - ノーチ、Ⅲ・マングローブ) 1 潮間帶中部・下部 2 亜潮間帶上部 (I - イノーネ) 3 干瀬 (I にのみ適用) 4 砂質面およびその下部	a 岩礁、岩盤 b 転石 c 岩礁底、砂泥底、砂底 d マングローブ植物上 e 淡水の流入する礁底
II 内湾・転石地域	5 止水 6 流水	
III 河口干潟・マングローブ域	7 林内 8 林内・林縁部 9 林縁部 10 海浜域	
IV 淡水域	11 打ち上げ物 12 化石	
V 陸域		
VI その他		

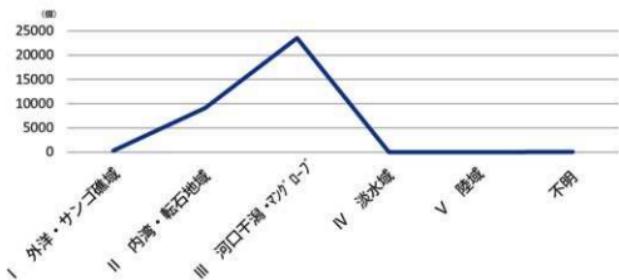
沖縄県文化財調査報告書第 84 集『古我地原貝塚（本文編）』1987 を参考に作成



第43図 貝類遺体種別検出状況



第44図 貝類遺体層別検出状況



第45図 貝類遺体生息場所類型組成

第31表 貝類遺体の分類と生息場所類型

腹足綱 GASTROPODA		生息場所類型	
ニシキウズ科 Trachidae			
1	ニシキウズ <i>Trachia muricata</i>	I-a	
2	ギンタバハマ <i>Tetrae granosa</i>	I-a	
3	サラサバハイ <i>Tetrae solitaria</i>	I-a	
4	イシダラミ <i>Morulaea lata confusa</i>	II-b	
サザエ科 Turbinidae			
5	ヤコウガイ <i>Turbo (Turbo) marmoratus</i>	I-a	
6	カンギク <i>Lottia cornuta cornuta</i>	II-b	
7	カンギク属 <i>(lppressum)</i>	II-b	
アマオナガツノ貝科 Nodularia			
8	コシダカアマツノ貝 <i>Nodularia (Cystospira) rotunda</i>	I-b	
9	マルアマツノ貝 <i>Nodularia (Argonauta) kuroiwae</i>	II-b	
10	アマオナガツノ貝 <i>Nodularia (Nodularia) adspersa</i>	I-b	
11	ニシキアマツノ貝 <i>Nodularia (Emarginata) polita</i>	I-c	
オニアツカガイ科 Cerithiidae			
12	オニノツノガイ <i>Cerithium nodulosum</i>	I-c	
13	イワツノモリ <i>Ocyprora bivalviformis</i>	II-b	
14	クワノミカニモリ <i>Ocyprora petrea oblongata</i>	I-b	
ウミニア科 Turritellidae			
15	リュウキョウウミニカ <i>Turritella flavigaster</i>	II-c	
16	イボウルニア <i>Turritella zonalis</i>	III-c	
17	カワニナ科 Planorbidae	-	IV-5+6
キハミニカ科 Potamididae			
18	フトハトタリ <i>Potamidea novaezelandiae</i>	III-d	
19	カワツア <i>Potamidea pugnans</i>	III-c	
20	マドモウヒミニカ <i>Potamidea salina</i>	III-c	
ソデボラ科 Strombidae			
21	オハグロガイ <i>Steromia (Conularia) arcuata</i>	II-c	
22	オハグロガイ? <i>Steromia (Conularia) arcuata?</i>	II-c	
23	フトスミムカタモト <i>Steromia (Conularia) lobata</i>	II-c	
24	マダガキイ <i>Steromia (Coturnix) lobata</i>	II-c	
25	スイシメウガイ <i>Steromia (Littorinimorpha) turturilla</i>	II-c	
26	ソデボラ科不明	<i>Steromia spp.</i>	
タカラガイ科 Cyprinidae			
27	ヤクシンドカラ <i>Macrotoma arctica</i>	I-a	
28	ホシキタ <i>Lymnaea stagnalis</i>	I-a	
29	コモシカラ <i>Emarginula crassa</i>	I-a	
30	ハナビシダカラ <i>Monotropa umbellata</i>	I-a	
31	ハナマツユキ <i>Monotropa uniflora</i>	I-a	
タマゴガイ科 Naticidae			
32	トミガゼ <i>Natica elongata</i>	I-c	
33	ヘアソガトミガゼ <i>Natica fuscans</i>	I-c	
34	リスガゼ <i>Natica melanostoma</i>	I-c	
35	ホウシユタマ <i>Natica pallidior</i>	II-c	
フジワラ科 Benthidae			
36	ミカヅカラボラ <i>Cymatium (Benthopelma) microstomum</i>	I-a	
37	シオガラボラ <i>Cymatium (Cymatium) maritimum</i>	I-a	
38	ククリガラボラ <i>Cymatium (Cymatium) maritimum</i>	I-a	
ムシロガ科 Nuculariidae			
39	イモヨリハイ <i>Nucula elongata</i>	I-c	
40	ホンシロハイ <i>Nucula (Atrypula) glans</i>	I-c	
41	ゴブハイ <i>Nucula (Terebrula) effusa</i>	I-a	
エゾバコ科 Buccinidae			
42	シマベッコウハイ <i>Buccinum sinistrale</i>	I-c	
イトマキボラ科 Fasciolaridae			
43	イトマキボラ <i>Fasciolaria (Fasciolaria) iaspis</i>	I-a	
44	ナガシマキボラ <i>Fasciolaria flava</i>	I-a	
45	リュウキョウウツマモ <i>Littorina (Rhomboseptaria) polygonum</i>	I-a	
46	ゾノマキモドキ <i>Littorina (Littorina) locusta</i>	I-a	
47	チトセラ <i>Littorina nigeriana</i>	I-c	
オニコブリ科 Turrididae			
48	コキニコブリ <i>Nittium carolinianum</i>	I-a	
アッキガタ科 Muricidae			
49	コガシゼキ <i>Ocenebra (Tropis) eriginea</i>	I-a	
50	ガネゼキボラ <i>Ocenebra (Tropis) brauni</i>	I-a	
51	ウネレシダマン <i>Ocenebra marginata</i>	I-a	
52	ヒロラキレシダマン <i>Ocenebra crenulata</i>	II-b	
53	ツノイキシ <i>Ocenebra tuberculata</i>	I-a	
イモガタ科 Conidae			
54	ハイロミナシ <i>Conus (Habenaria) radiatus</i>	I-c	
55	サラサナシ <i>Conus (Habenaria) cognatus</i>	I-a	
56	ジュエクササガタイモ <i>Conus (Irregularia) irregularis</i>	I-a	
57	マダラモモ <i>Conus (Irregularia) erubens</i>	I-a	
58	クロモシ <i>Conus (Conus) formosanus</i>	I-a	
59	アジロモシ <i>Conus (Doriscus) peruviana</i>	I-c	
60	キメガタキモ <i>Conus (Argonauta) frigida</i>	I-a	
61	ヤセモモ <i>Conus (Argonauta) reticulata</i>	I-a	
62	イモガタ科不明 <i>Conus spp.</i>	-	
腹足綱 GASTROPODA		生息場所類型	
タツシ科 Veneridae			
63	マルタニシ <i>Venerupis philippinarum</i>	IV-6	
64	オキナワタニシ <i>Cyprina turbinata rugosus</i>	V-8	
65	アフリカマイマイ科 Achatinidae	Achatina fulica	V-9
66	ナシバシイマツ科 Conidae	Suttoria maculosa maculosa	V-8
67	オキナワスカラマイマイ科 Bradybaenidae	Acusta depresia	V-9
68	色見不明	unknow (marine gasteropods)	-
二枚貝綱 Bivalvia			
カキガイ科 Arcidae			
1	カカリエキガイ <i>Arca (Solenites) strobila</i>	II-1-a	
2	ベニエキガイ <i>Arca (Ulmus) argenteola insita</i>	II-2-a	
3	リュウキョウウサウルボラ <i>Arcastra striolata</i>	II-2-c	
4	ソメワケグリ <i>Glycymeris (Vivipara) veneta</i>	II-2-c	
5	ミドリアオリ <i>Pectuncula maculata</i>	I-a	
6	クロコトウガイ <i>Pectuncula marginifera</i>	I-4-a	
7	オハグロガイ <i>Saccostrea mytilana</i>	I-4-a	
8	ウミガキ科 Spondylidae	Spondylus glaber (Esquimaux)	-
9	ウラキツキガイ <i>Catalpa pectinifera</i>	II-2-c	
10	ホケザシガイ科 Chlamididae	Chlamys sp.	-
11	シレナシジミ科 Carditidae	Cardita crassa	III-6-c
12	リュウキョウウザル <i>Rigigigia elegans</i>	II-2-c	
13	カワラガイ <i>Rigigigia undulata</i>	II-2-c	
シャコガイ科 Pectinidae			
14	ヒメシャコ <i>Pecten opercularis</i>	I-2-a	
15	ヒレシャコ <i>Pecten opercularis</i>	I-2-c	
16	トガリシナミナミ <i>Pecten novaezelandiae</i>	I-1-a	
17	シャコガイ科不明 <i>Pecten spp.</i>	-	
マルスレガタ科 Veneridae			
18	ヌメタガタ <i>Venerupis perspecta</i>	II-1-c	
19	フラシジマセイゼイ <i>Glypheania testudinaria</i>	III-c	
20	ホルシジマセイゼイ <i>Glypheania perspecta</i>	II-1-c	
21	コウカジマセイゼイ <i>Pisium sepositum</i>	II-2-c	
22	イオウカジマセイゼイ <i>Pisium sepositum</i>	II-1-c	
23	マルオキマセイゼイ <i>Licinaria testudinaria</i>	I-2-a	
24	リュウキョウウザリ <i>Sigillina festucaria</i>	II-2-c	
25	ヒムリュウキョウウザリ <i>Sigillina leachi</i>	II-2-c	
26	ハマグリ属 <i>Mytilus sp. (Esseus)</i>	II-2-c	
27	ダラオキシジミ <i>Cerastoderma edule</i>	II-1-c	
28	マルスレガタ科不明 <i>Veneridae spp.</i>	-	
ジジバタガタ科 Donacidae			
29	リュウキョウナミコ <i>Donax siliqua</i>	I-1-c	
ニコロタガタ科 Tellinidae			
30	リュウキョウシタリ <i>Tellina (Tellina) pallidula</i>	II-1-c	
31	モチヅキモサザ <i>Ceratilium revolutum</i>	I-2-c	
シオサザナミ科 Pannopidae			
32	マスオガイ <i>Pannopelta elegans</i>	II-1-c	
33	リュウキョウマオス <i>Pannopelta obscurata</i>	II-1-c	
ハカガタ科 Macridae			
34	リュウキョウバカガイ <i>Macrida maculata</i>	II-2-c	
チドリマスク科 Murexidae			
35	イソハマグリ <i>Murex striatus</i>	I-1-c	
36	一枚貝目不明 <i>unknown (marine bivalve)</i>	-	

*製品のみに見られるコモンカラ・ハナマルユキ・キヌカツギイモ・トガリシナミも含めて記載。

- ・奥谷尚司「日本近海産貝類図鑑【第二版】」東海大学出版部 2017
- ・行田義三「貝の図鑑 採集と標本の作り方」株式会社 南方新社 2012
- ・和田忠次「汽水域に生息する貝類たち－その生態研究史と保全－」東海大学出版部 2018

第32表 貝類遺体出土一覧（巻貝1）

科名	貝種名	生息地	残存	表採	層序				通横			合計	最少個体数	
					I層	II層	III層	IV層	石地み	土坑1	土坑2	土坑3		
ニシキウズ科	ニシキウズ	I-2-a	完形	-	-	-	4	-	-	-	-	-	4	58
			殻頂	-	3	3	48	-	-	-	-	-	54	
	ギンタガハマ	I-4-a	殻頂	-	-	2	6	-	-	-	-	-	8	71
			殻頂	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
サザエ科	サラサバティ	I-4-a	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
			完形	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	
	イシダタミ	II-1-b	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	3
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
ヤコウガイ	ヤコウガイ	I-4-a	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
			完形	19	40	58	4,233	25	3	11	1	4	4,394	
	カンギク	II-1-b	殻頂	4	16	11	245	1	-	3	-	-	280	4,741
			殻頂	-	1	-	9	-	-	-	-	-	10	
アマオブネガイ科	カンギク蓋	I-1-b	完形	-	-	1	54	1	-	-	-	-	56	56
			完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	
	コシダカアマガイ	I-1-b	完形	-	-	-	10	-	-	-	-	-	10	11
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
アマオブネガイ科	マルツマオブネ	II-1-b	完形	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	3
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
	アマオブネガイ	I-1-b	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3	3
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
オニツツノガイ科	ニシキアマオブネ	I-1-c	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
	オニツツノガイ	I-2-c	完形	-	-	-	38	-	-	-	-	-	38	1
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
オニツツノガイ科	イワカニモリ	II-1-b	完形	1	-	1	64	1	-	-	-	-	67	105
			殻頂	-	-	2	-	-	-	-	-	-	3	
	クワノミカニモリ	I-1-b	完形	-	-	-	15	-	-	-	-	-	15	28
			殻頂	-	-	-	13	-	-	-	-	-	13	
ウミニナ科	リュウキヨウウミニナ	II-2-c	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
			完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
	イボウミニナ	III-1-c	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2
			破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
カワニナ科	カワニナ類	IV-5・6	殻頂	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1
			完形	-	-	1	4	-	-	-	-	-	5	
	フトヘナタリ	III-0-d	殻頂	-	-	8	-	-	-	-	-	-	8	13
			破片	-	-	3	-	-	-	-	-	-	3	
キバウミニナ科	カワアイ	III-1-c	完形	-	-	-	9	-	-	-	-	-	9	14
			殻頂	-	-	5	-	-	-	-	-	-	5	
	マドモチウミニナ	III-1-c	完形	-	-	5	-	-	-	-	-	-	5	40
			殻頂	-	-	1	32	-	-	1	-	1	35	
ソデボラ科	オハグロガイ	II-2-c	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	659
			破片	6	26	127	176	-	4	1	-	-	341	
	フトジムカシモト	II-2-c	完形	-	2	1	3	-	-	-	-	-	6	6
			殻頂	1	-	2	5	-	-	-	-	-	8	
ソデボラ科	マガキガイ	II-2-c	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	14
			完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	
	スイショウガイ	II-2-c	殻頂	-	-	3	-	-	-	-	-	-	3	5
			破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
タカラガイ科	種不明	—	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
	ヤクシマダカラ	I-2-a	殻頂	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1
			完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
タカラガイ科	ホシキヌタ	I-2-a	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2
			破片	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	
	ハナビラダカラ	I-1-a	完形	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	4
			殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
タマガイ科	トミガイ	I-2-c	殻頂	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1
			完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
	リスガイ	I-2-c	殻頂	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	2
			完形	1	-	-	8	-	-	-	-	-	9	
タマガイ科	ホウシュノタマ	II-1-c	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	10
			完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	

第32表 貝類遺体出土一覧（巻貝2）

科・名	貝種名	生息地	残存	表記	層序				遺構			合計			
					I層	II層	III層	IV層	石室	土坑1	土坑2	土坑3			
フジツガイ科	ミツカドボラ	I-2-a	殻頂	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
	シオボラ	I-2-a	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	3	5
	ククリボラ	-	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1
ムシロガイ科	イボヨフバイ	I-1-c	完形	-	-	1	6	-	-	-	-	-	7	7	7
	キンシバイ	I-1-a	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	9
	ヨツババイ	I-1-a	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
エゾバイ科	エゾバイ	II-1-c	完形	-	-	1	99	-	-	-	-	-	100	107	107
	シマベッコウバイ	II-1-c	殻頂	-	1	-	6	-	-	-	-	-	7	107	107
イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a	完形	-	3	2	9	-	-	-	-	-	14	22	22
	イトマキボラ	I-2-a	殻頂	1	1	1	4	-	-	1	-	-	8	24	24
	ナガイトマキボラ	I-2-a	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	1	1
	リュウキュウツノマタ	I-3-a	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1	33
	ツノマタモドキ	I-3-a	殻頂	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	4	4
	チトセボラ	I-2-c	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2	2
	チトセボラ	I-2-c	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2	2
	オニコブシ科	コオニコブシ	I-3-a	完形	-	-	-	3	-	-	-	-	3	5	5
アッカガイ科	コガネゼキ	I-2-a	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
	ガソニキボラ	I-4-a	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
	ウネリイシダマシ	I-3-a	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	6
	ヒロウネレイシダマシ	II-1-b	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
	ツノレイシ	I-3-a	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	2
	ハイロミナシ	-	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
イモガイ科	サラサミナシ	I-2-a	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
	ジュズカケサヤガ	I-1-a	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
	タイモ	I-1-a	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	2
	マダライモ	I-1-a	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	2
	クロミナシ	I-1-a	完形	-	-	1	11	-	1	-	-	-	13	15	26
	クロミナシ	I-1-a	殻頂	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	15
	アジロイモ	II-2-c	完形	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	3	3
	ヤセイモ	I-2-a	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	1
タニ科	種不明	-	殻頂	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2	1
	マルタニ	IV-6	殻頂	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
	マルタニ	IV-6	完形	-	1	1	6	1	-	-	-	-	9	9	9
ヤマタニ科	オキナワヤマタニシ	V-8	殻頂	-	-	1	3	-	-	-	-	-	4	15	15
	オキナワヤマタニシ	V-8	破片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	2
	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V-9	完形	-	1	-	1	-	1	-	-	3	3	3
ナンバンマイマイ科	シユリマイマイ	V-8	完形	-	1	-	5	-	-	-	-	-	6	13	13
	シユリマイマイ	V-8	破片	-	-	1	6	-	-	-	-	-	7	13	13
オナジマイマイ科	オキナワスカラマイマイ	V-9	殻片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	2
	オナジマイマイ科	オキナワスカラマイマイ	V-9	殻片	1	-	-	4	-	-	-	-	-	5	5
合計					40	114	274	5,495	30	11	21	4	6	5,995	5,879

第33表 貝類遺体出土一覧（二枚貝1）

科名	貝種名	残存	左右	生息地	表記	層序				通構			合計		最少 個体数
						I層	II層	III層	IV層	（標示）	土坑1	土坑2	土坑3		
フネガイ科	カリガネエガイ	完形	右	II-1-a	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	1
	ベニエガイ	完形	左		-	2	-	16	-	-	-	-	-	18	
				I-2-a	-	-	1	14	-	-	-	-	-	15	
		殻頭	左		1	-	-	2	1	-	-	-	-	4	40
	リュウキュウサルボオ	殻頭	右		-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	
		完形	左		-	2	-	6	-	-	-	-	-	8	61
		右			-	1	-	3	-	-	-	-	-	4	
		殻頭	左	II-2-c	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	20
	タマキガイ科	殻頭	右		-	-	1	2	-	-	-	-	-	4	
		破片	右		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
ウグイスガイ科	ソメワケゲリ	完形	右	II-2-c	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2
	ミドリアオリ	完形	左		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
		右		I-1-a	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	6
		殻頭	左		-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	
	クロチョウガガイ	殻頭	右	I-4-a	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1
イタボガキ科	オハグロガキ	殻頭	左	I-1-a	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1
ウミミク科	メンガイ類	完形	左		-	-	4	-	-	-	-	-	-	4	
		右			-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	
		殻頭	左		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
		破片	左		-	-	3	-	-	-	-	-	-	3	
ツキガイ科	ウラキツキガイ	完形	左		-	-	1	2	-	-	-	-	-	3	
		右		II-2-c	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	6
		殻頭	右		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
キクザルガイ科	キクザル類	殻頭	右	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1
シジミ科	シレナシジミ	完形	左		-	2	1	12	-	-	-	-	-	15	
		右			-	2	-	16	-	-	-	1	-	19	
		左		III-0-c	-	2	3	12	-	-	-	-	-	17	
		右			-	-	7	1	-	-	-	-	-	8	
		殻頭	左		-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	
		破片	右		-	-	1	2	-	-	-	-	-	3	
ザルガイ科	リュウキュウザル	完形	左		3	5	7	140	1	-	1	-	-	157	
		右			-	6	7	125	-	-	1	-	-	139	
		左		II-2-c	-	2	-	7	-	-	-	-	-	9	
		右			-	2	-	8	-	-	-	-	-	10	
		殻頭	左		-	-	-	5	-	-	-	-	-	5	
	カワラガイ	殻頭	右		-	-	1	4	-	-	-	-	-	5	
		完形	左		3	12	14	457	2	-	6	1	-	492	
		右			3	16	16	430	2	1	11	-	-	479	
		殻頭	右		-	3	5	39	-	-	1	-	-	48	
		破片	左		1	4	3	45	1	-	-	1	-	55	
		右			-	-	2	17	-	-	-	-	-	19	
		殻頭	右		-	-	-	19	-	-	-	-	-	19	

第33表 貝類遺体出土一覧（二枚貝2）

科名	貝種名	残存 左右	生息地	表採	層序				遺構			合計	最少 個体数	
					I層	II層	III層	IV層	GMLH1	土坑1	土坑2	土坑3		
シャコガイ科	ヒメシャコ	完形 左		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	4
		右		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
		殻頭 左	I -2-a	-	-	2	-	1	-	-	-	-	2	
		右		-	-	2	-	1	-	-	-	-	3	
	ヒレシャコ	左		-	1	1	1	-	1	-	-	-	4	3
		右		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
	シャコガイ科不明	完形 左		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1
		右		-	1	-	1	-	1	-	-	-	3	
ヌメガイ	ヌメガイ	完形 左		-	1	-	1	-	-	-	-	-	2	7
		右		-	-	5	-	-	-	-	-	-	5	
		殻頭 右	II -1-c	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	
	アラスジケマンガイ	破片 左		-	-	2	10	-	-	-	-	-	12	23,381
		右		-	-	1	4	-	-	-	-	-	5	
	ホソスジイナミガイ	左		34	301	321	10,287	97	23	61	10	1	11,135	11,629
		右		44	321	319	10,297	80	26	56	13	3	11,159	
マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	完形 左	III -1-c	7	22	23	397	3	-	-	-	-	452	518
		右		4	18	33	408	4	1	2	-	-	470	
		左		-	1	3	75	-	-	-	-	-	79	
		右		1	5	7	73	-	-	-	-	-	86	
	イオウハマグリ	完形 左		1	1	-	243	-	1	-	-	-	246	91
		右		3	-	1	252	1	2	-	1	-	260	
	マルオミナエシ	殻頭 左	II -1-c	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	1
		右		1	-	-	5	-	-	-	-	-	6	
リュウキュウアサリ	リュウキュウアサリ	左		-	-	4	-	-	-	-	-	-	4	4
		右		1	-	-	3	-	-	-	-	-	4	
		左		-	3	4	434	1	-	-	-	-	442	25,318
		右		-	4	3	449	1	-	1	1	-	459	
	イオウハマグリ	殻頭 左	II -2-c	1	-	1	56	-	-	-	-	-	58	1,049
		右		-	-	59	-	-	-	-	-	-	59	
	マルオミナエシ	左		-	-	-	17	-	-	-	-	-	17	173
		右		-	-	-	14	-	-	-	-	-	14	
	リュウキュウアサリ	完形 左	II -1-c	-	3	6	73	-	-	1	-	-	83	91
		右		-	3	5	72	-	-	1	-	-	81	
		左		-	-	8	-	-	-	-	-	-	8	
		右		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
	リュウキュウアサリ	殻頭 左	II -2-c	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	15
		右		-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	
	リュウキュウアサリ	左		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	4
		右		-	-	-	5	-	-	-	-	-	5	
	リュウキュウアサリ	左		-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	
		右		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第33表 貝類遺体出土一覧（二枚貝3）

科名	貝種名	残存	左右	生息地	表記	層序				通構			合計	最少 個体数			
						I層	II層	III層	IV層	(標示)	土坑1	土坑2	土坑3				
マルダレガイ科	ヒメリュウキュウアサリ		左	II-2-c	-	1	-	4	-	-	-	-	-	5	9		
					-	-	1	4	-	-	-	-	-	5			
			右		-	1	-	3	-	-	-	-	-	4			
					-	-	-	2	-	-	-	-	-	2			
	ハマグリ類		左	II-2-c	-	-	-	24	-	-	1	-	-	25	51		
					-	-	5	20	-	-	-	-	-	25			
			右		-	3	-	17	-	1	-	-	-	1			
					2	4	2	17	-	1	-	-	-	26			
	ダテオキシジミ		左	II-2-c	-	-	1	6	-	-	-	-	-	7	15		
					-	1	1	7	-	-	-	-	-	9			
			右		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
					-	-	4	7	-	-	-	-	-	11			
	マルダレガイ科不明		左	II-2-c	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	3		
					-	-	2	2	-	-	-	-	-	4			
			右		-	-	-	3	-	-	-	-	-	3			
					-	-	-	2	-	-	-	-	-	2			
			破片		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	完形	右	I-1-c	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1 1 1 1		
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	破片	右	II-1-c	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	1 1		
	モチヅキザラ	完形	右	I-2-c	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1 1		
シオサザナミ科	マスオガイ	完形	左	II-1-c	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1		
					-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
		右			-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
					-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
	リュウキュウマスオ	完形	左		-	-	1	3	-	-	-	-	-	4	6		
					-	-	-	2	-	-	-	-	-	2			
		殻頂	右		-	1	-	2	-	-	1	-	-	4			
					-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	完形	左	II-2-c	-	1	1	5	-	-	-	-	-	7	7		
					-	-	1	4	-	-	-	-	-	5			
		殻頂	右		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
チドリマスオ科	イソハマグリ	完形	左	I-1-c	1	-	1	14	-	2	-	-	-	18	18		
					1	-	1	10	-	-	-	-	-	12			
		殻頂	右		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
科不明	種不明	破片	左	-	-	1	-	6	-	-	-	-	-	7	1		
					-	-	-	6	-	-	-	-	-	6			
合計						111	760	820	24,802	196	61	145	28	5	27,018	13,426	

第34表 ブタ・イノシシ出土一覧

種類	部位	残存状況	種序				遺構		合計
			I 刻	II 刻	III 刻	IV 刻	石積み 1	土坑 1	
ブタ・ イノシシ	頭蓋骨	骨端のみ	—	—	—	—	1	—	1
		破片	—	7	1	8	—	—	17
	上顎骨	破片	L	—	—	1	—	—	1
		骨端部	L	1	—	—	—	—	1
	下顎骨	骨幹	L	—	—	1	—	—	3
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	1
	環椎	完形	—	—	1	—	—	—	1
		完形	—	—	—	2	—	—	2
	椎體	—	—	—	1	—	—	—	3
		完形	—	—	2	—	—	—	2
	胸椎	骨幹	—	1	2	—	—	—	3
		椎体	—	—	1	4	—	—	5
	腰椎	破片	—	—	2	—	—	—	2
		椎体	—	—	1	—	—	—	1
	椎骨	破片	—	—	2	—	—	—	2
		完形	L	—	—	1	—	—	1
	肩甲骨	骨端部	L	—	—	1	1	—	4
		骨幹	R	2	—	2	—	—	4
		骨幹	L	—	—	1	—	—	1
	上腕骨	骨端部	L	—	—	3	—	—	3
		骨端のみ	R	—	—	2	—	—	1
		破片	R	—	—	2	—	—	2
		LR 不明	—	—	1	—	—	—	1
	橈骨	完形	R	—	1	—	—	—	1
		骨端部	L	—	—	1	—	—	1
		完形	L	—	—	1	—	—	1
	尺骨	骨端部	R	1	—	—	—	—	1
		完形	L	—	—	2	—	—	2
	中手骨(Ⅲ)	骨端部	L	—	—	1	—	—	1
		骨端部	R	—	—	1	—	—	1
		完形	R	—	—	1	—	—	1
	中手骨(Ⅲ or Ⅳ)	骨端部	L	—	—	1	—	—	1
	中手骨(Ⅳ)	骨端部	L	1	—	—	—	—	1
	中手骨(Ⅴ)	骨端部	R	—	—	1	—	—	1
	対角骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1
		破片	R	—	1	—	—	—	3
	大腿骨	骨端部	L	1	—	2	—	—	3
		骨端部	R	1	—	—	—	—	1
		骨端のみ	L	—	—	1	—	—	1
		破片	R	—	—	2	—	—	2
	腰骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	1
		骨端部	L	1	—	2	—	—	3
		骨端部	R	1	—	—	—	—	1
	骨端のみ	骨端のみ	L	—	—	1	—	—	1
		破片	R	—	—	2	—	—	2
	骨幹	骨幹	L	—	—	1	—	—	1
		LR 不明	L	—	—	1	—	—	1
	四肢骨	完形	R	1	—	—	—	—	1
		骨端部	L	—	—	1	—	—	1
		骨幹	R	2	—	1	—	—	3
		骨幹	L	1	—	—	—	—	1
	四肢骨	骨幹	R	—	1	—	—	—	1
		破片	LR 不明	—	—	3	—	—	3
	脛骨	骨端部	R	—	—	1	—	—	1
		骨端部	L	—	—	1	—	—	1
	膝骨	完形	L	1	—	—	—	—	1
		骨端部	R	—	—	1	—	—	1
	踵骨	完形	L	—	—	1	—	—	1
		骨端部	R	—	—	1	—	—	1
	中足骨(Ⅲ)	完形	L	1	—	2	—	—	3
		骨端部	R	—	—	1	—	—	1
	中足骨(Ⅴ)	完形	L	—	—	1	—	—	1
		骨端部	R	—	—	1	—	—	1
	中手・中足骨	完形	L	—	—	1	—	—	1
		基節骨	L	—	—	—	1	—	1
	木距骨	完形	R	—	1	—	—	—	1
		骨幹	R	—	—	1	—	—	2
	脛骨	破片	L	—	—	1	—	—	1
		骨端部	R	—	1	7	—	—	9
	脛骨	骨幹	R	—	1	26	—	—	33
		骨幹	LR 不明	5	1	—	—	1	42
	部位不明	骨幹	LR 不明	—	—	1	—	—	1
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	1
		下顎骨	破片	—	—	1	—	—	1
		足根骨	完形	—	—	—	1	—	1
ブタ・ イノシシ?	脛骨	骨端部	LR 不明	—	—	1	—	—	1
		骨幹	LR 不明	—	—	1	—	—	1
	脚骨	骨幹	LR 不明	—	—	1	—	—	4
	脚骨	骨幹	LR 不明	—	—	3	—	—	3
合計			28	14	106	3	1	6	156
									149
									7

第35表 ウシ・ウマ出土一覧

種類	部位	残存状況	層序			遺構		合計		
			I層	II層	III層	石積みI	土坑I			
ウシ	下顎骨	骨端部 L	1	—	1	—	—	3	38	
		破片	—	1	—	—	—			
	顎歯	L	—	—	1	—	—	3		
		R	—	1	—	—	—			
	前椎	椎体	—	—	1	—	—	1		
		頭椎	—	—	—	1	—			
	胸椎	椎体	—	—	—	1	—	1		
		肩甲骨	L	—	—	1	—			
	上腕骨	骨端のみ	L	—	—	1	—	1		
		骨端部	L	—	—	1	—			
ウシ・ウマ	中手骨	骨端部	L	—	—	1	—	1	31	
		破片	LR 不明	—	—	2	—			
	貢骨	骨幹	R	1	—	—	—	1		
		脛骨	L	—	—	1	—			
	脛骨	骨幹	R	1	—	—	—	2		
		跗骨	L	—	—	1	—			
	跗骨	骨端部	L	—	—	1	—	1		
		完形	L	—	—	1	—			
	中足骨	骨端部	L	1	—	—	—	1		
		破片	LR 不明	1	—	—	—			
ウシ・ウマ	第4中心足根骨	骨端部	R	—	—	1	—	1	16	
		破片	LR 不明	—	—	—	—			
	基礎骨	完形	L	—	—	1	—	3		
		R	—	—	1	—	—			
	未節骨	骨端部	R	—	—	1	—	1		
		完形	L	1	—	1	—			
	肋骨	骨端部	LR 不明	—	—	2	—	2		
		骨幹	LR 不明	—	—	1	—			
	ウシ?	下顎骨	破片	L	—	—	1	—	1	
		頭蓋骨	破片	LR 不明	—	—	2	—		
ウシ・ウマ	胸椎	骨端部	—	—	—	—	—	1	31	
		椎体	—	—	—	3	—			
	腰骨	破片	—	—	—	2	—	2		
		骨端部	L	—	—	1	—			
	腰骨	骨幹	L	—	—	1	—	1		
		破片	LR 不明	—	—	—	—			
	脛骨	骨幹	R	—	—	—	1	1		
		四股骨	破片	LR 不明	1	—	5	—		
	四肢骨	骨幹	LR 不明	1	—	2	—	3		
		四股骨	破片	LR 不明	1	—	1	—		
ウマ	部位不明	破片	LR 不明	1	—	3	2	—	16	
		下顎骨	骨端部	L	1	—	—	—		
	顎歯	完形	R	—	—	3	—	3		
		脛骨	—	—	1	—	—	1		
	中手骨	骨端部	Z	—	—	—	—	2		
		LR 不明	—	—	—	—	—			
	大臍骨	完形	L	—	—	1	—	1		
		脛骨	骨端部	L	—	2	1	—		
	四肢骨	骨端部	R	—	—	1	—	1		
		中足骨	骨端部	L	1	—	—	—		
	中手・中足骨	骨端のみ	LR 不明	—	—	1	—	1		
		未節骨	完形	L	—	—	1	—		
	四肢骨	骨端部	LR 不明	—	—	1	—	1		
		部位不明	破片	LR 不明	1	—	—	—		
合計			15	11	56	1	3	86		

第36表 ジュゴン・海獣・ヤギ・トリ・イヌ・種不明出土一覧

種類	部位	残存状況	表記	層序				遺構			合計			
				I層	II層	III層	IV層	石積み1	土坑1	土坑2				
ジュゴン	椎骨	破片	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1
海獣	部位不明	破片	LR不明	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	1
ヤギ	肩甲骨	骨端部	L	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1
トリ	尺骨	骨端部	R	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1
イヌ	切歯	完形	LR不明	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	2
	脛骨	骨端部	L	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	2
種不明	頭蓋骨	破片	LR不明	—	3	—	23	—	—	1	—	27	27	
	下顎骨	破片	R	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	
	椎骨	椎体	—	—	—	—	4	—	—	—	—	4	4	7
		破片	—	—	—	1	2	—	—	—	—	3	3	
	肩甲骨	破片	LR不明	—	2	—	—	—	—	—	—	2	2	
	四肢骨	破片	LR不明	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	
	肋骨	骨幹	LR不明	1	1	5	11	—	1	2	—	21	21	
		破片	LR不明	—	2	—	—	—	—	—	—	2	2	23
	軟骨?	破片	LR不明	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	
		骨端部	LR不明	—	—	—	2	—	—	—	—	2	2	
	部位不明	骨端のみ	LR不明	—	—	2	—	—	—	1	—	3	3	
		骨幹	LR不明	—	—	—	3	1	—	—	—	4	4	94
		破片	LR不明	1	16	6	57	2	—	2	1	85	85	
合計				2	28	17	104	3	2	6	1	163		

第37表 魚類出土一覧

種類	部位	残存状況	表記	層序				遺構			合計			
				I層	II層	III層	IV層	石積み1	土坑1					
ダツ科	歯骨	破片	R	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1	
カマス科	歯骨	破片	R	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
アジ科	歯骨	破片	L	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
タイ科 クロダイ属	前上顎骨	完形	L	—	—	1	1	—	—	—	2	2		
	歯骨	完形	L	—	—	2	—	—	—	—	2	2	5	
エフキダイ科 アマミエフキ型	前上顎骨	完形	L	—	—	1	—	—	—	—	1	1		
	主上顎骨	破片	L	—	—	1	—	—	—	—	1	1	2	
エフキダイ科	歯骨	完形	L	—	1	1	—	—	—	—	1	1	4	
	破片	—	L	—	—	1	—	—	—	1	2	2		
	角骨	破片	R	—	—	1	—	—	—	—	1	1	2	
	方骨	破片	R	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
	口蓋	破片	L	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
ベラ科 シロクラベラ型	前歯骨	破片	R	—	—	1	—	—	—	—	1	1	2	
	下頬歯骨	完形	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
ブダイ科	前上顎骨	完形	L	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
モンガラカワハギ科	背鰭骨	完形	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	
ハリセンボン科	棘	完形	—	—	—	4	—	—	—	—	4	4	4	
種不明	頭蓋骨	破片	—	—	—	2	—	—	—	—	2	2		
	前歯器骨	破片	L R不明	—	1	—	—	—	—	—	1	1		
	舌骨	完形	L R不明	—	—	1	—	—	—	—	1	1		
	肩甲骨	破片	L	—	—	1	—	—	—	—	1	1		
	椎骨	完形	—	2	—	3	—	—	—	5	—	6		
		破片	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	7	
		完形	—	—	—	5	—	—	—	—	5	7		
	背鰭骨	破片	—	—	—	1	1	—	—	—	2	2		
部位不明				L R不明	1	—	10	—	—	—	—	11	11	29
合計				4	5	47	1	1	—	—	58			

参考文献

<土器・陶磁器類>

- ・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982
- ・安里進・上原政昌・家田淳一「墳跡編年からみた近世琉球窯業の展開」『名護博物館紀要3号』 1987
- ・知念勇・池田栄史・江藤和幸「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」『沖縄県立博物館紀要』第143号 1988
- ・今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書 第14集 1991
- ・那覇市教育委員会『薺屋古窯群Ⅰ』那覇市文化財調査報告書 第23集 1992
- ・沖縄県教育委員会『湧田古窯群（I）』沖縄県文化財調査報告書 第111集 1993
- ・金武正紀「沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁」『シンポジウム陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器』東南アジア考古学会 2004
- ・新垣力・瀬戸哲也「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理」『紀要 沖縄埋文研究3』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005
- ・瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志「沖縄における貿易陶磁研究」『紀要 沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007
- ・「琉球諸島出土キセルの基礎的研究～琉球喫煙文化の研究～」『東京大学考古学研究室研究紀要』第25号 東京大学考古学研究室 石井龍太 2011
- ・新垣力「17世紀前半～中葉の琉球陶器について—「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響—」『鹿児島考古』第43号 鹿児島考古学会 2013
- ・瀬戸哲也「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」『中近世陶磁器の考古学』第1巻 2015
- ・新里亮人『琉球國成立前夜の考古学』 同成社 2018

<自然遺物関連>

- ・沖縄県教育委員会『石川市 古我地原貝塚一沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告（6）－本文編－』沖縄県文化財調査報告書第84集 1987
- ・勝連町教育委員会『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』勝連町の文化財第11集 1990
- ・今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集 1991
- ・沖縄県教育委員会『平敷屋トウハウ遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第125集 1996
- ・本部町教育委員会『瀬底島・アンチの上貝塚一個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告－』本部町文化財調査報告書 第9集 2009
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書（1）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 2010
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（1）－』前同第54集 2010
- ・沖縄県うるま市教育委員会『勝連城跡－四の曲輪北区発掘調査報告書－』うるま市文化財調査報告書第14集 2011
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－銭蔵地区発掘調査報告書－』前同第77集 2015
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－繼世門北地区発掘調査報告書－』前同第97集 2018

第IV章 総括

比屋根地域は、琉球国時代には美里間切に含まれ、『絵図郷村帳（1649年）』にその名が見られる。比屋根遺跡が所在する小丘陵は、『琉球国由来記（1713年）』に「オシアゲ森（ムイ）」と記載される御嶽であると推定され、「大殿（ウフドゥン）」と呼ばれる比屋根地域の現在の拝所は、同由来記に記載されている「比屋根之殿」に当たると考えられている。また、沖縄市教育委員会が昭和56年度に実施した遺跡詳細分布調査でも土器や青磁等の中国産陶磁器、沖縄産陶器等が表採され、グスク時代から近世・近代にかけての遺跡であることが確認されている。これらのことから、比屋根地域がその起源を近世以前にまで遡る古村であることが窺える。

今回の調査においても、近代及び近世からグスク時代に該当する遺物が多く出土しており、比屋根地域ではグスク時代以降、継続して人の営みがあったことが再確認された。出土遺物の中でも、比較的分類可能な資料が多かったのは青磁であり、14世紀半ばから16世紀後半（沖縄分類・瀬戸ほか2007のⅣ類からⅦ類相当）のものが認められ、この期間が当遺跡のグスク時代における盛行期と考えられる。

遺構は石積み・集石・貝溜まり・土坑が確認されているが、各遺構の時期は、共伴遺物や検出層位等から判断すると、石積みが戦後、集石・貝溜まりや土坑1・2は近世、土坑3はグスク時代に該当すると考えられる。石積みは調査区の北東に隣接する、方形状の平坦な区画の土留めのために造られたものと考えられる。この区画は、現在の獅子屋や伊礼門中の拝所が設置される以前は、元々屋敷跡の敷地であった可能性が考えられる。この石積み自体は近代以降の造作であるが、方形状の平坦な区画側の調査区北東側壁面の土層をみると、近世の遺物包含層が厚く堆積しており、この区画の造成は近世まで遡る可能性が高い。各土坑の性格は現時点では不明であるが、集石と貝溜りについて、北東側の方形状の平坦な区画に伴う遺構と考えられる。

今回の調査結果から、少なくとも調査区周辺については、グスク時代から人々の営みがあったことが確実となった。また、近世の造成土の存在は、近世に方形状の平坦な区画を造る大きな敷地造成が行なわれ、戦後にも石積みを造り、現在にいたることが確認された。今回の調査だけでは一概には言えないものの、比屋根遺跡を含む丘陵（オシアゲ森）の複数ある方形状の平坦な区画は古くは近世に造成された可能性が考えられる。

また丘陵全体を見た場合、大殿が所在する丘陵頂上部については、現況では、大きな地形の変化は見受けられない。そのため、丘陵頂上部には、グスク時代の遺構等が残されている可能性が考えられる。また、今後は隣接する他の方形区画についても、その用途を明確化するため、引き続き調査等が必要と考える。

沖縄市東部には、比屋根遺跡と類似する大里エーヤマ遺跡や与儀遺跡が所在している。発掘調査等は行なっていないが、今回の比屋根遺跡の調査成果から、当地域のグスク時代から現集落への変遷の過程の一端を垣間見ることができた。

図 版



調査区の現況（南東より）



調査区の現況（北西より）



調査区の現況（北より）



調査区の現況（南より）



調査区の伐採後状況（南東より）



調査区の伐採後状況（北西より）



調査区の伐採後状況（北より）



調査区の伐採後状況（南より）

図版4 調査区の現況・伐採後状況



精査後状況全景（西より）



精査後状況全景（南より）



精査後状況詳細1（南西より）



精査後状況詳細2（南西より）



精査後状況詳細3（南西より）



基底石検出状況（南より）



基底石完掘状況（西より）



基底石完掘状況（南より）

図版5 石積み1



精査後状況全景（南西より）



精査後状況全景（北西より）



精査後状況全景（南より）



精査後状況詳細 1（北西より）



精査後状況詳細 2（西より）



精査後状況詳細 3（西より）



精査後状況詳細 4（西より）



精査後状況詳細 5（西より）

図版 6 石積み 2



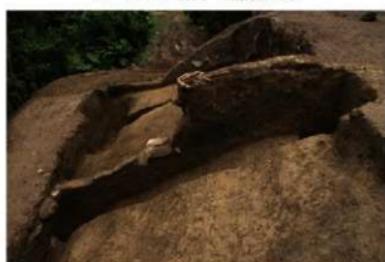
SP C ~ C' 断面 (南より)



SP C ~ C' 断面 (南東より)



SP D ~ D' 断面 (南より)



SP D ~ D' 断面 (南東より)



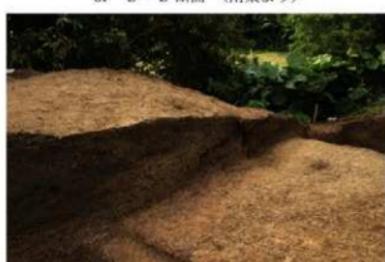
SP E ~ E' 断面 (東より)



SP E ~ E' 断面 (南東より)



SP G ~ G' 断面 (北西より)



SP H ~ H' 断面 (南東より)

図版 7 層序



集石検出状況（西より）



集石検出状況（南東より）



集石検出状況（北東より）



集石検出状況（北西より）



貝溜まり検出状況（西より）



貝溜まり検出状況（南東より）



貝溜まり検出状況（北東より）



貝溜まり検出状況（北西より）

図版8 集石・貝溜まり



貝溜まり完掘状況（西より）



貝溜まり完掘状況（南東より）



貝溜まり完掘状況（北東より）



貝溜まり完掘状況（北西より）



獣骨出土状況（南西より）



獣骨出土状況（北西より）



獣骨出土状況（北東より）



獣骨出土状況（北西より）

図版9 貝溜まり・獣骨



土坑 1 検出状況（南西より）



土坑 1 検出状況（北西より）



土坑 1 完掘状況（南西より）



土坑 1 完掘状況（北西より）



土坑 2 検出状況（南西より）



土坑 2 検出状況（南東より）



土坑 2 完掘状況（南西より）



土坑 2 完掘状況（南東より）

図版 10 土坑 1・土坑 2



土坑3 検出状況（北西より）



土坑3 検出状況（東より）



土坑3 ピット検出状況（南より）



土坑3 ピットの断面状況（北西より）



土坑3 完掘状況（南より）



土坑3 完掘状況（西より）



土坑3 完掘状況 完掘状況（南西より）



土坑3 調査区外延伸状況（南西より）

図版 11 土坑3・ピット



近世の遺物包含層検出状況（南東より）



近世の造成土検出状況（南東より）



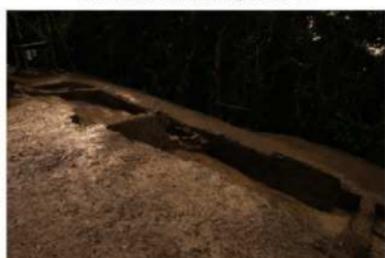
近世の遺物包含層検出状況（北西より）



近世の造成土検出状況（北西より）



近世の遺物包含層検出状況（北より）



近世の造成土検出状況（北より）



近世の遺物包含層検出状況（東より）



近世の造成土検出状況（東より）

図版 12 近世の遺物包含層・近世の造成土検出状況

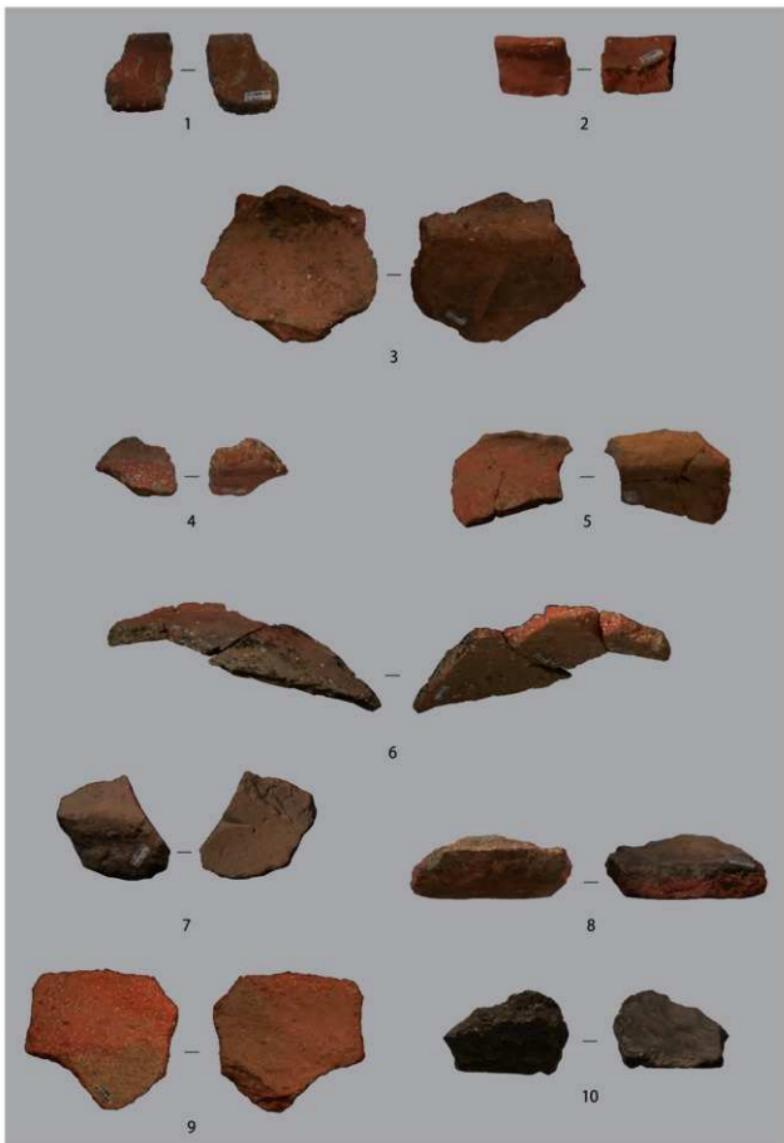


調査区完掘状況全景（南東より）



調査区完掘状況全景（東より）

図版 13 完掘状況



図版 14 土器



図版 15 青磁 1



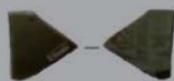
11



10



12



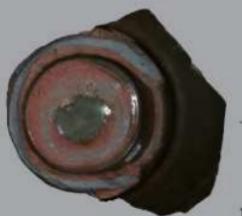
13



14



15



16

図版 16 青磁 2



17



18



19



20



21



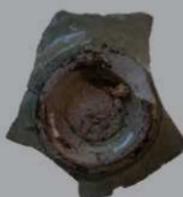
22



23



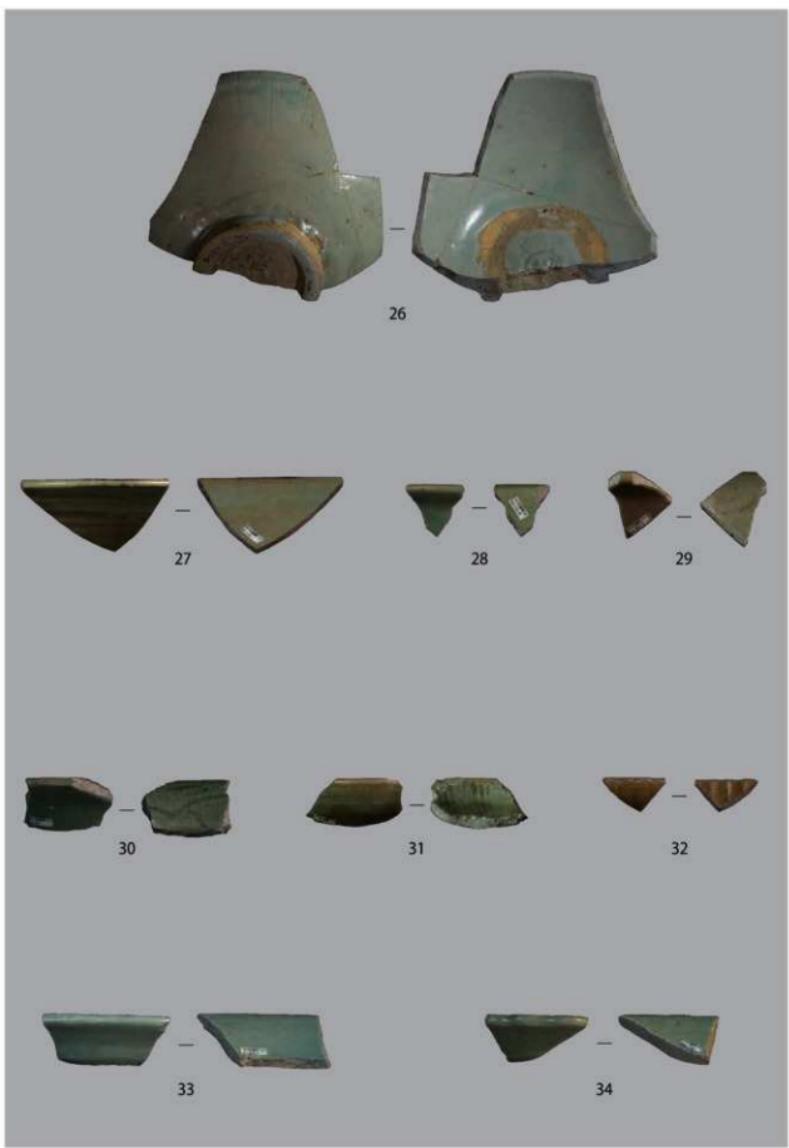
24



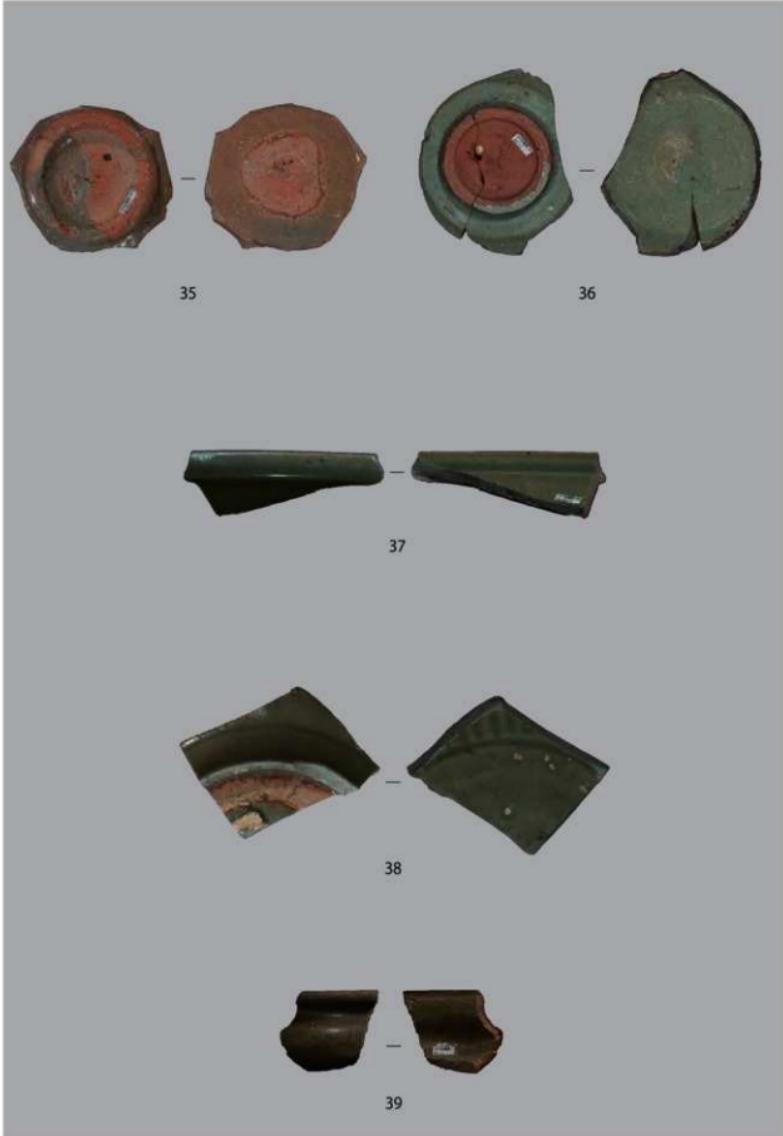
25



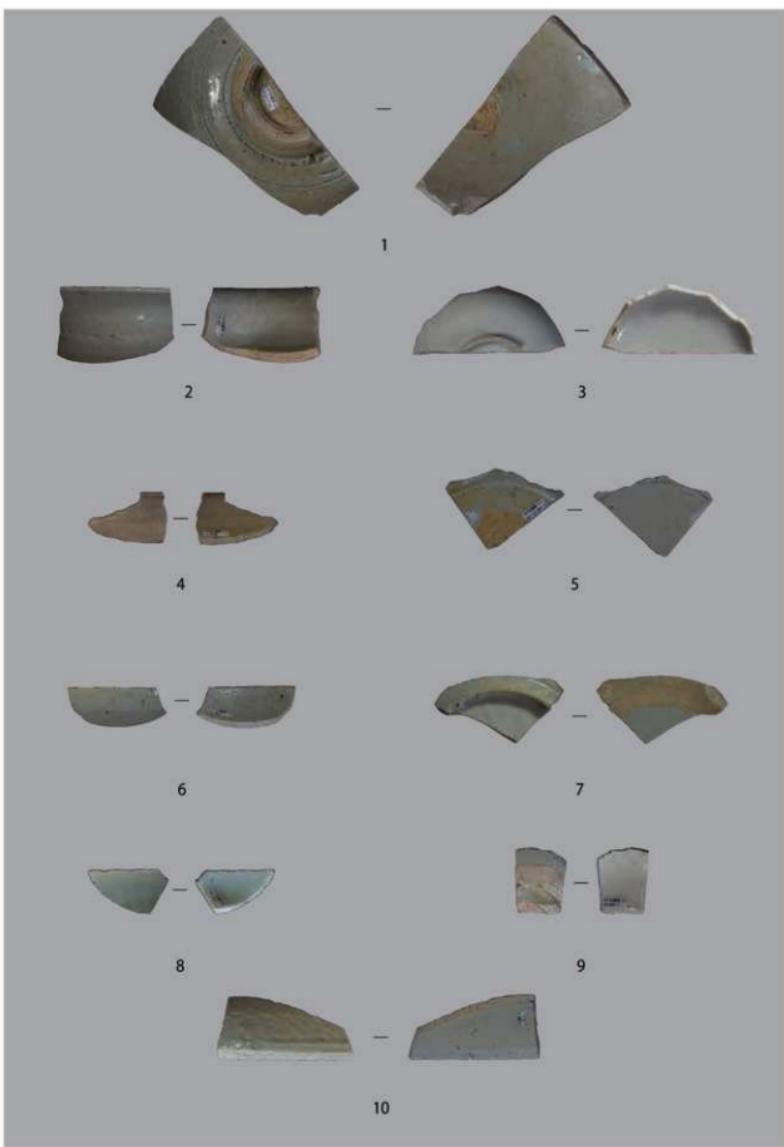
图版 17 青磁 3



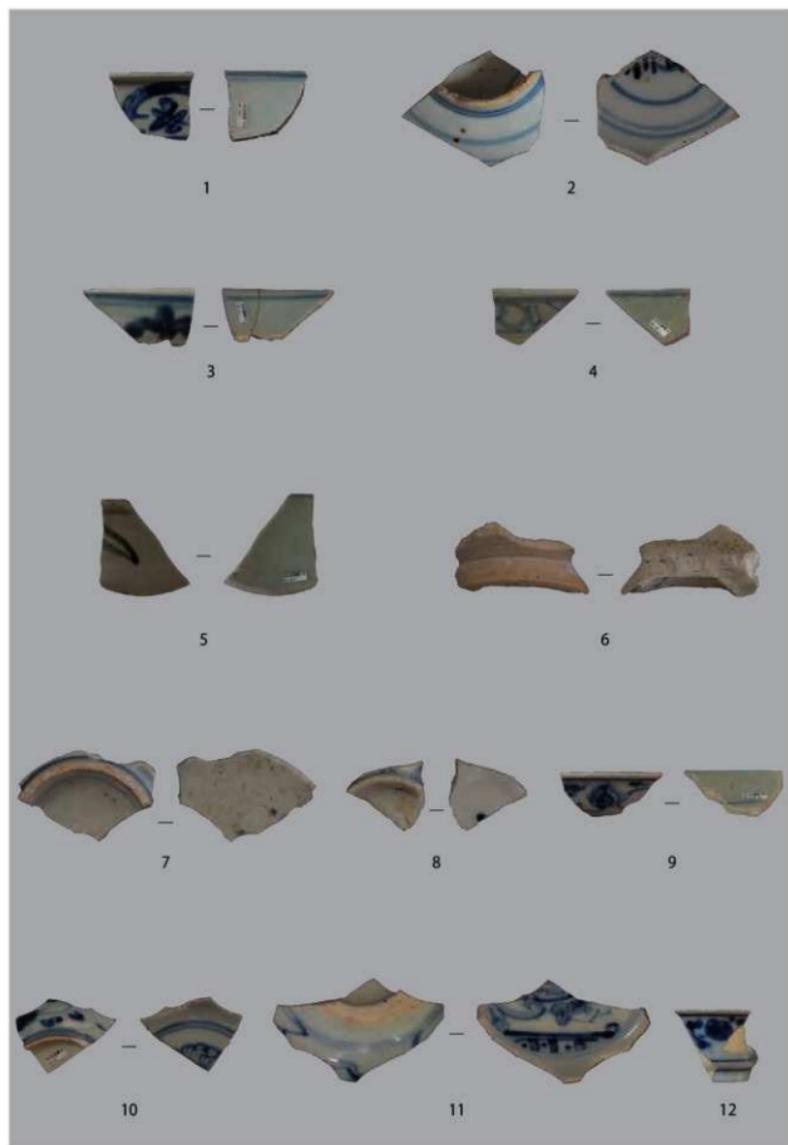
図版 18 青磁 4



图版 19 青磁 5



図版 20 白磁



图版 21 青花



1



2



3



4

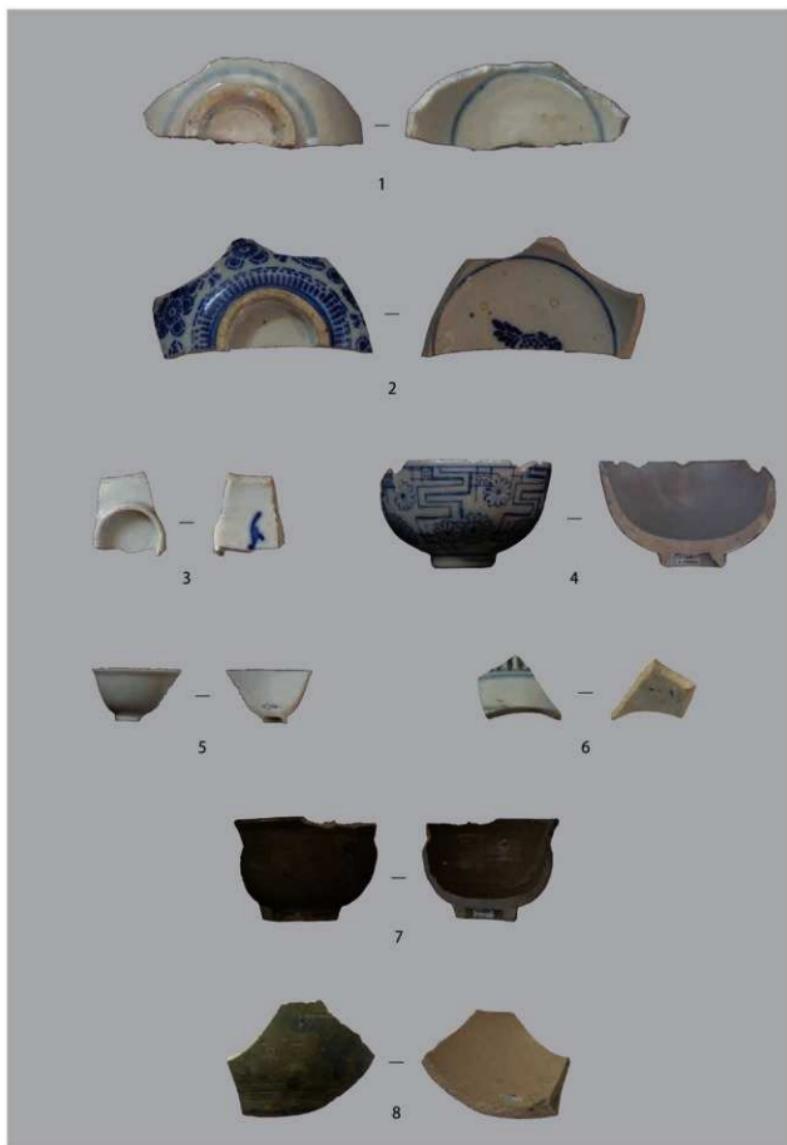


5



6

図版 22 その他の輸入陶磁器



図版 23 本土産陶磁器



図版 24 沖縄産陶器 1



12



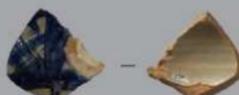
13



14



15



16



17



18



19



20

図版 25 沖縄産陶器 2



21



22



23



24



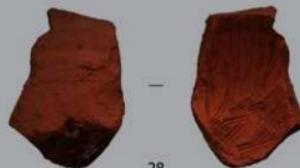
25



26



27



28

図版 26 沖縄産陶器 3



29



30



31



32



33



34

図版 27 沖縄産陶器 4



35



36



37



38



39



40

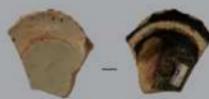


41



42

図版 28 沖縄産陶器 5



1



2



3



4



5



4



5



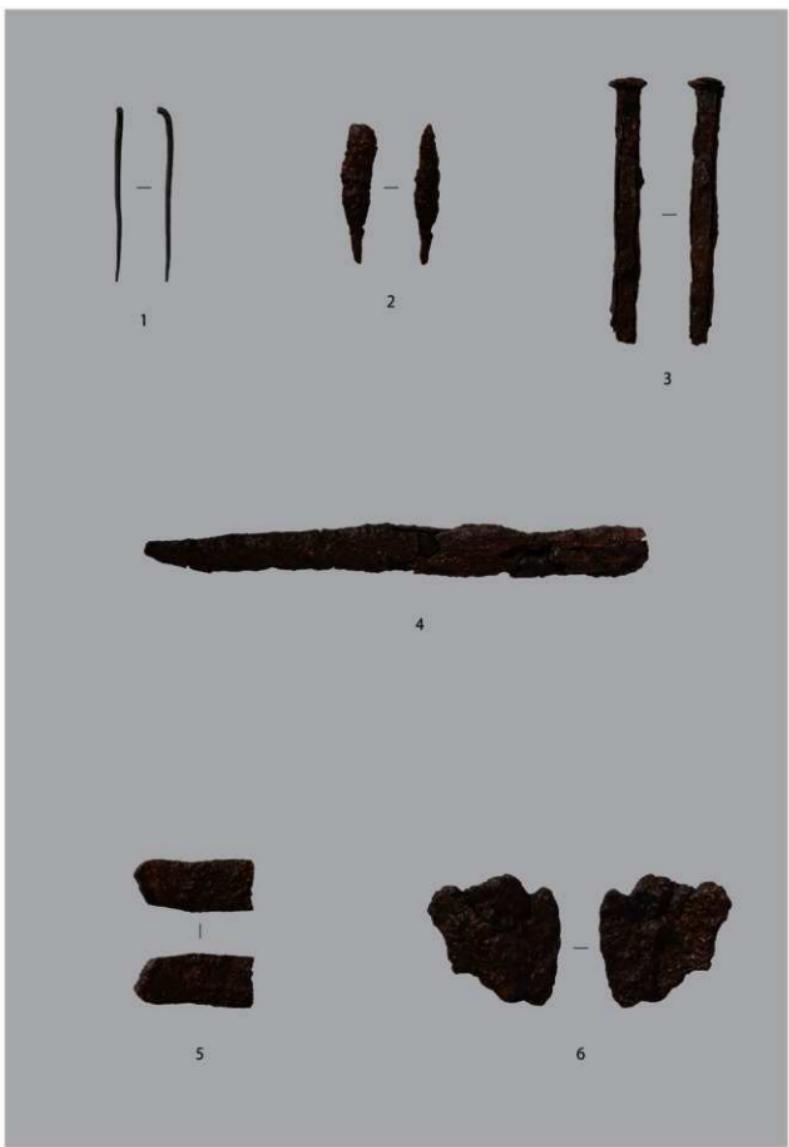
6



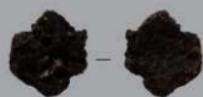
6



図版 29 円盤状製品・土製品・瓦



図版 30 金属製品 1



7



8



1



2



3



4



5

図版 31 金属製品 2・錢貨



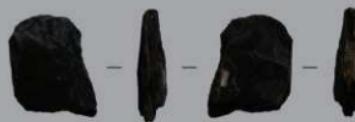
1



3



2



4



1



-



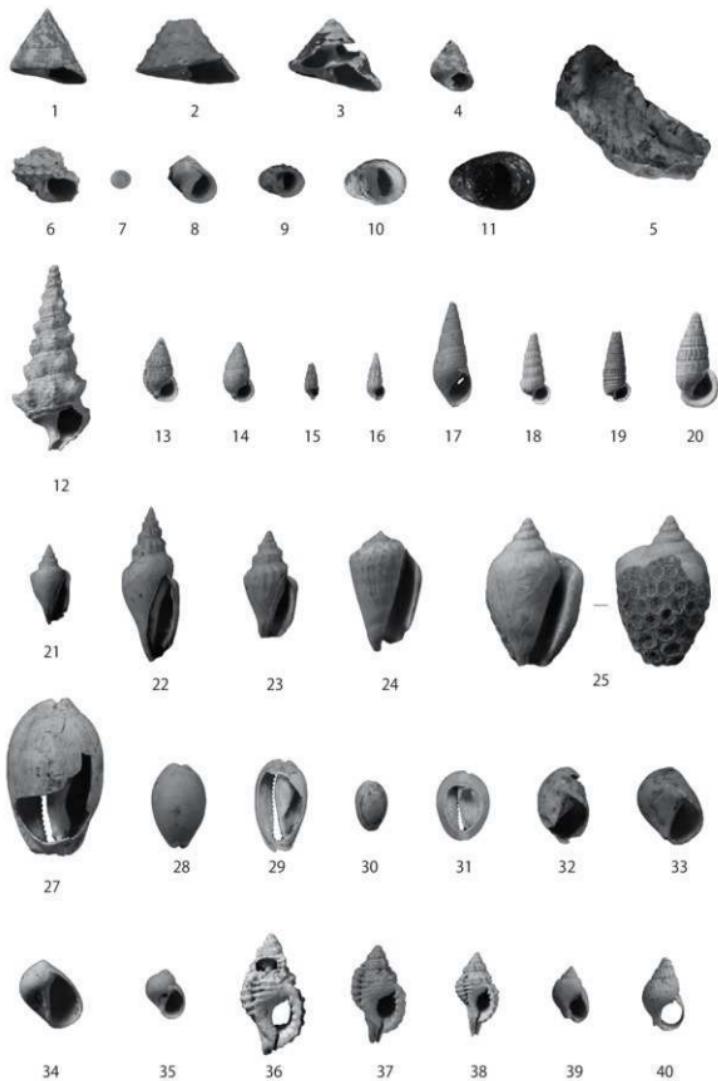
5



図版 32 石器

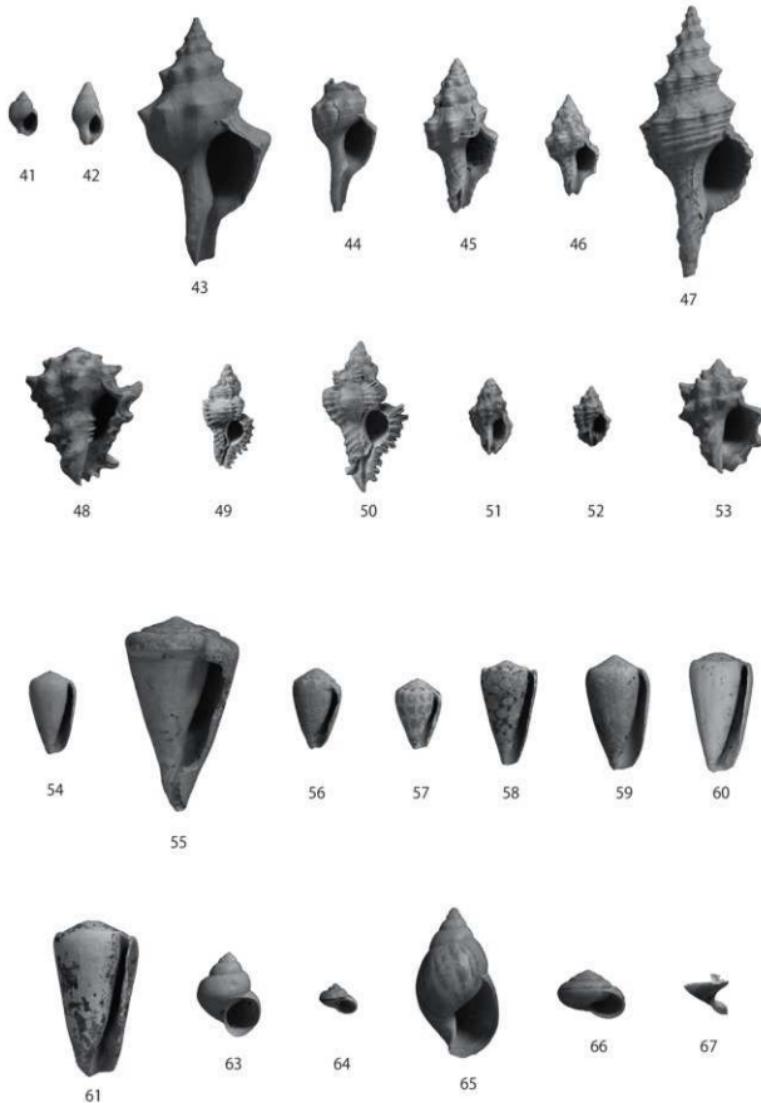


図版 33 貝製品・骨製品

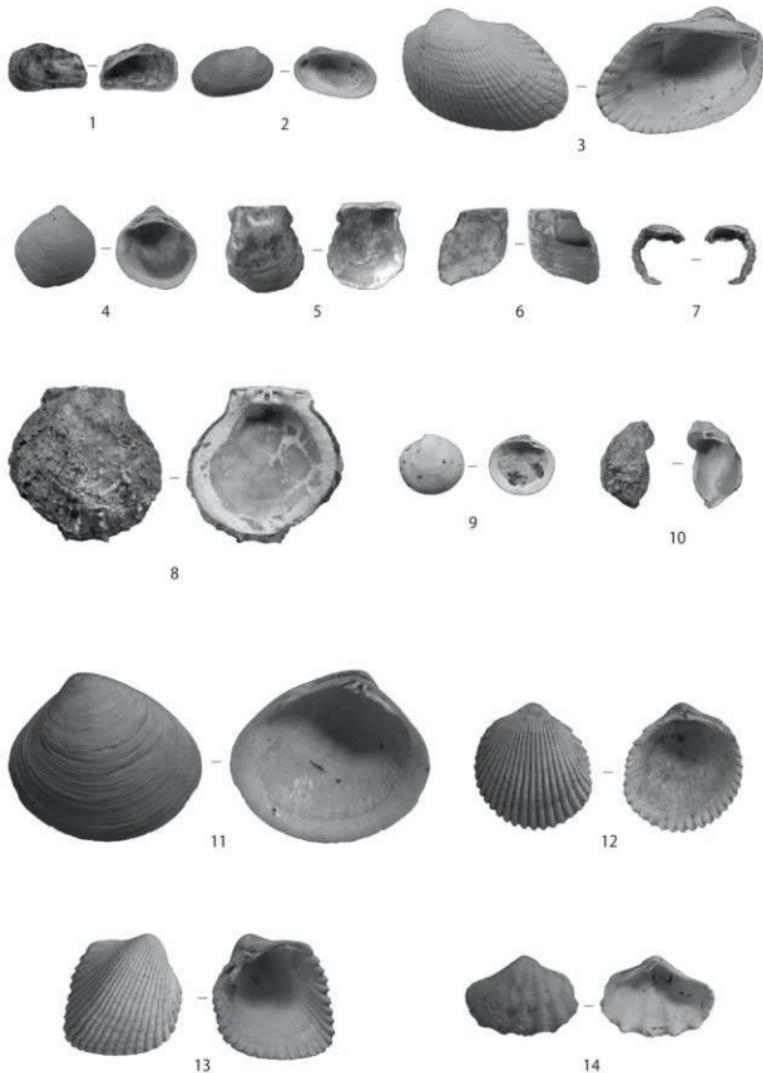


*遺物番号は、第31表に準ずる。

図版34 卷貝1



※遺物番号は、第31表に準ずる。



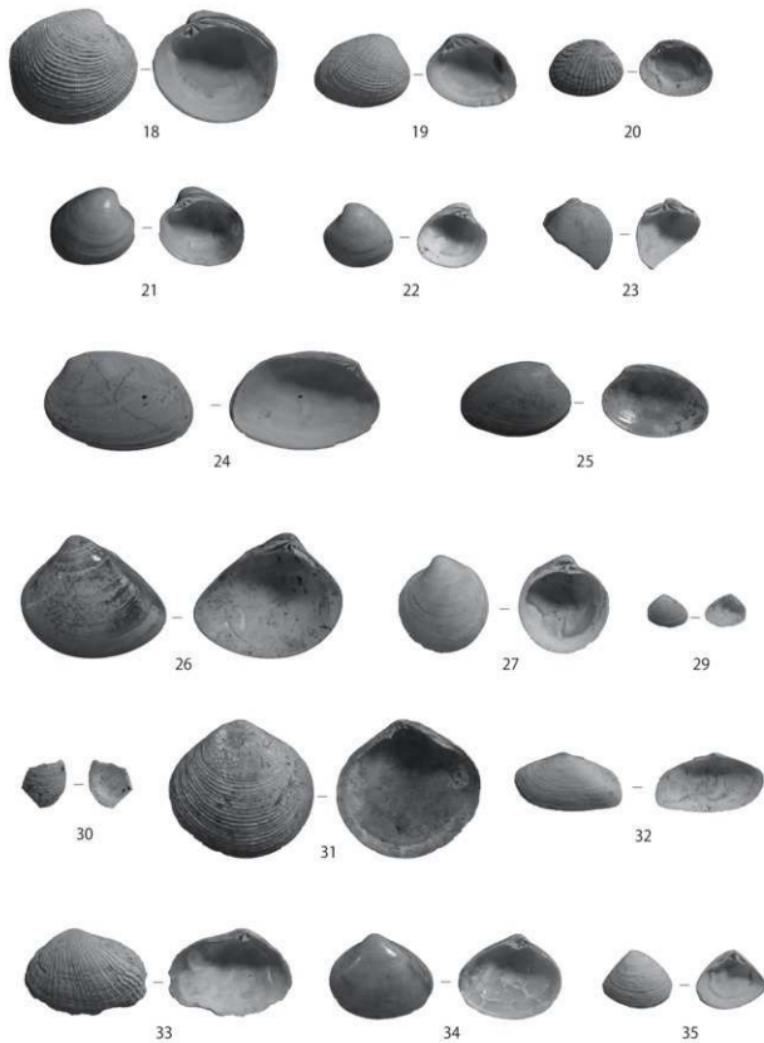
図版 36 二枚貝 1

*遺物番号は、第 31 表に準ずる。



図版 37 二枚貝 2

※遺物番号は、第 31 表に準ずる。



*遺物番号は、第 31 表に準ずる。

図版 38 二枚貝 3



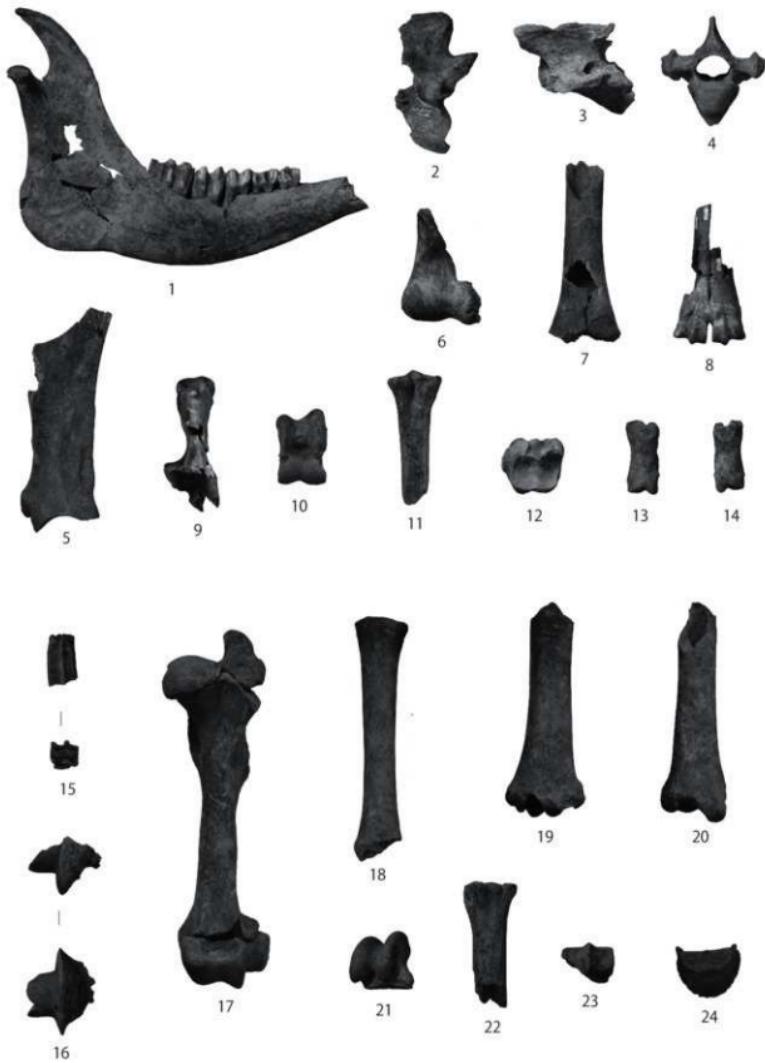
ダツ科 1.歯骨 R カマス科 2.歯骨 R アジ科 3.歯骨 L タイ科クロダイ属 4.前上顎骨 L、5.歯骨 L
 フエキダイ科アマミフエキ型 6.前上顎骨 L フエキダイ科 7.歯骨 L 8.角骨 R、9.方骨 R、10.口蓋 L、11.前總蓋骨 L
 ベラ科シロクラベラ型 12.上咽頭骨 R、13.下咽頭骨 ブダイ科 14.前上顎 L モンガラカワハギ科 15.背鰭棘

図版 39 館内動物遺体 1



ジュゴン 1. 椎骨 トリ 2. 尺骨 R イヌ 3. 切歯 LR 不明 ヤギ 4. 桡骨 R ブタ・イノシシ 5. 下顎骨 L. 6. 環椎、7. 軸椎、8. 胸椎、9. 肩甲骨 R. 10. 上腕骨 R. 11. 中手骨(III)L. 12. 脛骨 R. 13. 横骨 R. 14. 隆骨 R. 15. 中足骨 R. 16. 末節骨

図版 40 脊椎動物遺体 2



ウシ 1. 下頸骨 L. 2. 軸椎. 3. 頸椎. 4. 胸椎. 5. 肩甲骨 L. 6. 上腕骨 L. 7. 桡骨 L. 8. 手骨 L. 9. 跖骨 L. 10. 距骨 L. 11. 中足骨 L. 12. 第4中心足根骨 R. 13. 基節骨 R. 14. 基節骨 L. ウマ 15. 逆離歯 R. 16. 軸椎（カットマークあり）、17. 大腿骨 L. 18. 中手骨 LR 不明、19. 脛骨 L（カットマークあり）、20. 腓骨 L. 21. 距骨 R. 22. 中足骨 L. 23. 中手・中足骨 LR 不明. 24. 末節骨

図版 41　脊椎動物遺体 3

報 告 書 抄 錄

比屋根遺跡

—災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

沖縄市文化財調査報告書 第49集

2021（令和3）年3月19日 発行

発 行 沖縄市教育委員会
編 集 沖縄市立郷土博物館
〒 904-0031 沖縄県沖縄市上地 2-19-6
TEL(098)-932-6882
印 刷 株式会社 東洋企画印刷
〒 901-0306 沖縄県糸満市西崎町 4 丁目 21-5
TEL(098)-995-4444

